九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— V —

福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査

1 9 7 4

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、6年目をむかえ、すでに県南部大牟田市から鞍手郡若宮町にまでいたりました。

1971年佐賀県鳥栖市に建設予定されるインターチェンジに土砂を運搬するため，土取り場である小郡市三沢所在県立種畜場から鳥栖を結ぶ専用道路が計画されました。その路線内における遺跡群の調査報告を本報告書に収録しております。

三沢地区は弥生時代各種遺跡が濃密に分布している地域であり、近年、この周辺の津古遺跡、津古内畑遺跡、種畜場内遺跡、北牟田遺跡、横隈山遺跡、花聳遺跡、正原遺跡、ハサコの宮遺跡と県事業、市事業ともに度重なる発掘調査を実施した地域の中心に位置しております。しかしながら短期間の調査であったため、十分意を尽しているとは思いませんが、この状況を御理解のうえ、本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

昭和49年7月1日

福岡県教育委員会

教育長　森　田　　實

例　　言

1．この報告書は，九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち，1971年（昭和46年）に発掘した小郡市所在の埋蔵文化財の調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団の委託事業として，福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ……西谷　正
Ⅱ……酒井仁夫
Ⅲ……酒井仁夫・上野精志
Ⅳ……Richard pearson・酒井仁夫・山手誠治
Ⅴ……酒井仁夫
Ⅵ……上野精志・酒井仁夫
Ⅶ……酒井仁夫

4．遺物の実測は東京大学博士課程の後藤直氏（現福岡市教育委員会文化課技師）が主として当り，遺構，遺物実測図面のトレースは主として伊東登美子氏が行なった。

5．1971年（昭和46年）に行なった九州縦貫道関係の調査は，主として，加藤久嘉主事と，西谷正・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘各技師があたった。

6．本書の編集は，酒井仁夫が担当した。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅴ—
福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査

目　　次

Ⅰ　三沢所在遺跡群の位置……1
Ⅱ　調　査　の　経　過……5
Ⅲ　西　中　隈　遺　跡……9
　1　遺　跡　の　概　況……9
　2　弥生時代の遺構と遺物……10
　3　古墳時代の遺構と遺物……14
Ⅳ　宮　裏　遺　跡……27
　A　遺　跡　の　概　況……27
　B　第　1　地　点……27
　　1.　弥生時代の遺構と遺物……27
　　2.　古墳時代の遺構と遺物……40
　C　第　2　地　点……43
　　1.　弥生時代の遺構と遺物……43
　　2.　古墳時代の遺構と遺物……47
　　3.　歴史時代の遺構と遺物……56
　　4.　石　英　礫　群……57
　D　第　3　地　点……59
　　1.　弥生時代の遺構と遺物……59
　　2.　古墳時代の遺構と遺物……60
Ⅴ　上　棚　田　遺　跡……65
　1　遺　跡　の　概　況……65
　2　古墳時代の遺構と遺物……65
Ⅵ　ハ　サ　コ　の　宮　遺　跡……70
　1　遺　跡　の　概　況……70
　2　弥生時代の遺構と遺物……70
Ⅶ　後　　記……77

図　版　目　次

西　中　隈　遺　跡

本文対照頁

PL. 1　遺跡全景　北より（酒井撮影）……9
PL. 2　（1）北半遺構群全景　南より（酒井撮影）……9
　　（2）第2号竪穴　北より（酒井撮影）……10
PL. 3　（1）南半住居址群全景　北より（酒井撮影）……15
　　（2）第1号住居址　北より（酒井撮影）……15
PL. 4　（1）第2号住居址　東より（酒井撮影）……16
　　（2）第3号住居址　西より（酒井撮影）……16
PL. 5　（1）第4号住居址　北より（酒井撮影）……18
　　（2）第4号住居址内遺物出土状況　南より（酒井撮影）……19
PL. 6　出土遺物（西谷撮影）……10, 15, 18

宮　裏　遺　跡

PL. 7　（1）遺跡遠景　南より（酒井撮影）……27
　　（2）第1地点遠景　西より（酒井撮影）……27
PL. 8　（1）第2地点遠景　北より（酒井撮影）……43
　　（2）第2・第3地点遠景　西より（酒井撮影）……43, 59
PL. 9　第1地点第1～第8号竪穴全景　北より（酒井撮影）……27
PL. 10　第1地点全景　北より（西谷撮影）……27
PL. 11　（1）第1地点第1・第2号竪穴　北より（酒井撮影）……27
　　（2）第1地点第2号竪穴内遺物出土状況　北より（酒井撮影）……27
PL. 12　（1）第1地点第17号竪穴　西より（酒井撮影）……40
　　（2）第1点第4号竪穴　南より（酒井撮影）……31
PL. 13　（1）第1地点第9号竪穴　西より（酒井撮影）……36
　　（2）第1地点第1～第3号竪穴　北より（酒井撮影）……27, 29
PL. 14　（1）第1地点第5号竪穴　西より（酒井撮影）……31
　　（2）第1地点第6～第8号竪穴　北より（酒井撮影）……34
PL. 15　（1）第2地点第1号住居址　北より（酒井撮影）……39
　　（2）第1地点第1・第2号住居址　北より（西谷撮影）……40
PL. 16　（1）第1地点第3号住居址　南より（酒井撮影）……41
　　（2）第1地点第3号住居址竈　南より（酒井撮影）……41
PL. 17　第2地点第1～第3，第7号住居址全景　西より（酒井撮影）……43
PL. 18　（1）第2地点全景　南より（酒井撮影）……43

（2）第2地点南半全景　南より（酒井撮影）……43
PL. 19　（1）第2地点第3号住居址　西より（酒井撮影）……47
（2）第2地点第1・第2号住居址　北より（西谷撮影）……47
PL. 20　（1）第2地点第4号住居址　北より（酒井撮影）……50
（2）第2地点第5号住居址　南より（酒井撮影）……51
PL. 21　（1）第2地点第4・第5号住居址　北より（酒井撮影）……50, 51
（2）第2地点第6号住居址　南より（酒井撮影）……52
PL. 22　（1）第2地点第8号住居址　北より（酒井撮影）……53
（2）第2地点第2号竪穴　東より（酒井撮影）……56
PL. 23　（1）第2地点第5号住居址下石英礫群　南より（酒井撮影）……57
（2）石英礫群出土土層（酒井撮影）……57
PL. 24　第3地点全景　北より（西谷撮影）……59
PL. 25　（1）第3地点南半全景　北より（西谷撮影）……59
（2）第3地点第1号竪穴　西南より（西谷撮影）……59
（3）第3地点第3号竪穴　西より（西谷撮影）……59
PL. 26　（1）第3地点第1号住居址　南より（西谷撮影）……60
（2）第3地点第2号住居址　東より（西谷撮影）……60
（3）第3地点第1号住居址内遺物出土状況（西谷撮影）……60
PL. 27　第1地点出土弥生式土器（西谷撮影）……27
PL. 28　第1地点出土弥生式土器（西谷撮影）……27
PL. 29　第1地点出土弥生式土器（西谷，酒井撮影）……31, 34, 36, 38
PL. 30　第1地点出土弥生式土器・土師器（西谷撮影）……39, 40, 41
PL. 31　第2地点出土土師器・須恵器（西谷撮影）……51, 52, 55
PL. 32　第2地点出土土師器・須恵器（西谷撮影）……54, 56
PL. 33　第3地点出土弥生式土器・土師器（西谷撮影）……59, 60
PL. 34　（1）石鏃（酒井撮影）……44, 46
（2）打製石器（西谷撮影）……46
PL. 35　（1）紡錘車・石庖丁（西谷撮影）……46
（2）砥石など（西谷撮影）……46, 47
PL. 36　（1）磨製石斧（西谷撮影）……46, 47
（2）磨石（西谷撮影）……46

上　棚　田　遺　跡

PL. 37　（1）遺跡遠景　西より（西谷撮影）……65
（2）住居址全景　北より（酒井撮影）……65
PL. 38　（1）第1号住居址内遺物出土状況　南より（酒井撮影）……65

（2）第1号住居址内遺物出土状況　南より（酒井撮影）……65
PL. 39　第1号住居址出土遺物（西谷撮影）……67

ハサコの宮遺跡

PL. 40　（1）遺跡遠景　南より（西谷撮影）……70
（2）遺構群西半全景　東より（西谷撮影）……70
PL. 41　（1）遺構群全景　東より（西谷撮影）……70
（2）南側トレンチ全景　北より（西谷撮影）……70
PL. 42　（1）第1号甕棺発掘状況　北西より（後藤撮影）……70
（2）第1号甕棺出土状態　北西より（後藤撮影）……70
PL. 43　（1）第2号甕棺附近全景　東より（後藤撮影）……71
（2）第2号甕棺発掘状況　西より（後藤撮影）……71
PL. 44　（1）第1号甕棺と周辺の土壙墓　北東より（後藤撮影）……70
（2）土壙墓群北側全景　北東より（西谷撮影）……72
PL. 45　（1）第4号・5号・16号土壙墓　西より（西谷撮影）……72
（2）第22号土壙墓　東より（西谷撮影）……72
PL. 46　（1）第1号甕棺（西谷撮影）……70
（2）第2号甕棺（西谷撮影）……71

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡群の位置（西谷作成）……2
Fig. 2　遺跡群の位置（西谷作成）……3

西中隈遺跡

Fig. 3　西中隈遺跡全体図（酒井作成）……9
Fig. 4　第2号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……10
Fig. 5　遺構分布図（酒井・上野実測，伊東製図）……10—11
Fig. 6　第1号・第2号竪穴実測図（後藤・上野実測，伊東製図）……11
Fig. 7　第3号～第5号竪穴実測図（後藤・上野実測，伊東製図）……12
Fig. 8　第3号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……13
Fig. 9　出土石器実測図（酒井実測製図）……13
Fig. 10　第1号住居址実測図（上野実測，伊東製図）……14
Fig. 11　第1号住居址出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……15
Fig. 12　第1号住居址出土土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……16
Fig. 13　第2号住居址出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……16
Fig. 14　第2号住居址実測図（上野実測，伊東製図）……17

Fig. 15　第3号住居址実測図（上野実測，伊東製図）……18
Fig. 16　第3号住居址出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……18
Fig. 17　第4号住居址出土須恵器・土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……18
Fig. 18　第4号住居址実測図（上野実測，伊東製図）……20
Fig. 19　第4号住居址出土土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……21
Fig. 20　第4号住居址出土手捏ね土器実測図（後藤実測，伊東製図）……21
Fig. 21　第1号溝出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……23
Fig. 22　第1号溝出土土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……23

宮　裏　遺　跡

Fig. 23　宮裏第1地点遺跡全体図（酒井作成）……25
Fig. 24　宮裏第2・第3地点遺跡全体図（高田作成）……26

第　1　地　点

Fig. 25　第1号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……27
Fig. 26　第2号・第4号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……28
Fig. 27　第2号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……29
Fig. 28　第1～5号・17号竪穴実測図（山手・高田実測，伊東製図）……30
Fig. 29　第5号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……31
Fig. 30　第7号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……31
Fig. 31　第6～第9号竪穴実測図（後藤実測，伊東製図）……32
Fig. 32　第12・14・15号竪穴実測図（後藤・高田実測，伊東製図）……33
Fig. 33　第9号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……34
Fig. 34　第8号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……35
Fig. 35　第10号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……36
Fig. 36　第11号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……36
Fig. 37　第13～15号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……37
Fig. 38　第16号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……38
Fig. 39　第1・第2号住居址実測図（後藤・高田実測，伊東製図）……38—39
Fig. 40　第1・第2号住居址出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……39
Fig. 41　第2号住居址出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……40
Fig. 42　第17号竪穴・第3号住居址出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……40
Fig. 43　第18号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……41
Fig. 44　第18号竪穴実測図（上野実測，伊東製図）……41
Fig. 45　第3号住居址実測図（上野実測，伊東製図）……42

第　2　地　点

Fig. 46　第1号住居址実測図（Pearson 実測，伊東製図）……43

Fig. 47　出土打製石器実測図（酒井実測製図）……45
Fig. 48　出土紡錘車実測図（後藤実測，酒井製図）……46
Fig. 49　出土磨製石器実測図（後藤実測，酒井製図）……46—47
Fig. 50　第2号住居址出土土師器実測図（伊東実測製図）……47
Fig. 51　第2号住居址実測図（Pearson 実測，伊東製図）……48
Fig. 52　第3号住居址実測図（高田実測，伊東製図）……49
Fig. 53　第3号住居址出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……49
Fig. 54　第4号住居址実測図（高田実測，伊東製図）……50
Fig. 55　第3・第4号住居址出土土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……51
Fig. 56　第4号住居址出土須恵器・土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……51
Fig. 57　第5号住居址出土土師器実測図（後藤実測，，伊東製図）……51
Fig. 58　第5号住居址実測図（高田実測，伊東製図）……52
Fig. 59　第6号住居址出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……52
Fig. 60　第6号住居址実測図（高田実測，伊東製図）……52—53
Fig. 61　第7号住居址実測図（高田実測，伊東製図）……53
Fig. 62　第8号住居址実測図（高田実測，伊東製図）……54
Fig. 63　第1号竪穴出土須恵器・土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……55
Fig. 64　耕作土中出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……55
Fig. 65　耕作土中出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……56
Fig. 66　第2号竪穴出土土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……56
Fig. 67　第2号竪穴出土須恵器実測図（後藤実測，伊東製図）……57
Fig. 68　第2号竪穴実測図（後藤実測，伊東製図）……57
Fig. 69　石英礫群（後藤実測，伊東製図）……58

第　3　地　点

Fig. 70　第3号竪穴内土層断面図（西谷・高田実測，伊東製図）……59
Fig. 71　第4号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……59
Fig. 72　第1号住居址出土須恵者実測図（後藤実測，伊東製図）……60
Fig. 73　第5号竪穴出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……61
Fig. 74　第1号住居址実測図（西谷・高田実測，伊東製図）……62
Fig. 75　第2号住居址実測図（西谷・高田実測，伊東製図）……63
Fig. 76　第1号住居址出土土師器実測図（後藤実測，伊東製図）……64

上　棚　田　遺　跡

Fig. 77　上棚田遺跡全体図（酒井作成）……65
Fig. 78　第1・第2号住居址実測図（酒井・高田実測，伊東製図）……66
Fig. 79　第1号住居址出土土器実測図（酒井実測，伊東製図）……66—67

Fig. 80　第1号住居址出土石器実測図（酒井実測製図）……67
Fig. 81　第2号住居址出土須恵器実測図（酒井実測，伊東製図）……67

ハサコの宮遺跡

Fig. 82　遺構分布図（上野・後藤実測，伊東製図）……69
Fig. 83　第1号甕棺墓実測図（後藤実測，伊東製図）……70
Fig. 84　第1号甕棺実測図（後藤実測，伊東製図）……71
Fig. 85　第2号甕棺墓実測図（後藤実測，伊東製図）……72
Fig. 86　第2号甕棺実測図（後藤実測，伊東製図）……72
Fig. 87　耕作土中出土土器実測図（後藤実測，伊東製図）……73
Fig. 88　耕作土中出土石器実測図（酒井実測製図）……73
Fig. 89　第1～6号・13号・17号土壙墓実測図（後藤・上野実測，伊東製図）……74
Fig. 90　第10号～12号・20号・22号・25号土壙墓実測図（後藤・上野実測，伊東製図）……75
Fig. 91　第8・18号土壙墓実測図（後藤・上野実測，伊東製図）……76

付　図　目　次

Fig. ①　宮裏第1地点遺構分布図（酒井・後藤・高田実測，伊東製図）……27
②　宮裏第2地点遺構分布図（高田実測，伊東製図）……43
③　宮裏第3地点遺構分布図（西谷・高田実測，伊東製図）……59

表　目　次

Tab, 1　第3号竪穴層位名称一覧表……64
Tab, 2　土　壙　墓　一　覧　表……76

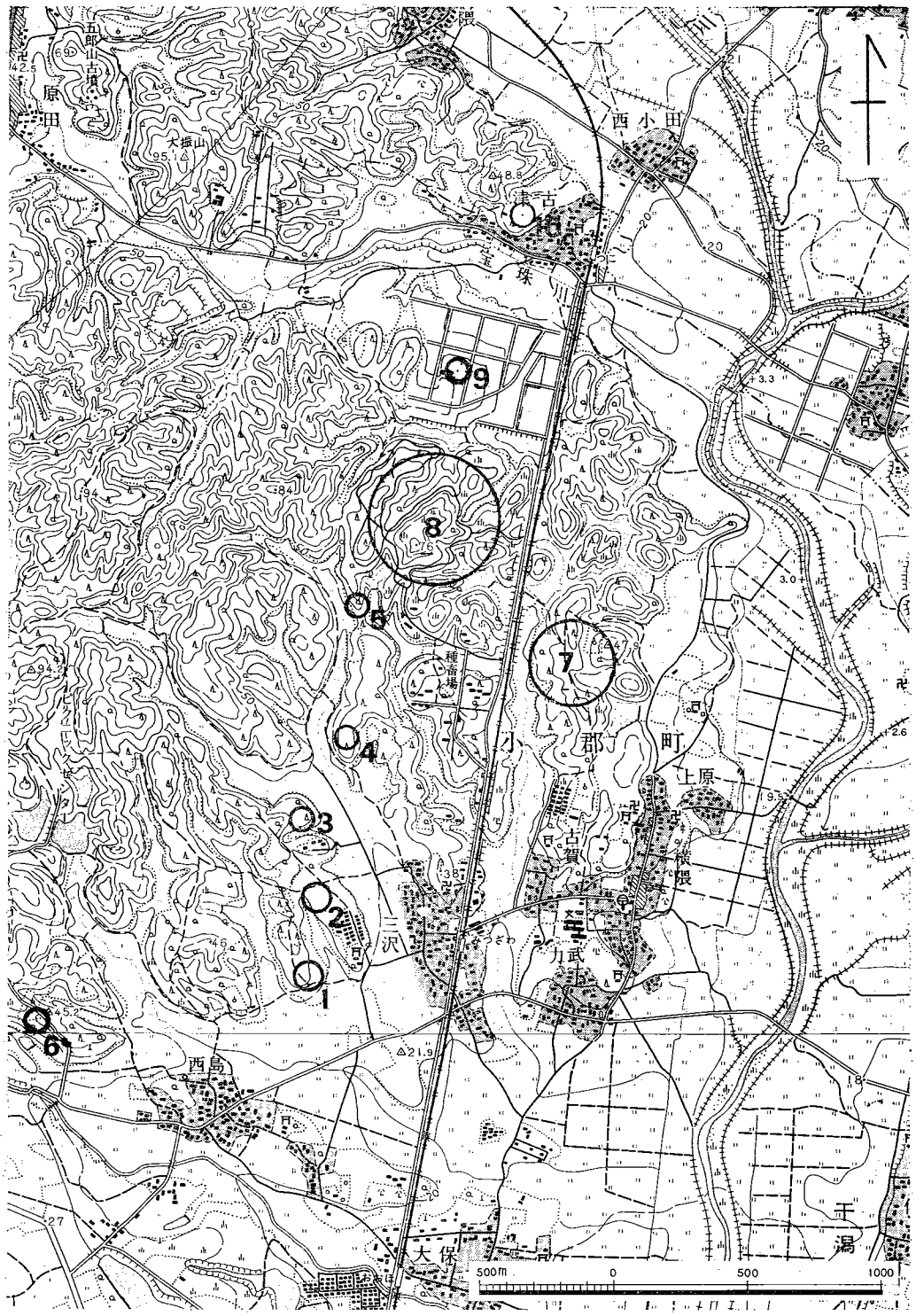
I　三沢所在遺跡群の位置

日本道路公団による三沢土取り場にいたる専用道路建設に伴って破壊された遺跡群は，福岡県小郡市大字三沢にある。そこは，背振山塊の東の末端が，筑後平野に接する低い丘陵地帯にあたる。遺跡地は，筑後平野の縁辺部にあって，山間部へ樹枝状に奥深く入りこんだ水田面に面している。宅地開発の波にのって，住宅地が増えてきたとはいえ，山林に囲まれた静かな古代景観のなかにある。ゆるやかな丘陵が連綴するこの地域は，夏には雨が，冬には雪が多いところとして知られる。この付近の地質は，花崗岩を基盤とする三国丘陵を形成するもので，花崗岩のばいらん土壌からなっている。

ところで，現在，遺跡地にいたるには，西日本鉄道の大牟田線を利用するのが便利である。福岡を出て，筑後平野にはいってしばらく行くと，西鉄電車は大きく南に方向を変えて筑後平野を縦走する。その屈接点に津古駅があるが，そこを過ぎて電車は松林の中を通り抜けると，三沢駅にいたる。三沢駅の周辺には，三沢の集落がある。この集落のはずれで，西方および西北方にあたる丘陵地一帯が遺跡地である。

専用道路は，丘陵地を南北に縦貫するように走り，その際に，4ヵ所の遺跡地を破壊した。南から順次にみると，西中隈遺跡は，背振山塊末端の東南方に向って突き出た一つの丘陵地突端の頂上部に立地する。標高約29m，現在の水田面との比高約3mの頂上部には，弥生時代前半期の竪穴群と古墳時代後半期の住居群がみられた。こん回の調査対象地域の北側に隣接するところは，宅地造成によって大きく削平をうけていたので，調査を実施しなかったところ，工事着手後になって，ところどころで袋状竪穴などを認めた。また，この丘陵の南側の水田面への傾斜変換線付近で，側溝工事中に土師器を検出したので，遺跡は南の低地へも拡がっていることが推測される。

宮裏遺跡は，西中隈遺跡の東北方約300m付近にある。西中隈遺跡の立地する丘陵と平行するように，東南方にのびる丘陵で，西中隈遺跡のある丘陵と二叉状に分枝する，ちょうどそのつけ根の付近を中心としている。標高約30～32mの低い丘陵の頂上部から，西南斜面にわたって遺跡地がみられた。すなわち，弥生時代前期末から中期初にわたる貯蔵穴群は，遺跡地の北寄りで，丘陵の頂上部に立地する。さらに弥生時代中期の住居群と古墳時代後期の住居群が，丘陵の緩傾斜面に認められた。この丘陵の南端には，日吉神社があり，その本殿の下に弥生時代中期の甕棺が埋没している。また，同じ丘陵の北接したところにある沢の丘住宅造成の折にも，甕棺が多量に出土したという伝えがあるので，この付近一帯に，弥生時代中期の集落を考えることができよう。



1. 西中隈遺跡　2. 宮裏遺跡　3. 上棚田遺跡　4. 北牟田遺跡　5. ハサコの宮遺跡
6. 花聳遺跡　7. 横隈山遺跡　8. 種畜場遺跡　9. 津古遺跡　10. 津古内畑遺跡

Fig. 1　遺跡群の位置（縮尺 1/25,000）

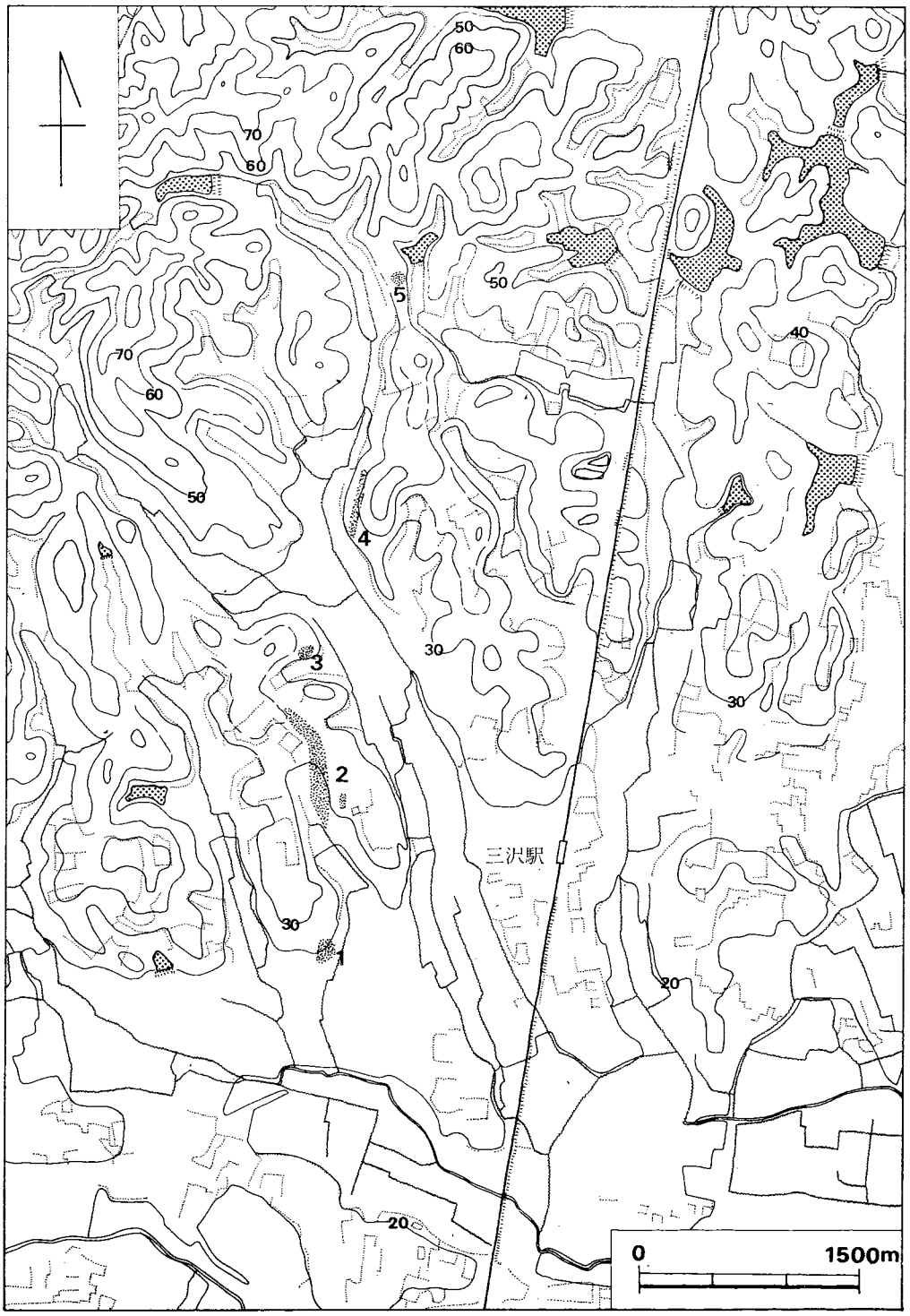


Fig. 2　遺跡群の位置（縮尺 1/2,000）

北牟田遺跡は調査前にすでに削平されていた。上棚田遺跡は，三沢の集落の西北方に深く入りこんだ水田面に向って，東北方にのびた丘陵の南西斜面にあって，弥生時代終末期の住居址を遺存した。標高約32*m*で，現在の水田面からの比高は約4*m*である。工事着工後に，道路の北側斜面において，竪穴式住居の断面を検出したので，ここに一つの単位集団を想定できる。

ハサコの宮遺跡は，丘陵地のなかの，北西から南東方向に走る一つの尾根すじの，頂上部よりやや西南斜面にかかったところに位置して，標高約49*m*をしめす。弥生時代前期末から中期初にわたる甕棺墓と土壙墓からなる墳墓群であった。

このような三沢の遺跡群は，おだやかな丘陵地にあって，背景となる山並みは，食用の動植物の資源原となった反面，陸耕も可能であったろう。また，いっぽう東に約2*km*と行かないうちに，宝満川に出て，魚貝が産した。「三沢」という地名がしめすように，谷頭の各所に湧水地点があって，入りこんだ谷合も，水稲耕作の適地となったろう。こうした豊かな自然条件も，この地域に多くの遺跡を残す原因の一つとなった。ハサコの宮遺跡の東北方の丘陵地は，種畜場遺跡として，弥生時代中期初頭を中心とする集落跡と，古墳時代後期の横穴式石室墳三基からなる群集墳がみられる。この種畜場遺跡とは，東西方向に入りこんだ谷間を隔てて，丘陵地の北斜面には津古遺跡がある。集落遺跡と四基の古墳があった。古墳は，前方後円墳二基と方墳一基からなる前半期のものと，後期と思われる円墳とが築造された。集落跡は，弥生時代前期末の貯蔵穴群と，弥生時代の終末から古墳時代初頭にわたる住居群からなっている。そしてさらに宝珠川を挾んだ北方には，弥生時代前期後半の貯蔵穴群，弥生時代前期末から中期初頭にわたる墳墓群（甕棺墓・木棺墓・土壙墓），そして，古墳時代後期の円墳三基などを含む津古内畑遺跡があった。いっぽう目を転じると，こん回調査した三沢遺跡群のほかにも，Fig. 1 にしめすように，随所で，弥生時代や古墳時代の遺構や遺物の発見を伝えている。このようにして，筑後平野に面した低いおだやかな三沢の丘陵地には，遺跡が濃密に分布することが明らかになってきたわけである。　　（西谷正）

Ⅱ 調 査 の 経 過

昭和46年3月，日本道路公団による三沢土取り場にいたる専用道路が建設中であると聞き，路線図面を手に分布調査を実施した。佐賀県基山町に続く水田地帯ではすべてに道路本体が完成に近づいており，丘陵部（西中隈遺跡）の削平を行なうばかりであった。また農免道路との交叉点附近丘陵（北牟田遺跡）はすでにカットされ，弥生式土器や黒曜石が散乱していた。結局5ヵ所の遺跡が確認され，道路公団久留米工事事務所に連絡をとった。

広大な土取り場として予定されていた県立種畜場内で弥生時代集落址が発見され，その保存について，当時は各方面からの運動が起こっていた。県と道路公団との協議も回を重ね，県会，国会において質疑もされ，歴史公園として保存する構想も出始めていた。これに対し道路公団は土運搬用の専用道路建設をすでに着手しており，土取りを中止することは不可能と判断し，保存区域を最小限に留めるよう要望していた。運搬道路路線内でも遺跡が確認されたとの報に驚愕し，落胆の意を隠さなかった。協議の結果，調査期間を最小限とすることで4月5日より調査を開始した。

調査団は次のとおりであるが，福岡教育大学学生の来援も受けた。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	西谷　正
	同	酒井仁夫
	ハワイ大学助教授	Richard Pearson
	同学生	A. Thounsent
	東京大学博士課程	後藤　直（現福岡市文化課技師）
		高田一弘
		上野精志（現福岡県文化課技師）
	別府大学学生	山手誠治（現北九州市文化課勤務）
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	小川浩一郎
	同	加藤久嘉

4月5日（月）　道路公団久留米工事事務所で，調査地区及び工程を打合せる。発掘資材を工事業者（古賀組）倉庫に搬入し，さっそく上棚田遺跡の調査に取り掛る。第1号住居址床面から多量の土器が出土する。

4月6日（火）　上棚田1号及び2号住居址を完掘する。全景写真及び土器出土状態写真を撮影する。平板図面を作成して調査を終了し，宮裏第1地点へ移動する。久留米工事事務所長が現場を訪れ，今後の調査工程を打合せる。

4月7日（水）　宮裏第1地点で弥生時代貯蔵穴5を検出する。第2号竪穴からは多量の土器が出土し，写

真を撮影する。第5号竪穴中から炭化米が穂を束ねた状態で出土する。第4，第5号竪穴の平面及び断面を実測する。第2地点にベルトコンベアーを導入し，北側より表土剝ぎを開始する。本日より山手君調査に加わる。

4月8日（木）　宮裏第1地点第2号竪穴及び第2地点表土を掘り進める。

4月9日（金）　宮裏第1地点第1号竪穴下で第3号竪穴を検出する。第2号竪穴を切って表土より2.6 *m*の深さに達する。

4月10日（土）　第1地点第1～第3号竪穴を完掘し，夕刻写真を撮影する。第2地点の全域に2 *m*幅のトレンチを8本設定する。

4月11日（日）　第1地点第1～第3号竪穴南側で遺構検出を計る。第2地点東側トレンチで第1～第3号住居址を検出する。

4月12日（月）　本日より後藤直が調査に加わる。第2地点北端で第4号住居址を検出したため，発掘区を拡張し，プラン全域を露見する。

4月13日（火）　第2地点第4号住居址及び第1号竪穴を掘り始める。第1号竪穴からは多量の土師器，須恵器が出土する。

4月14日（水）　第2地点 第1号 住居址の完掘を計る。耕作による削平が甚しく，壁は北側のみ残している。北壁中央に焼けて張り出した部分があり，竈と思われる。第4号住居址の床面は凹凸が甚しく，北側床面には張り床しており，中央部壁側は焼けている。第5号住居址平面を全域検出する。

4月15日（木）　第1地点第6～第8号竪穴は全て切り合っており，6→7→8の関係にある。第2地点北端の第4，第5住居址，第1号竪穴を完掘し，写真を撮影したのち，実測を開始する。

4月16日（金）　本日より Hawaii 大学助教授 Pearson 及び院生 Thounsent 両氏が調査に参加し，第2地点第1号住居址の発掘を開始する。埋土上より掘られた柱穴中からは土師器，須恵器が出土する。埋土上柱穴の平面図を作成し，各々の深さを測定する。第5号住居址及び第1号竪穴の実測を行なう。

西中隈遺跡の調査を開始する。第1号及び第2号住居址とそれらを切る溝を検出する。

宮裏第1地点の全景写真を撮影する。

4月17日（土）　小雨の中，ベルトコンベアーを宮裏第2地点より西中隈遺跡へ移動し，表土剝ぎを続行する。山手君夕刻帰宅する。

4月18日（日）　本日より上野精志が調査に加わり，西中隈遺跡の南半5軒の住居址内部を掘り始める。宮裏第2地点では第1号住居址の完掘を計る一方，中央に南北トレンチを設定し，掘り進める。

4月19日（月）　宮裏第2地点第4号住居址の張り床は 5～10 *cm*の厚みがあり，特に床面中央部では30 *cm*近く数回にわたって黄色土で埋めている。中央トレンチ内では小ピットが検出されたのみで，住居址はない。

西中隈遺跡の5軒の住居址を完掘する。第4号住居址床面上には炭化物が多く，古式須

恵器，土師器が一括出土する。第1～3号住居址の写真を撮影する。

4月20日（火）　西中隈第4号住居址の南壁の立ち上りは断面によっても観察されない。住居址内落込土が床面に接する点が壁になるのではなかろうか。遺跡北半の遺構を検出する。弥生時代貯蔵穴が5基見つかった。

4月21日（水）　西中隈4号住居址南側を拡張する。住居址内柱穴と同様の二段掘り柱穴が検出された。このことから，第4号住居址は少なくとも1間×1間の建物の整地の際に切られたと考えられる。遺跡北半遺構群の全景写真を撮影し，1/40全体実測を行なう。本日で西中隈遺跡の調査を終了する。

4月22日（木）　宮裏第2地点中央トレンチ南端で第7号住居址を検出し，プランを全面明らかにする。第2号住居址内から鉄鏃が出土する。第1号住居址床面上の柱穴の深さを測定する。

4月23日（金）　昨日検出した第7号住居址を完掘する。西トレンチを南へ伸ばす一方，発掘区北端で第6号住居址を検出する。第4号住居址床面下及び西トレンチ内でローム層中より石英礫群が見い出される。性格は不明であるが，平面図及び断面図を作成する。

4月24日（土）　第2地点南端で第8号住居址を，北端で第2号竪穴を，第1地点南端で第9号竪穴を検出する。第6号住居址は黒色土混りの赤色粘質土で張り床していることが判明する。第7号住居址を完掘し，発掘区南半の1/40平面図を作成する。

4月25日（日）　第1地点は道路建設予定地が変更されたため，新たに調査を実施しなおす必要が生じた。第1地点南端で第3号住居址を検出する。南半は道路崩面で切られているものの，北壁側中央に竈がしつらえられ，土師器を支脚更りに使用している。第2地点全体測量を継続する。本日賀川光夫先生に現場を視察していただく。

4月26日（月）　第2地点中央トレンチと西トレンチを結ぶ2本のトレンチを完掘する。小ピット群を検出したに留まる。第6号住居址の断面図を作成する。第1地点第3号住居址を完掘し，写真撮影ののち，実測を開始する。

4月27日（火）　第1地点第9号竪穴は袋状を呈した典型的貯蔵穴である。完掘後，平面及び断面図を作成する。第2地点第1及び第2号住居址の路線外部分について，地主の承諾のもとに拡張し，全掘を計る。第2地点の調査は，第1及び第2号住居址拡張分を除いて終了する。

4月28日（水）　雨のため，宿舎で土器洗いを行なう。

4月29日（木）　第1地点をブルドーザーによって表土を剝いだのち，南側より遺構を検出する。円形住居址2と多数の貯蔵穴がみつかる。

4月30日（金）　第1地点の遺構を全て掘り終え，各遺構図面を作成し，夕刻写真を撮影する。

ハサコの宮遺跡調査予定地をブルドーザーによって表土を剝ぐ。

5月1日（土）　第1地点の全ての実測を終える。

5月2日（日）　発掘資材をハサコの宮遺跡へ移動させ，同遺跡の調査を開始する。出土遺物は極く少ない。

5月3日（月）　頂上部に近づくにつれ，土壙墓，甕棺墓が検出される。土壙墓は長軸が略同一方位であ

る。

5月4日（火）　各遺構内部を掘りあげる。土壙墓群は尾根頂上部にまでは及んでいない。

5月5日（水）　甕棺2基を完掘し，写真撮影，実測を行なう。

5月6日（水）～8日（土）　土壙墓は25基を数える。土壙墓を切る2本の溝を検出する。第2号甕棺の掘り方は検出しえなかった。8日に全ての作業を終了する。

5月9日より5月21日にかけて種畜場内遺跡の遺構確認調査を実施する。

5月22日より6月末まで宮裏第3地点の調査を実施する。路線開通に伴った畠地改良工事に先立つ調査である。　（酒井仁夫）

Ⅲ 西 中 隈 遺 跡

1. 遺跡の概況 (Fig. 3, 5, PL. 1)

南北方向に長い丘陵を縦断する長さ46m，幅11mの範囲を発掘した。弥生時代の長方形竪穴5，古墳時代の住居址4および溝2を検出した。以下各遺構について概述する。

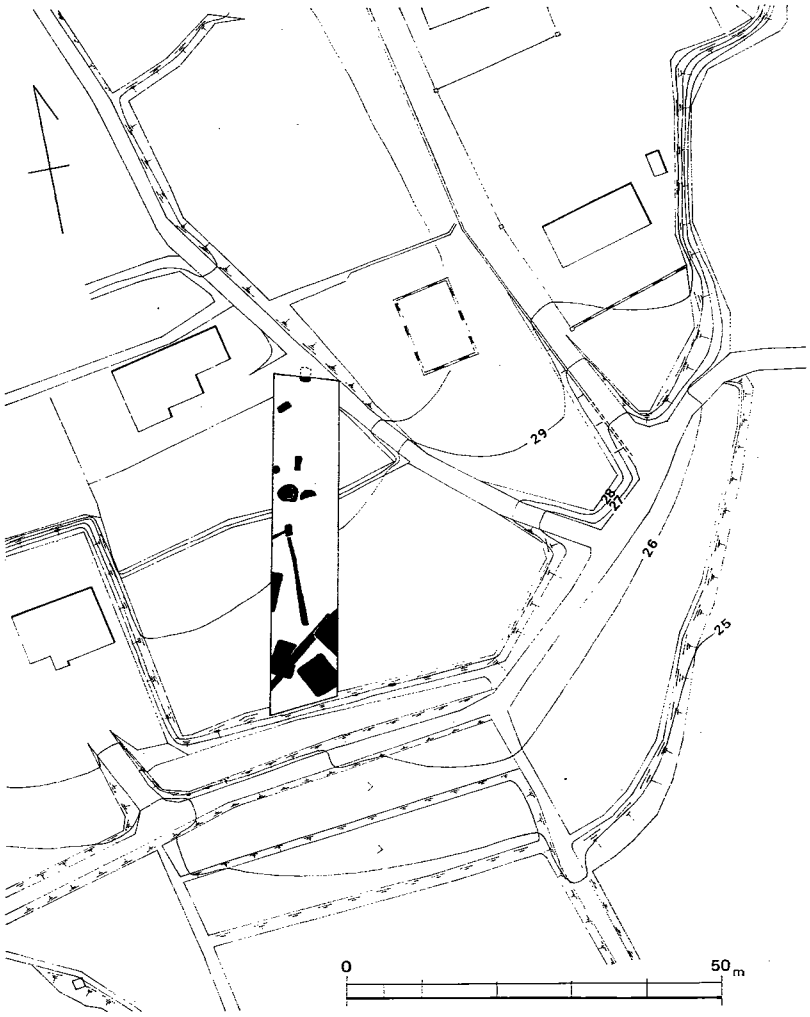


Fig. 3 西中隈遺跡全体図（縮尺 1/1,000）

2. 弥生時代の遺構と遺物

貯蔵穴

第1号竪穴 (Fig. 6)

平面は略南北方向に長い2.18×1.26mの長方形を呈し，深さ約0.97mである。4壁はほぼ垂直である。南および西壁は古墳時代溝により上部を切られている。

第2号竪穴 (Fig. 6，PL. 2—2)

径約2.0mの不整円形ピット中に掘り込まれている。平面はほぼ南北方向に長い1.60×0.85mの長方形を呈し，深さ約0.4mである。4壁はほぼ垂直である。

出土遺物 (Fig. 4)

内部より2点の甕形土器が出土している。1は底部を焼成後に穿孔した甕で，内外面ともナデた上に，外面および口縁側をハケメ調整している。胎土中の石粒が目立ち，赤褐色を呈する。2の器壁は剝落が著しく，調整は不明である。胎土，焼成とも不良で，黒褐色至橙褐色を呈する。

第3号竪穴 (Fig. 6)

平面はほぼ南北方向に長い1.70×0.85mの長方形を呈し，深さ約0.75mである。長壁は若干袋状を呈する。

出土遺物 (Fig. 8，PL. 6-1)

内部からは小形高坏および甕片が出土している。1は高さ約8.2㎝を測る。坏部は内外面ともヨコナデ調整を施し，内面底部は指で押し整えている。坏部口縁近くに焼成後2孔を穿っている。脚部はタテナデ調整である。胎土中砂粒が混じり茶褐色を呈する。2は胴部がタテナデ，底部近くがヨコナデによって調整している。胎土，焼成とも不良で，茶褐色を呈する。3は器壁の剝落が著しく調整は不明である。赤褐色を呈する。

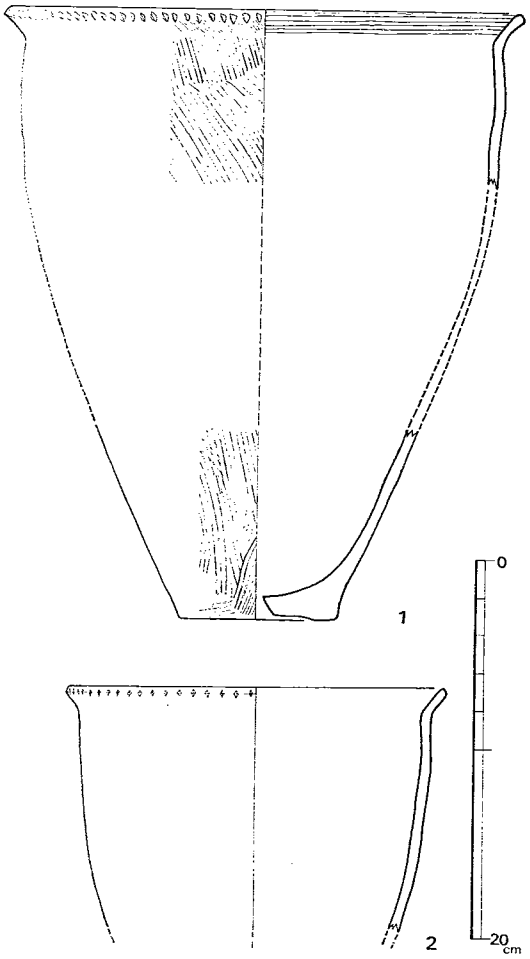


Fig. 4　第2号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

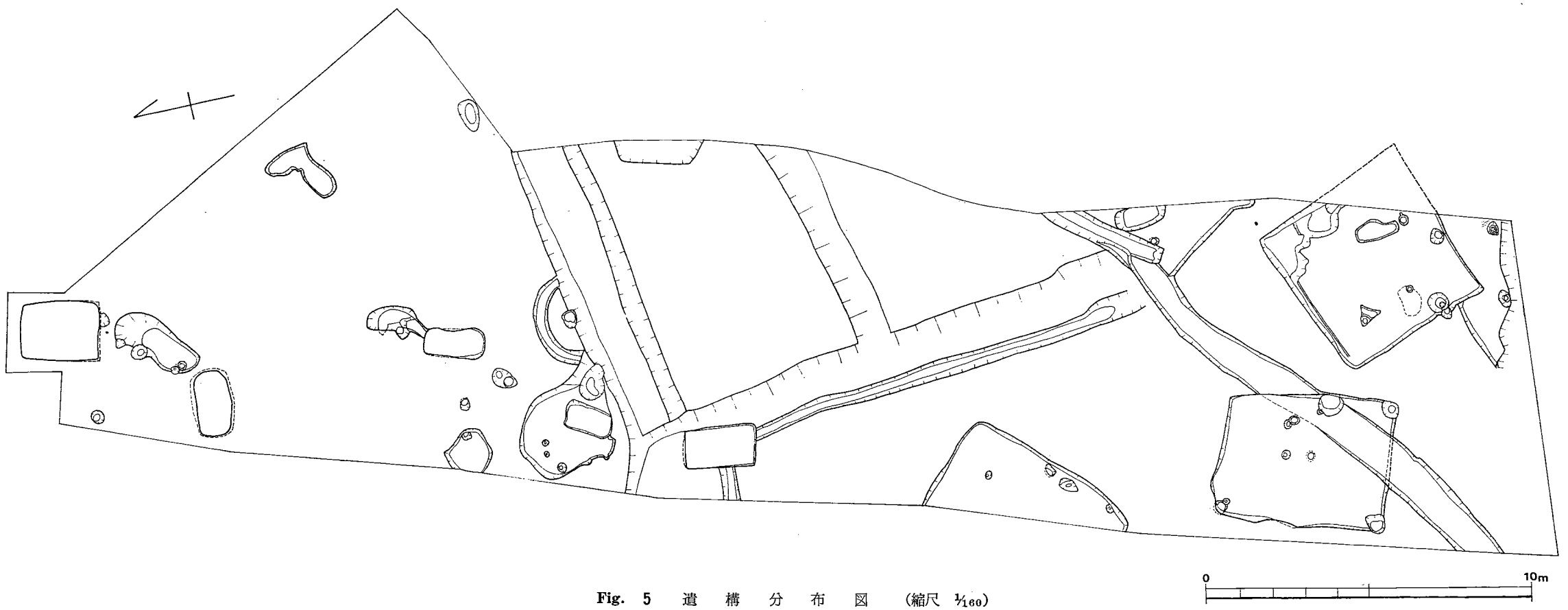


Fig. 5 遺 構 分 布 図 (縮尺 1/160)

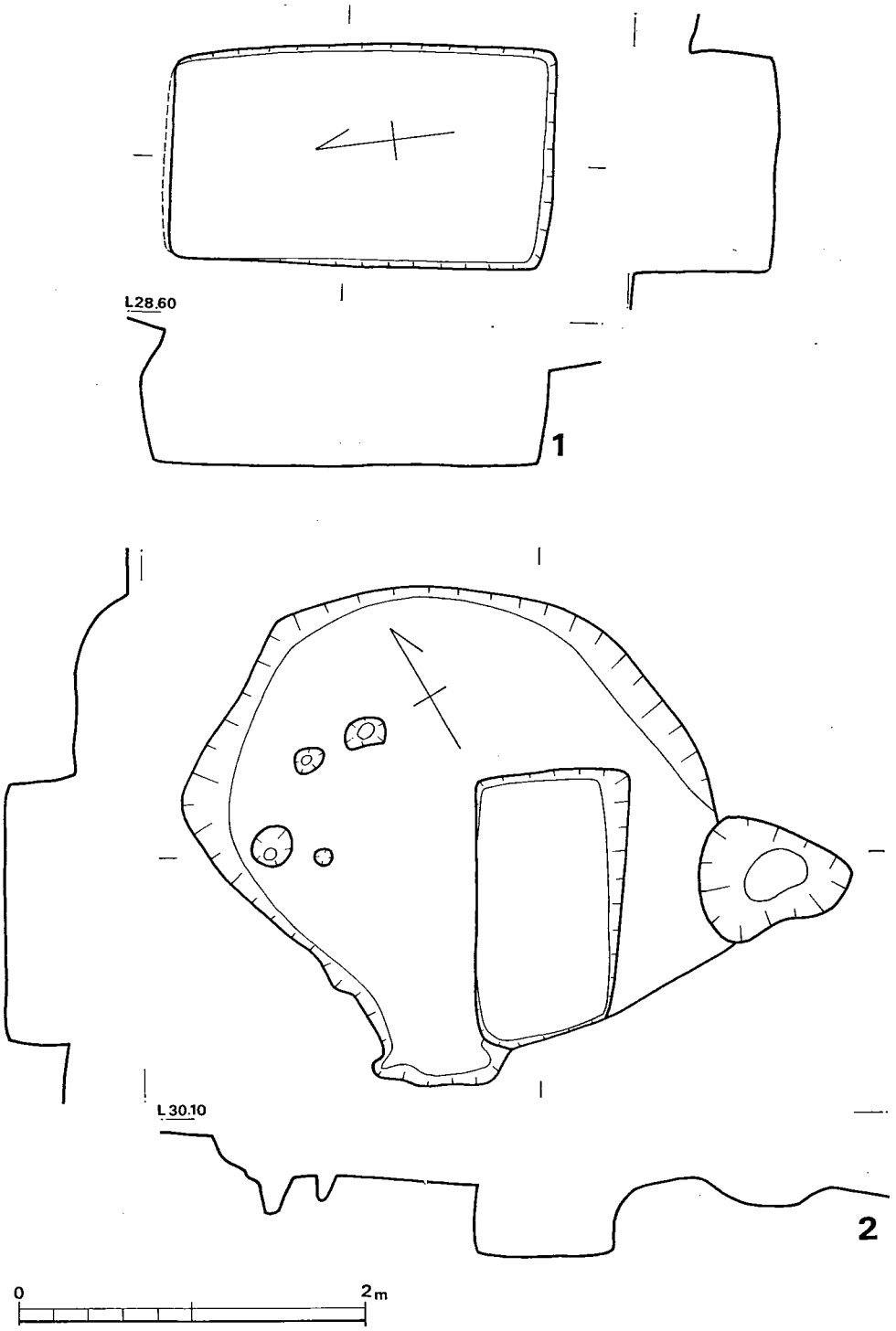


Fig. 6　第1号・第2号竪穴実測図（縮尺 1/40）

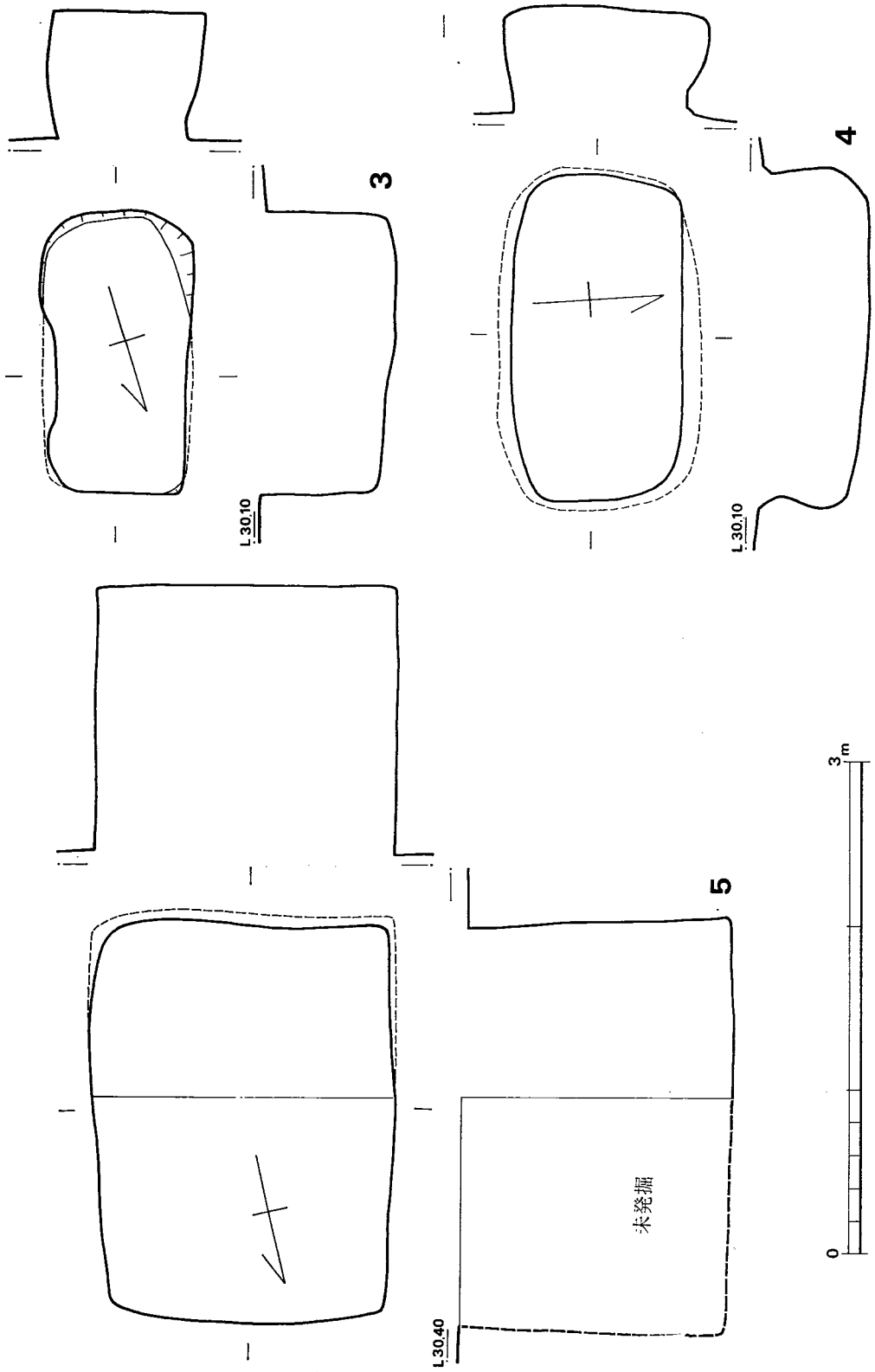


Fig. 7　第3号～第5号竪穴実測図（縮尺1/40）

第4号竪穴　(Fig. 7)

平面はほぼ東西方向に長い約2.0×1.0mの長方形を呈し，深さ約0.6mである。4壁は袋状を呈する。

出土遺物 (Fig. 9—1, PL. 6—2)

内部から甕口縁片および底部片が出土している。1の磨製石鏃は先端部を欠く。両側に抉りが入り，基部を除いて全面に磨研が及んでいる。

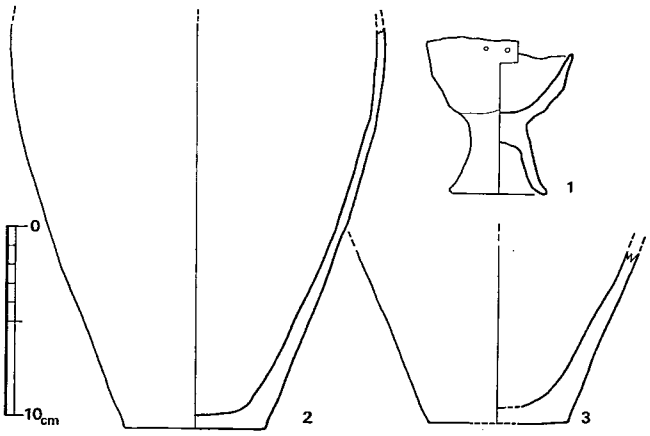


Fig. 8　第3号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

第5号竪穴

(Fig. 7)

調査期間の関係で半掘したのみである。平面はほぼ南北方向の2.4×1.8mを呈し，深さは1.6mを測る。

出土遺物

(Fig. 9—3
PL. 6—2)

内部から磨製石斧が出土している。玄武岩製である。

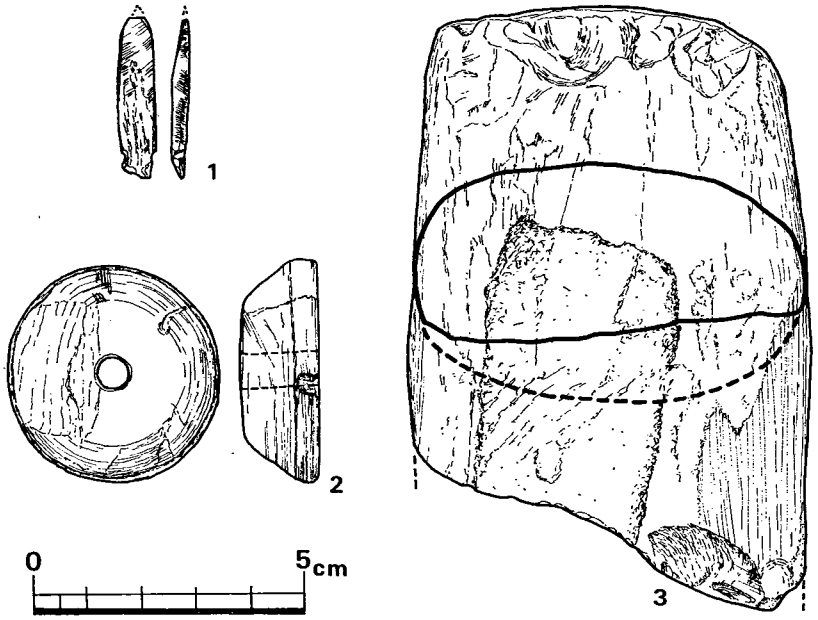


Fig. 9　出土石器実測図（縮尺⅔）

以上，概述した5基の貯蔵用竪穴は，いづれも長方形を呈している。この種の竪穴は類例に乏しい。時期は出土土器量が絶対的に少ないが，板付Ⅱ式に比定されるであろう。最近発掘調査された近くの横隈山遺跡(註)でも検出されており，三沢周辺における独特な竪穴と思われる。

（酒井仁夫）

註　「横隈山遺跡」小郡市教育委員会　1974

3. 古墳時代の遺構と遺物

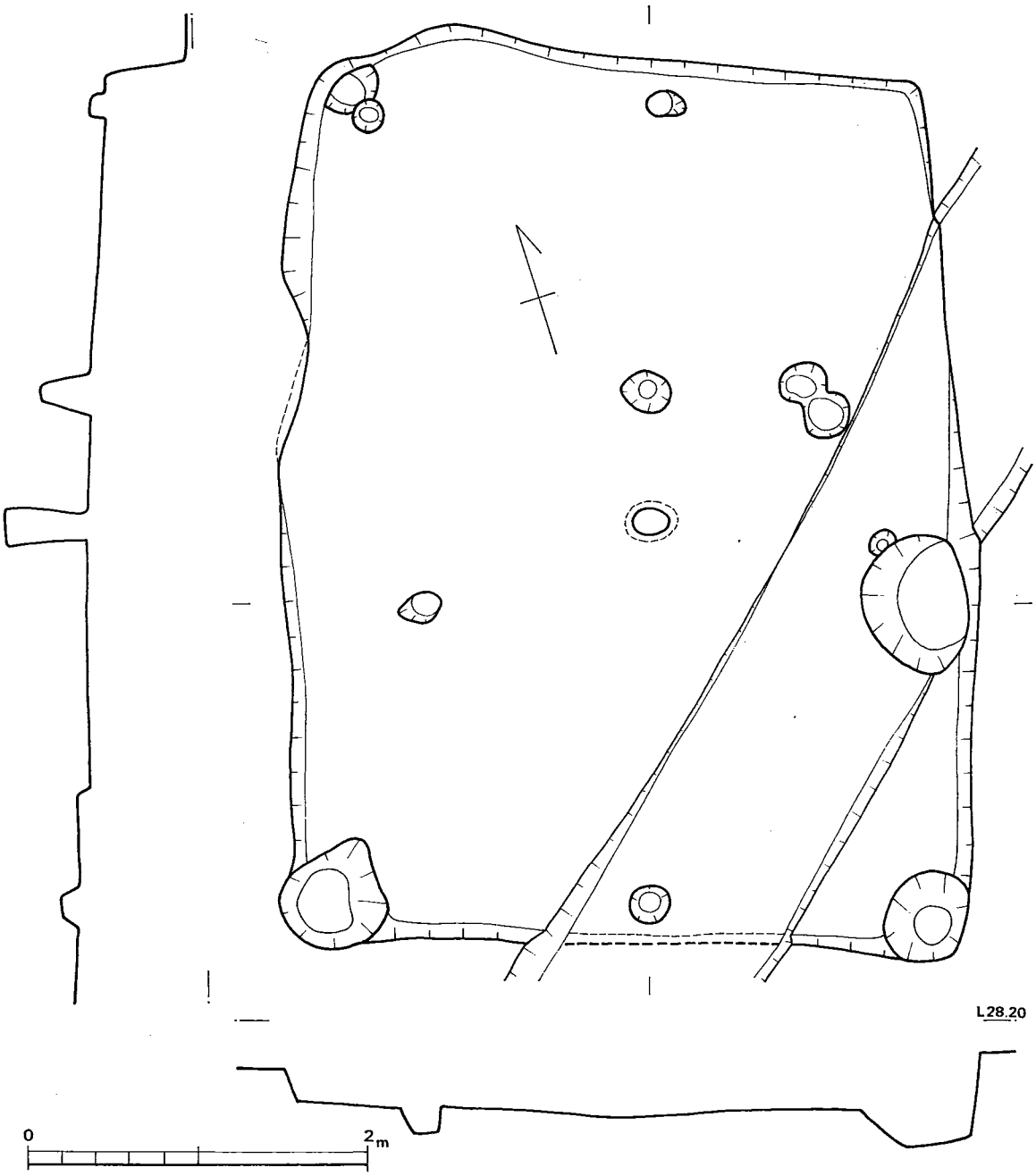


Fig. 10 第 1 号 住 居 址 実 測 図 (縮尺 1/40)

古墳時代の遺構として竪穴住居址4基と溝2条を検出した。これらの住居址群と溝は弥生時代の竪穴群が北方のやや一段高い丘陵平坦部に位置しているのに対して，丘陵先端部の緩傾斜地に位置している。なお，調査区域の関係により完全発掘を実施したのは第1号住居址のみである。

第1号住居址 (Fig. 10, PL. 3—2)

第2号住居址の南側，第4号住居址の西側に在り，一部分を幅1.50*m*，深さ0.10*m*の古墳時代の第1号溝により攪乱されている。現地表下0.70*m*に在り，平面プランは5.10×3.90*m*の長方形を呈し，主軸方向はN11°Eを示しており，床面積19.9*m*²を有する。床面は地山の茶褐色土を固めたもので全体的に平坦であり，地形に従って北方より南方の丘陵先端部にかけて約0.10*m*高低差が認められ，緩傾斜である。壁は北側壁が10度の立ち上がりで壁高0.45*m*，南壁は近世の開墾によりその形状をわずかに残すのみであり不詳である。壁面は平坦であり硬い。周溝，竈は存在しない。主柱穴は長軸壁に従って4本認められ，主柱の2本は中央部に対応していて深さ0.30*m*と0.50*m*で一番深く，他の2本は各々壁側縁に掘り込まれており，深さ0.10*m*である。また住居址の三つの隅には棟木を支えたと思われる支柱が存在し，深さ0.10*m*を測る。

出土遺物

(Fig. 11, PL. 6—3)

第1号住居址よりの出土遺物は床面上にはほとんどみられなく，耕作土層中に須恵器蓋，坏 (Fig. 11) 土師器甕 (Fig. 12) が出土している。

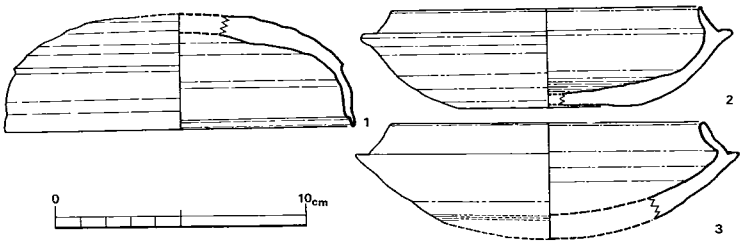


Fig. 11　第1号住居址出土須恵器実測図（縮尺⅓）

Fig. 11—1 の須恵器蓋は天井部を欠いているが，口径13.8*cm*，器高約4.6*cm*を測る。天井部はやや丸く，口縁部との間の肩部に断面三角形の比較的鋭い稜を有し，口縁部は外反したのち屈曲し，端部はやや鋭く内面に段を有している。焼成は良好堅緻，色調はやや黒味をおびた灰色を呈し，胎土は小石粒を少し含んでいるが密である。

2の須恵器坏は底部を欠いており，口径は13.0*cm*，器高3.9*cm*である。底部は内反りで，丸く体部へいたり，外反りする。受部は水平にのび，端部は丸い。たちあがりは直線的に内傾し，端部は直立し，尖る。焼成は良好で，色調は黒灰色に近い灰色を呈し，胎土は細石粒や小砂を混えるも密である。

3の須恵器坏は丸い底を欠いているが，口径12.5*cm*，器高約4.1*cm*を測る。受部は太く，ほぼ水平にのび，端部はやや鋭い。たちあがりは内傾したものが，たちあがり中位で外反し，端部は丸い。焼成は良好で，色調は灰色，胎土は小石粒を少量混入しているが緻密である。

これら1，2，3の須恵器の成形は，巻上げ水びきにより，体部にはヨコナデを施しているが，この底部内面には斜めのナデ調整がみられる。

Fig. 12—1 は土師器甕の口縁部で口径26.5㎝を測る。2は同じく土師器底部であり，焼成は良好であり，色調は淡赤褐色を呈し，胎土は石粒が混入しており，やや粗である。外面は指ナデと思われやや凹凸があり，ごく一部にはたてのハケメが施されており，内面は指で調整しており，底部近くは雑である。

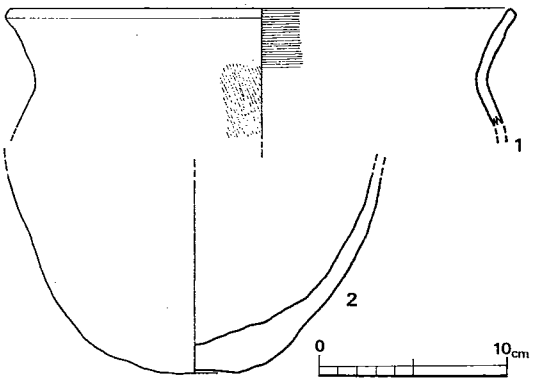


Fig. 12　第1号住居址出土土師器実測図（縮尺¼）

第2号住居址 (Fig. 13, ＰＬ. 4—1)

第1号住居址の北方3㎞に存在するが，完全発掘に至っていない。現地表下約0.05㎞下に在る。

平面プランは一辺5.60×3m以上の方形である。床面は第1号住居址と同じく北方が約0.10㎞高いが，平坦面であり，硬い。壁高は北壁0.17mで，立ち上がり角16.5度，南壁では0.22m，角16.0度である。周溝は存在しない。主柱は完全発掘を行なっていないため不明である。

出土遺物 (Fig. 13)

住居址内より出土遺物は少なく極かに床面直上より須恵器(Fig. 13) と，土師器の小破片を検出したにすぎない。須恵器坏は完形品で，口径10.8㎝，器高4.8㎝を測る。丸い底部よりほぼ直にたちあがり，口縁部へいたるが，口縁部内面には段を有し，やや尖る。体部と口縁部の接点に受部のなごりともいうべき三角形の低い稜を有している。焼成は良好で，色調は灰色に一部分であるが黒色を呈し，胎土は石粒などの混入はほとんどなく，緻密である。成形はロクロ水びきで，ロクロ目の上にヨコナデを施していて，外面の体部附近にはヘラ状のもので削ったような調整がみられる。

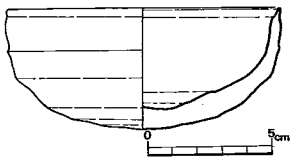


Fig. 13　第2号住居址出土須恵器実測図（縮尺⅓）

第3号住居址 (Fig. 14, ＰＬ 4—2)

第1号住居址の東方に4㎞離れており，第4号住居址とは1㎞のところに存在し，ほぼ同時期の第1号溝に攪乱されている。また住居址内には1.60×0.70㎞，深さ0.20㎞の隅丸長方形の土壙が在り，住居址より新しい土壙である。

平面プランは方形であるが，大きさは不明で，壁高はほぼ0.15mである。床面，壁ともに平坦であり，やや硬い程度である。床面に1個の柱穴を検出する。

出土土器

(Fig. 16)

出土遺物は，埋土中および床面上より出土した須恵器，土師器片である。

1は須恵器蓋であり，口径13.1cm，器高4.3cmを測る。天井部は平らで丸く，肩部につらなり，口縁部は肩部より丸く内傾して下がる。口縁端部は太く丸味をおび，内面に浅い段を有している。焼成は良好堅緻であり，色調は黒灰色を呈し，胎土はほとんど混入物はなく緻密であり，良質のものである。

2は須恵器坏で，底部を一部分欠いている。口径10.8cm，器高約4.1cmを測る。丸い底部で，受部は水平にのび端部は丸く，たちあがりは内傾したのち傾きをゆるめて外反し，端部は細く丸い。焼成は良好であり，色調はやや青味をおびた黒灰色を呈する。胎土は石粒を混入しているやや粗のものである。

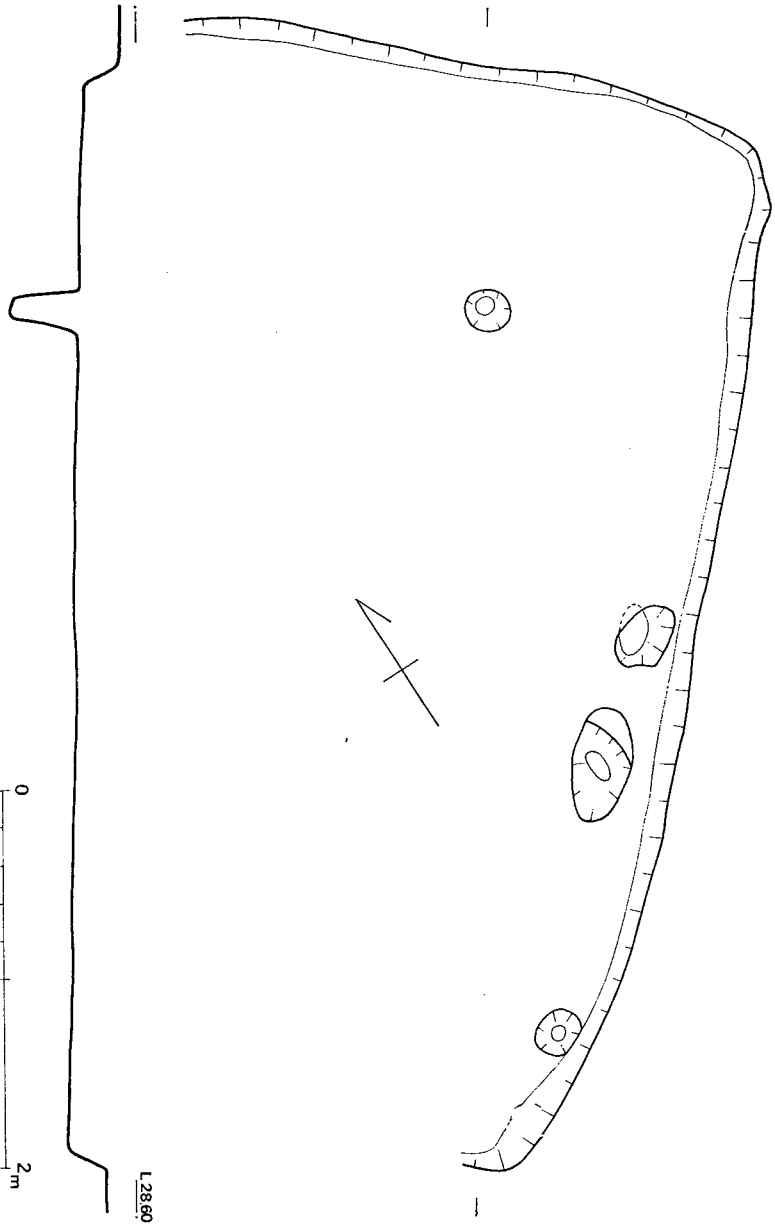


Fig. 14　第2号住居址実測図（縮尺 1/40）

3は須恵器坏で，口径12.5cm，器高4.2cmを測る。比較的平坦な底部で，受部が上外方にのび，端部はやや尖る。たちあがりは直線的に内傾し，端部は太く丸い。器肉は厚い。焼成は良

好堅緻であり，色調は灰黒色を呈する。胎土は石粒を若干含んでいるが緻密である。

1，2，3ともに成形はロクロ巻上げ，水ひきであり，ヨコナデを施している。1の天井部内面にたたき目があり，2の底部内面には指でおされた痕がみられ，3の体部より底部にかけてはヘラによる段がうかがわれる。

第4号住居址 (Fig.18, PL.5－1)

第1号住居址と第3号住居址の中間点の丘陵最先端部に位置する。現地表下1.10mに在る。

平面プランは4.80×4.60mの長方形で，主軸方向はN20°Wを示し，床面積約22m^2を有する。床面は平坦で軟質であり，やや締まりがない。北壁下に幅約0.10m，深さ約0.08mのU字溝が在り，この溝は北東隅下の不整形落込み

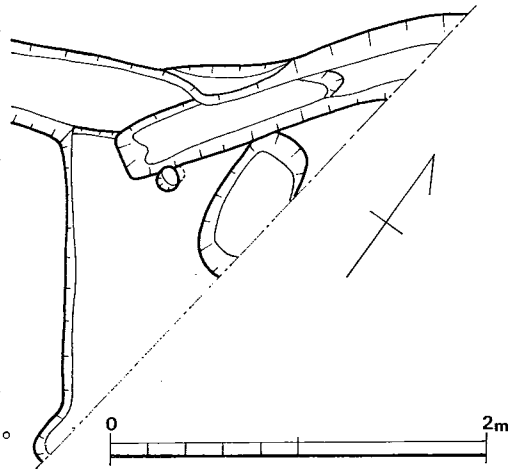


Fig. 15　第3号住居址実測図（縮尺 1/40）

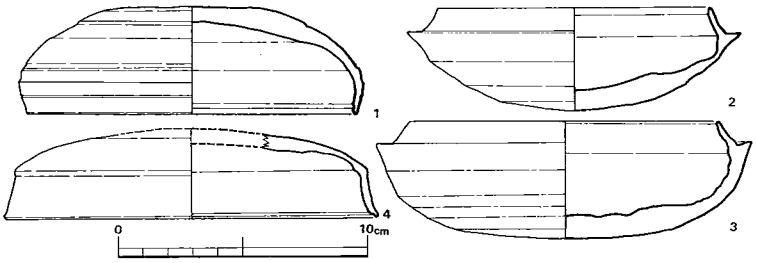


Fig. 16　第3号住居址出土須恵器実測図（縮尺 1/3）

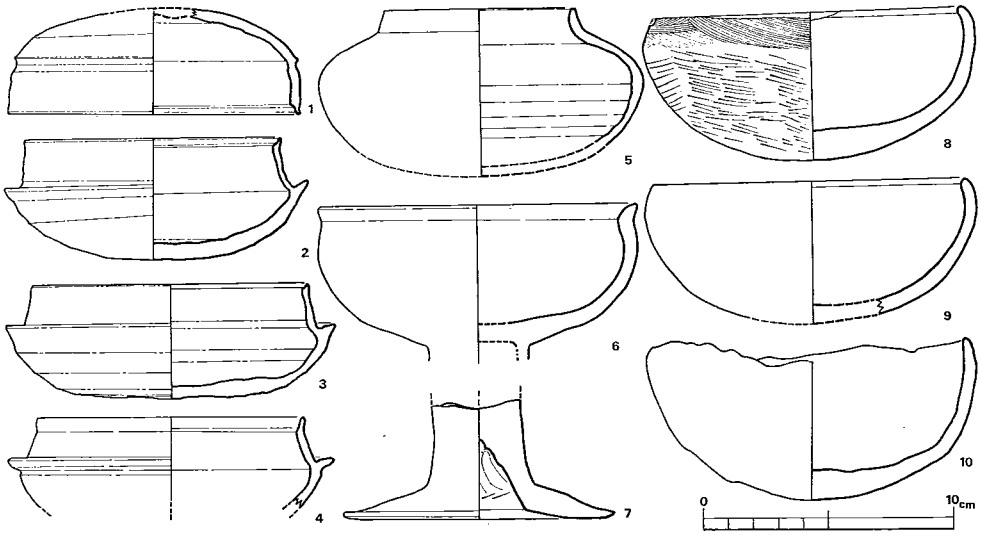


Fig. 17　第4号住居址出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/3）

部分に続いている。壁高は0.10mから0.60mであり，南方は一部破壊されている恐れがある。立ち上がりは直に近く，約5度である。壁面は床と同様に軟質である。主柱については西壁に近く，2本並列する2本の柱穴が想定される。

出土遺物（Fig. 17・19・20，PL. 5—20・6）

南西側壁に近い床面上より須恵器，土師器，手捏ね土器が一括して出土している。Fig. 17—1は須恵器蓋で，2の坏とセットになるものである。口径11.5cm，器高約6.3cmを測る。天井部は丸く，口縁部との間には断面三角形の鋭い稜を有し，口縁部へとほぼ垂直に2.1cmのび，端部は丸く，内面に段を有する。焼成は良好堅緻であり，色調は淡灰青色を呈し，胎土は砂粒を比較的多く含んでいるが密である。全体的に精緻なつくりである。

2は須恵器坏で口径10.0cm，器高4.8cmを測る。底部はやや平らに近く，体部へとのび，受部は上外方へ大きくのび，端部はやや丸い。たちあがりは2.0cmと高く，内傾したのちやや傾きをゆるめて外傾し，部分的に凹凸がある。さらに端部は外傾するもので，丸く細く，内面には段を有する。焼成は良好堅緻であり，色調は淡灰青色を呈する。胎土は砂粒を少量含むが緻密であり丁寧なつくりである。

3は須恵器坏で口径11.9cm，器高4.4cmを測る。底部は平らで全体に整い，体部は大きく外反することなく受部にのびる。受部はやや上外方へのび，端部は尖る。なお受部には稜を有する。焼成はやや良好であり，色調は灰色を呈し，胎土は粗である。

4は須恵器坏で底部を欠く。口径11.5cm，器高約4.5cmを測る。受部直下は直立して受部にのび，受部はやや上外方へのび鋭く，受部とたちあがりの間に沈線がめぐる。たちあがりは1.8cmと高く，直線的に内傾し，端部にて大きく外反する。端部は鋭く，内面に消失直前のような深く浅い段を有している。焼成は良好であり，色調は灰色を呈し，胎土は粗悪で石粒が混入し，それが内・外面に露出しているほどである。

以上の1，2，3，4の成形は，巻上げ水びきにより，部分的に回転ヘラ削りやヨコナデを施し，たちあがりはオリコミのようである。

5は須恵器短頸壺で底部を欠いている。口径7.1cm，胴部13.0cm，器高約6.5cmを測る。やや内傾する短かい口縁部を有し，端部は丸く，肩はなだらかに丸く下り，底部へとのびていて，胴部が張って，口縁部の短かいのが目だつ。焼成は不良であり，色調をみるに，外面は黒灰色が灰色に変色し，内面は灰色を呈し，胎土は緻密である。成形は水びきにより，ナデは見られない。

6は土師器高坏の坏部分であり，7の脚部と対になるものと思われる。口径12.8cm，坏器高5.6cmを測る。体部より丸く内傾して，端部で大きく外反し，端部は鋭い。端部内面下に稜を有している。焼成は良好であり，色調は淡赤褐色を呈し，胎土は砂を少量含むが密である。成形は内外面ともにナデ調整を施し，内面底部に若干の凹凸が認められる。

7は土師器高坏の脚部で，残存高4.1㎝，底径10.8㎝を測る。脚柱状部はゆるやかに拡がり，下方で大きくラッパ状に拡がり，裾部は太く長い。端部は上外方に上がり，やや鋭い。脚内部は短かい。焼成は良好であり，色調は淡黄褐色を呈し，胎土は砂を含んでいるが密であ

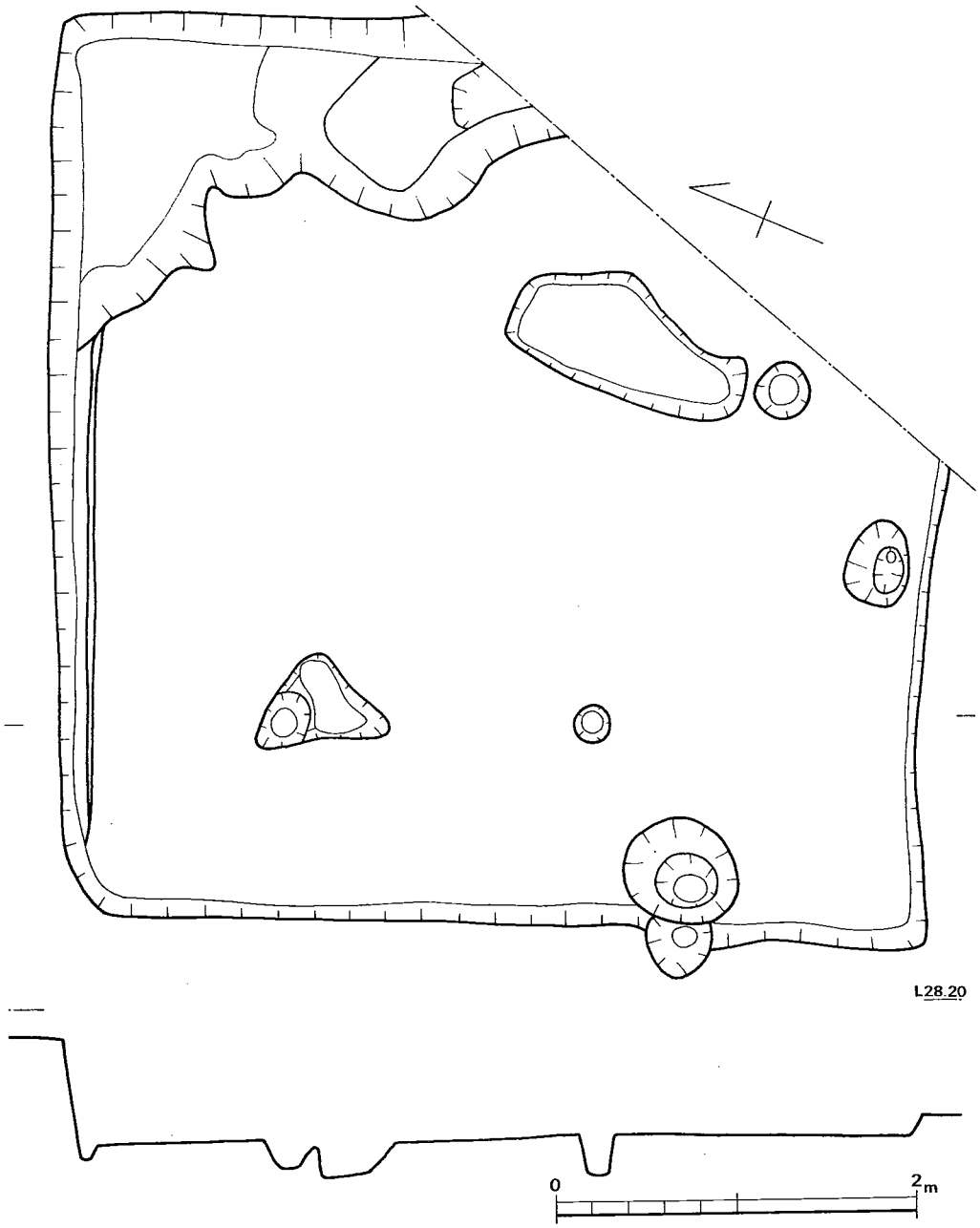


Fig. 18　第4号住居址実測図（縮尺 1/40）

る。成形は外面はナデ調整で，裾部に指圧痕があり，やや凹凸している。内面の脚部はしぼった時のシワをヘラを突込んで一回転してえぐりとり，さらにその後ヘラ先で2，3回一部を削りとり，ヘラを回転させた痕が明瞭に残存している。裾部はヨコナデ調整である。

8は土師器盌で口径12.3cm，器高5.9cmを測る。底部より丸くのび，口縁部より大きく内彎する。端部はさらに内彎し，丸い。焼成は良好であり，色調は橙色を呈し，胎土は石粒を少量含んで，やや密である。成形は外面の口縁部にハケメ，体部に指でととのえた上に擦痕があり表面は粗い感を与える。内面はハケメとナデで調整していて，よく整えられている。

9は土師器盌で底部を欠いているが，口径12.3cm，器高約5.2cmを測る。体部より口縁部にかけて丸くのび，口縁部で大きく内傾する。口縁部はやや鋭い。焼成は良好であり，色調は橙色を呈し，胎土は密である。外面にハケメと指での圧痕を有し，内面はナデ調整と，一部に指で整えられ指圧痕を有している。

10は土師器盌で口径12.5cm，器高6.3cmを測る。底部は丸く，口縁部にかけてわずかに内傾し，口縁端部が凹凸であり，一律ではない。焼成は良好であり，色調は橙褐色を呈し，胎土は微石粒を少量混入するも密である。成形は全体的にナデ調整で，底部の内外面の一部分に指圧の痕があり，やや凹凸がみられる。

Fig. 19—1 は土師器壺である。口径11.8cm，器高8.9cmを測る。丸い底部より胴部にかけて丸くのび，頸部で内傾する。口縁部で外反する。口縁端部は丸い。胴部最大径は口縁端部より⅓のところにある。焼成は良好であり，色調は外面赤茶褐色，内面は赤褐色で，外面に比べてずっと赤い。胎土は小石粒混りであり，全体的に粗である。

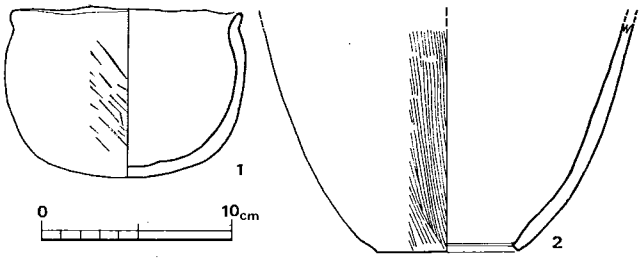


Fig. 19　第4号住居址出土土師器実測図（縮尺¼）

2は甑であり，上部を欠いている。底部径7.4cm，現存高12.0cmを測る。底部はヘラ切りで穿孔している。焼成は良好であり，色調は赤茶褐色を呈し，胎土は小石粒を少量混入しているが緻密である。成形は外面たてのハケメ，内面はナデ，ヘラ削りを施している。

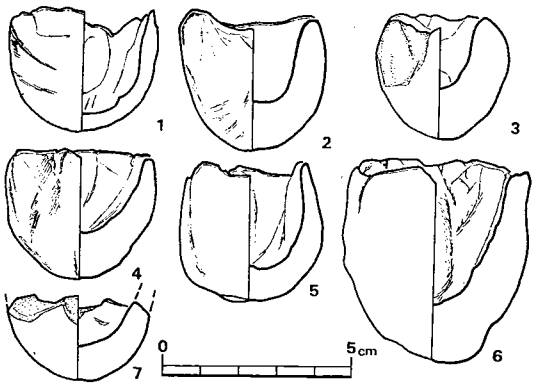


Fig. 20　第4号住居址出土手捏ね土器実測図（縮尺½）

Fig. 20—1 から7は手捏ね土器である。1は口径3.6cm，器高3.2cm，器厚

0.4㎝を測る。丸底で口縁部はほぼ直立し，端部はやや鋭い。焼成はやや良好であり，色調は橙茶褐色を呈し，胎土はやや密である。つくりは外面によく，斜めに圧指し，その指紋が残っており，内面は上から指を突込んでおさえ込んでいる。

2は口径3.2㎝，器高3.4㎝，器厚1.0㎝を測る。底部がやや尖り底で，口縁部は直立し，端部にかけて細くなり，端部は丸い。焼成は良好であり，色調は淡褐色を呈し，胎土は密である。成形は1と同じである。

3は口径2.4㎝，器高3.2㎝，器厚1.1㎝を測る。底部は尖底で，口縁部は直立し，端部にかけて先尖りとなり，端部は鋭い。焼成，色調，胎土，成形ともに2と同様であるが，3は外面上半部に打ち欠いた部分がある。

4は口径3.6㎝，器高3.4㎝，器厚0.8㎝を測る。底部はやや尖り，口縁部は直立して，丸い端部にのびる。焼成，色調，胎土，成形とも2と同様であるが，4の外面に指で斜めにすった痕がのこる。

5は口径3.1㎝，器高3.5㎝，器厚0.7㎝を測る。丸底で口縁部より内傾して端部にのび，端部は外方に鋭い。焼成，色調，胎土，成形ともに1と同じである。

6は大形で口径4.5㎝，器高5.0㎝，器厚1.2㎝を測る。尖底であり，口縁部はやや外反する。外面がとくに凸凹にでき，圧指した指紋が残っており，内面は指で大きくひいている。

7は上半部を欠いていて現存高2.2㎝，器厚0.8㎝を測る。上半部を欠いているが，焼成後に打ち欠き，そして端部が摩滅して丸味をおびているようにもみられる。焼成，色調，胎土，成形ともに2と同じである。

溝

第1号溝 (Fig. 4，PL. 3－1)

古墳時代の住居址群と同地形に在り，丘陵上を北東より南西に直線的にのびている溝で，第1号住居址，第3号住居址，第2号溝に重複している。現地表下0.70mから0.30mに在り，上幅0.82mから1.12m，下幅で0.50mから1.10mで，深さ約0.40mである。北西方が南西方より高く，0.70mの標高差がある。

出土遺物 (Fig. 21・22)

出土遺物は須恵器 (Fig. 21) と土師器 (Fig. 22) がある。

Fig. 21—1は須恵器蓋で口径13.0㎝，器高4.0㎝を測る。やや丸い天井部より丸く口縁端部へ連続的にのびる。端部は丸く，内面に浅い段を有する。肩部が不明瞭なのが特徴的である。焼成は良好であり，色調は少し青味をおびた灰色を呈し，胎土は石粒を少量混入しているが密がある。

2は須恵器蓋で口径14.2㎝，器高3.4㎝を測る。天井部は平坦で肩部に丸い稜を有し口縁部は外反して直線的にのび，口縁端部にて大きく外反する。端部内面には広く深い段を有してい

る。焼成は良好であり，色調は灰黒色を呈し，胎土は石粒を混入していてやや密である。

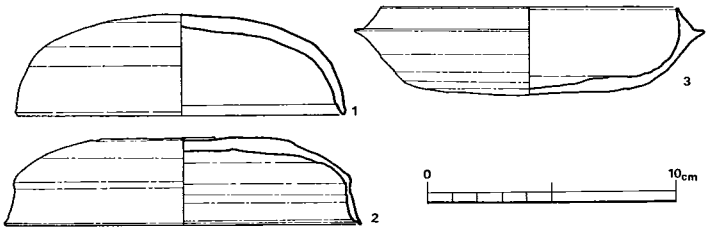


Fig. 21　第1号溝出土須恵器実測図（縮尺1/3）

3は須恵器坏であり，口径11.8cm，器高3.5cmを測る。平坦な底部より外反して受部にのびる。受部は水平で，端部はやや鋭く，口縁部は内傾して外反するもので，端部は鋭い。口縁部の基部が厚いのがめだつ。焼成は良好であり，色調は灰色で一部は焼成不十分で赤味をおびている。胎土は石粒混入であり，やや密である。

1，2，3の成形は，巻上げ，水びきである。体部，口縁部にはヘラ調整とヨコナデが施されている。1の天井部内面と，3の底部内面には円形のたたき目があり，特徴的である。

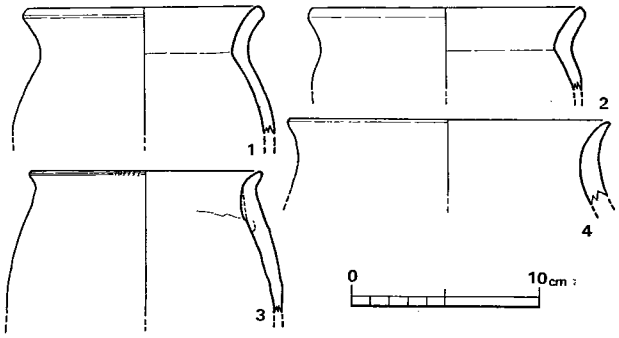


Fig. 22　第1号溝出土土師器実測図（縮尺1/4）

Fig. 22—1 から4は土師器甕であり，いずれも下半部を欠いている。 1は口径12.2cm，現存高6.6cmを測る。胴部より丸くのび，頸部でやや直線的になり，口縁部で外反し，端部は平坦である。頸部内面に稜がつく。焼成は良好であり，色調は外面暗赤茶褐色，内面は橙褐色を呈し，胎土は石粒混入で，やや粗である。成形は口縁部と口縁部の内面へラケズリ，その他はヨコナデで，内面のヨコナデは極めて雑である。2は口径14.2cm，現在高4.3cmを測る。器形は2と同じで，焼成は不良であり，色調は外面橙褐色，内面は茶褐色を呈し，胎土は石粒を少量混入していて粗である。成形は1と同じである。

3は口径12.2cm，現存高7.6cmを測る。頸部より，大きく短かい口縁部が外反し，端部は細く丸い。頸部内面には口縁部分を内側に折り返して厚くしている。焼成はやや良好であり，色調は橙褐色，部分的に赤褐色を呈し，胎土は石粒などの混入はないが，密ではなく粗である。成形は内外面ともにヨコナデ，胴部は斜めのハケメである。なお，内面の口縁部折り返し部分は指でおさえたのち，ナデを施している。

4は口径16.8cm，残存高4.4cmを測る。口縁部は曲線的にのび，端部は細くやや丸い。焼成は良好であり，色調は橙褐色を呈し，胎土は大きな石粒が混入して，やや粗である。成形はナデ調整を施している。

第2号溝 (Fig. 4)

第1号溝，第3号住居址と重複していて，第2号溝を攪乱している。北西にのびるものである。幅0.70*cm*，深さ約0.30*m*である。第1号溝，第3号住居址より新しいものである。出土遺物はない。

以上，古墳時代の遺構として竪穴住居址4基と溝2条を検出し，出土遺物として須恵器，土師器，手捏ね土器の出土をみた。これらの遺物より，各遺構は古墳時代後期のものであることが判明した。

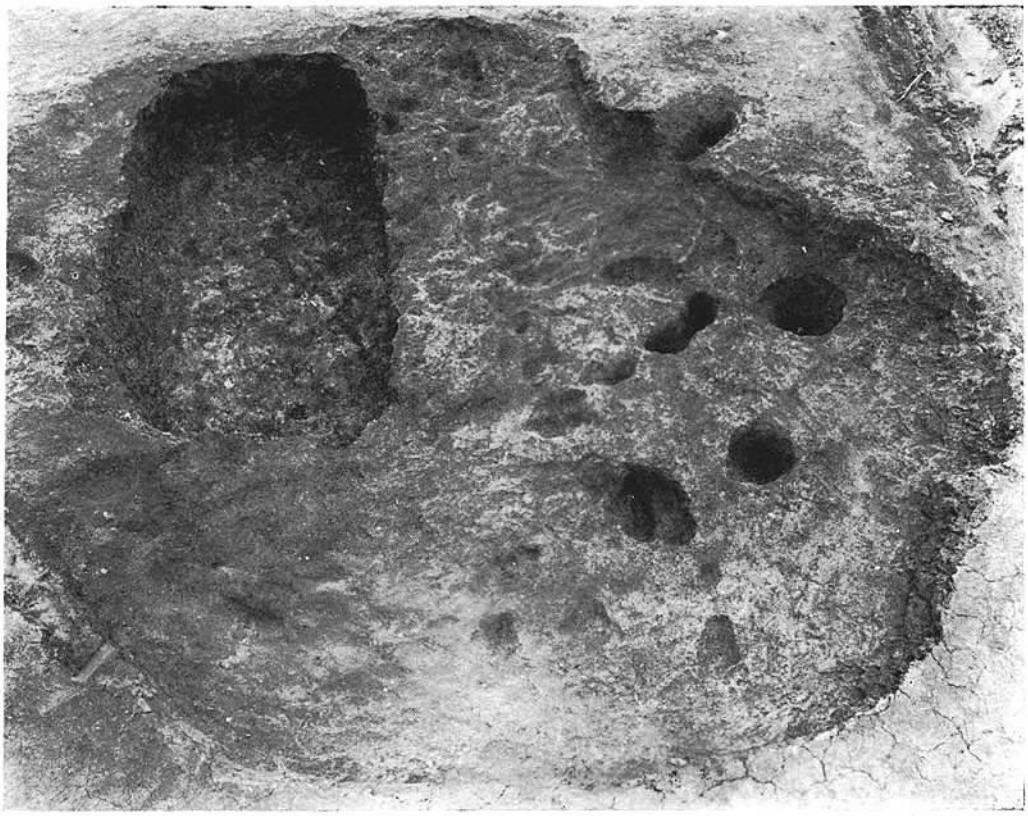
出土須恵器より住居址は第1号住居址が6世紀中頃で，第2号住居址は6世紀後半代であり，第3号住居跡は第1号住居跡と同じく6世紀中頃，第4号住居跡が一番古く，6世紀前半代に比定されよう。溝は第1号溝が6世紀後半代に，第2号溝はそれ以後に比定されよう。住居址では第4号，第1号，第3号，第2号と続き，それに溝が第1号，第2号と続くと想定される。

これら住居址のうち，第4号住居址は注目されるもので，床面よりの須恵器，土師器，手捏ね手器は一括遺物として取り上げられる。

さらにこの住居址群には竈が附属しているものがないことが注目される。福岡県内では最近とくに種々の開発事業で古墳時代の集落の発掘の調査が多く実施され，竈の附属する住居址の発見が相い継いでいる。現在では，筑紫郡太宰府町の裏の田遺跡では須恵器編年Ⅱ—B型式の6世紀前半代に比定できる住居址に竈が附属しており，最も古いようであるが，この西中隈遺跡においては竈の附属する住居址はない。後述の宮裏遺跡では6世紀後半代に比定できる住居址に竈の附属がみられることは，本遺跡と対称的である。　　(上野精志)

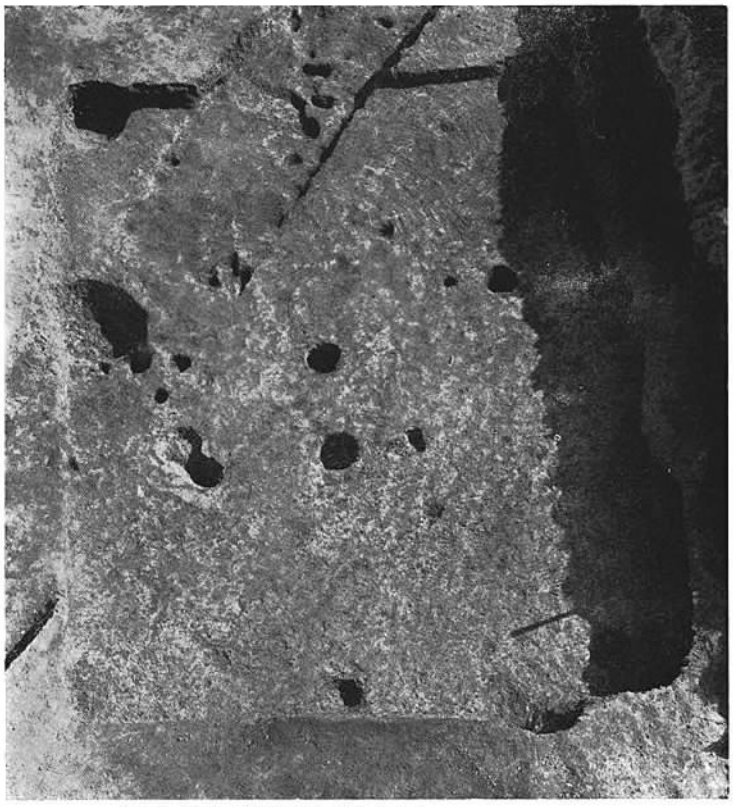
遺跡全景（北より）

(1) 北半遺構群全景（南より）

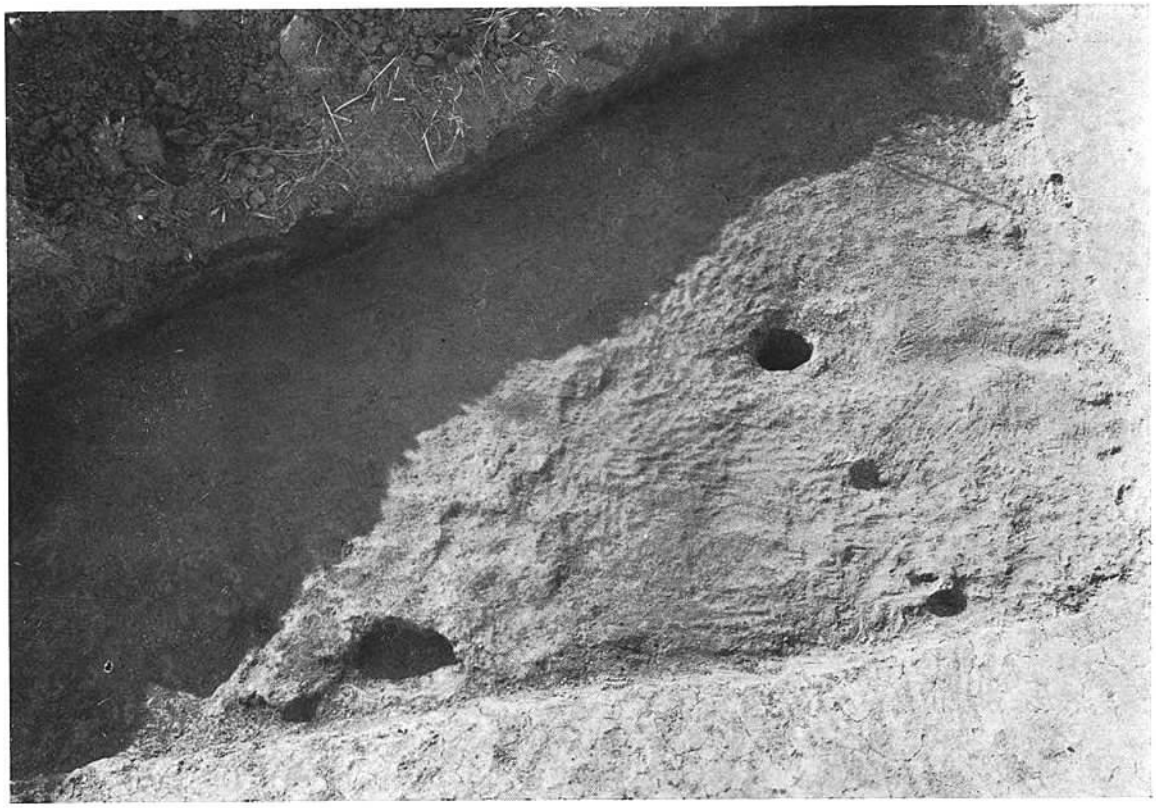


(2) 第 2 号 竪 穴（北より）

（1）南半住居址群全景（北より）



（2）第1号住居址（北より）

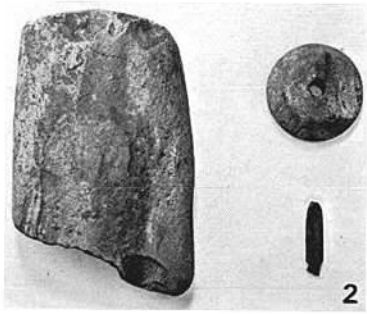


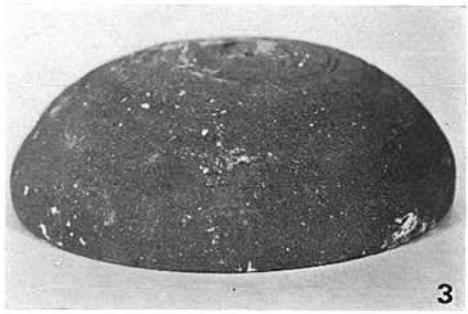
(1) 第 2 号住居址(東より)

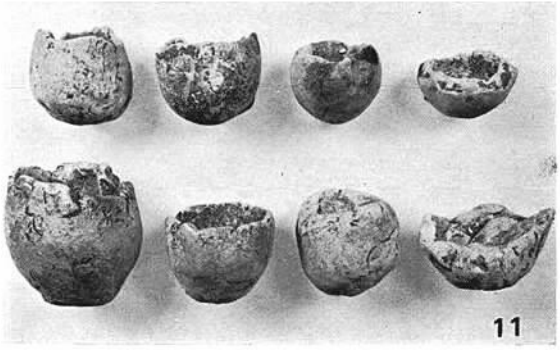
(2) 第 3 号住居址(西より)

（1）第 4 号 住 居 址（北より）

（2）第4号住居址内遺物出土状況（南より）







出土遺物　1—3号竪穴，3—1住居址，4～11—4号住居址

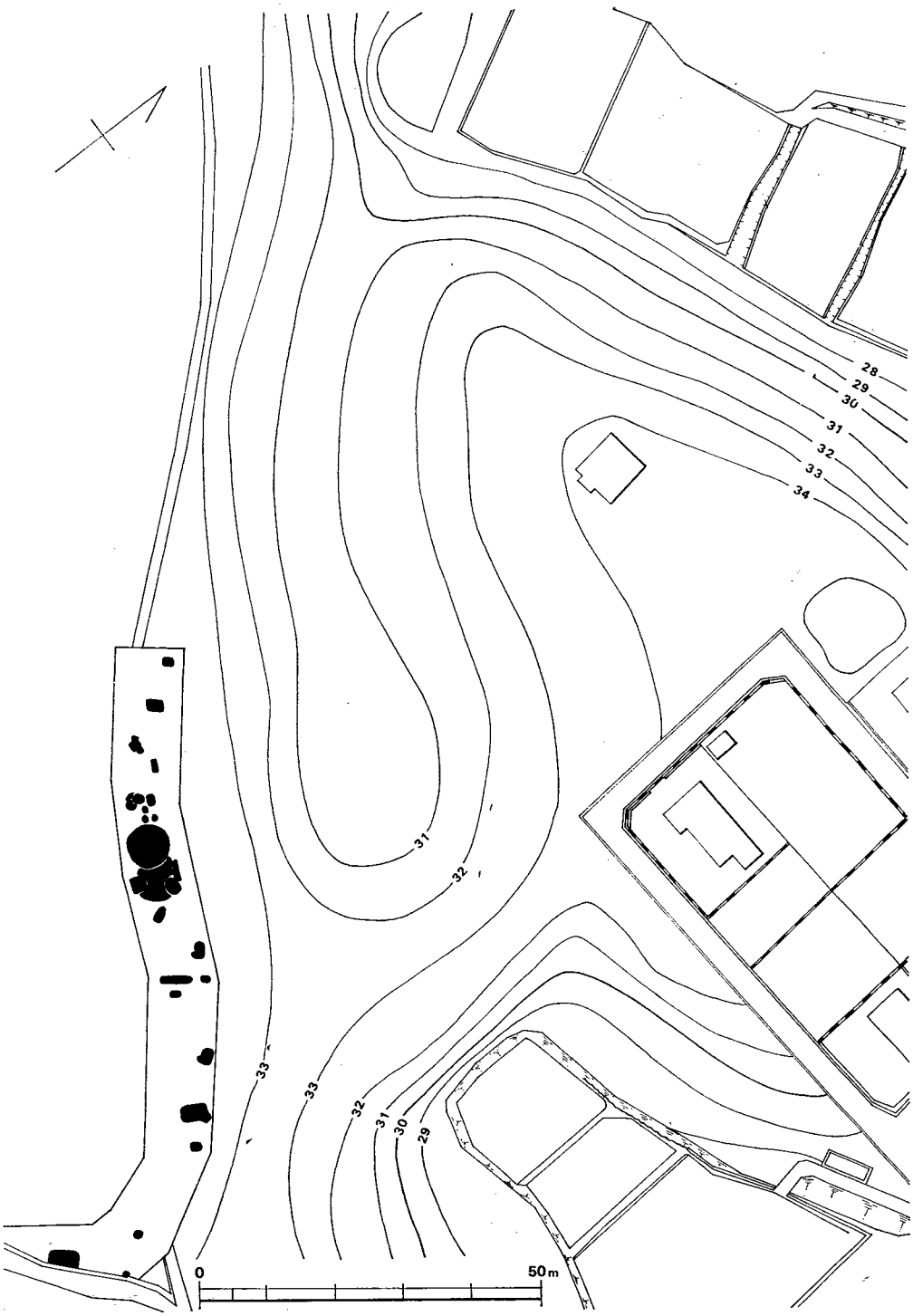


Fig. 23 宮裏第1地点遺跡全体図(縮尺 1/1,000)

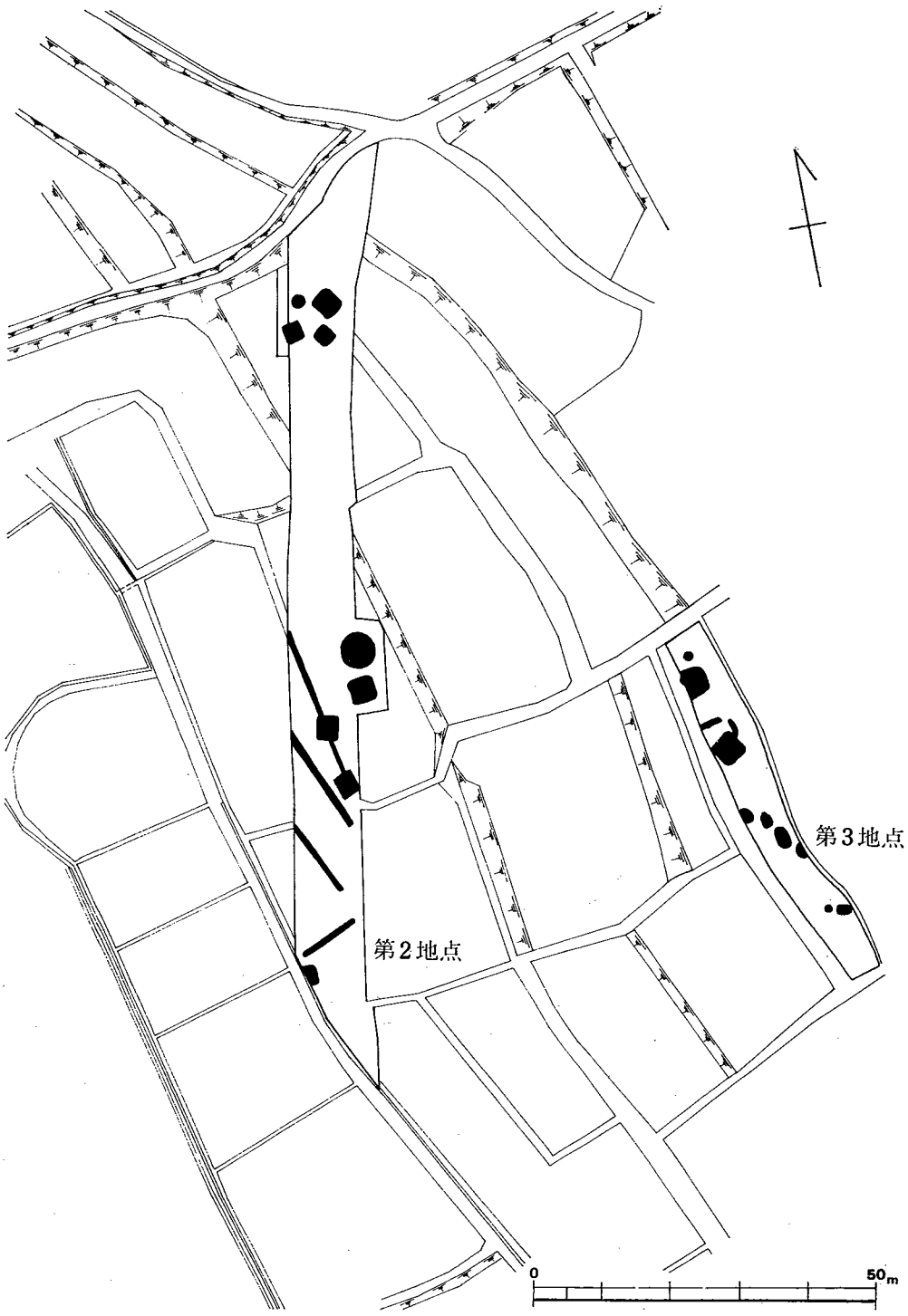


Fig. 24 宮裏第2・第3地点遺跡全体図（縮尺1/1,000）

Ⅵ 宮 裏 遺 跡

A. 遺 跡 の 概 況 (Fig. 23, 24)

丘陵上の3地点にわたって調査を実施した。つまり丘陵頂部(第1地点)，西側緩傾斜面（第2地点)，西南斜面(第3地点）である。第1地点からは弥生時代前期末から中期初にかけての貯蔵穴群が主として検出された。第2，第3地点は同一の遺跡と思われ，弥生時代中期および古墳時代後期の住居址群が認められた。

B. 第 1 地 点

(Fig. 23, 付図Fig. ①, PL. 7—2. 9. 10)

弥生時代の遺構としては18基の貯蔵穴と住居址2軒，古墳時代の遺構としては2基の小ピットと住居址1軒が確認された。なお古墳時代住居址は第2地点のそれと一連のものであろう。

1. 弥生時代の遺構と遺物

貯蔵穴

第1号竪穴 (Fig. 28, PL. 11—1)

第2号および第3号竪穴を切っている。深さ約0.6cmの楕円形を呈する。

出土遺物 (Fig. 25, PL. 27—1)

内部から高坏を出土した。高坏の製作工程は下記のように認められる。まず円筒形粘土を主柱とし，その下部周囲に粘土を張って脚としている。その上をナデて整形し，底部は指で押さえて，若干窪めている。また主柱上端を横へ引き出した後，上に粘土を乗せて坏部を作っている。胎土中に砂粒を多く含み，橙茶褐色を呈する。

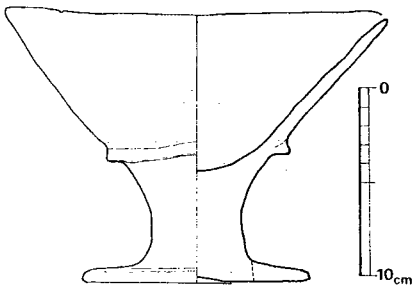


Fig. 25 第1号竪穴出土土器実測図 (縮尺 1/4)

第2号竪穴 (Fig. 28, PL. 11)

第4号竪穴に切られている。底面は約2.4×2.0m を測る隅丸方形を呈し，深さ1.9mの袋状竪穴である。

出土遺物 (Fig. 26・27, PL. 28)

内部からは多量の土器を出土した。Fig. 26—1 は外面をヘラで磨かれた壷で，焼成も良好である。2は1と概同一器形，大きさであるが，焼成は悪い。5は口縁を軽く外反させた鉢で，内外面ともヘラでナデ上げている。Fig. 27—1 は器壁が剝落しているため，整形法は不

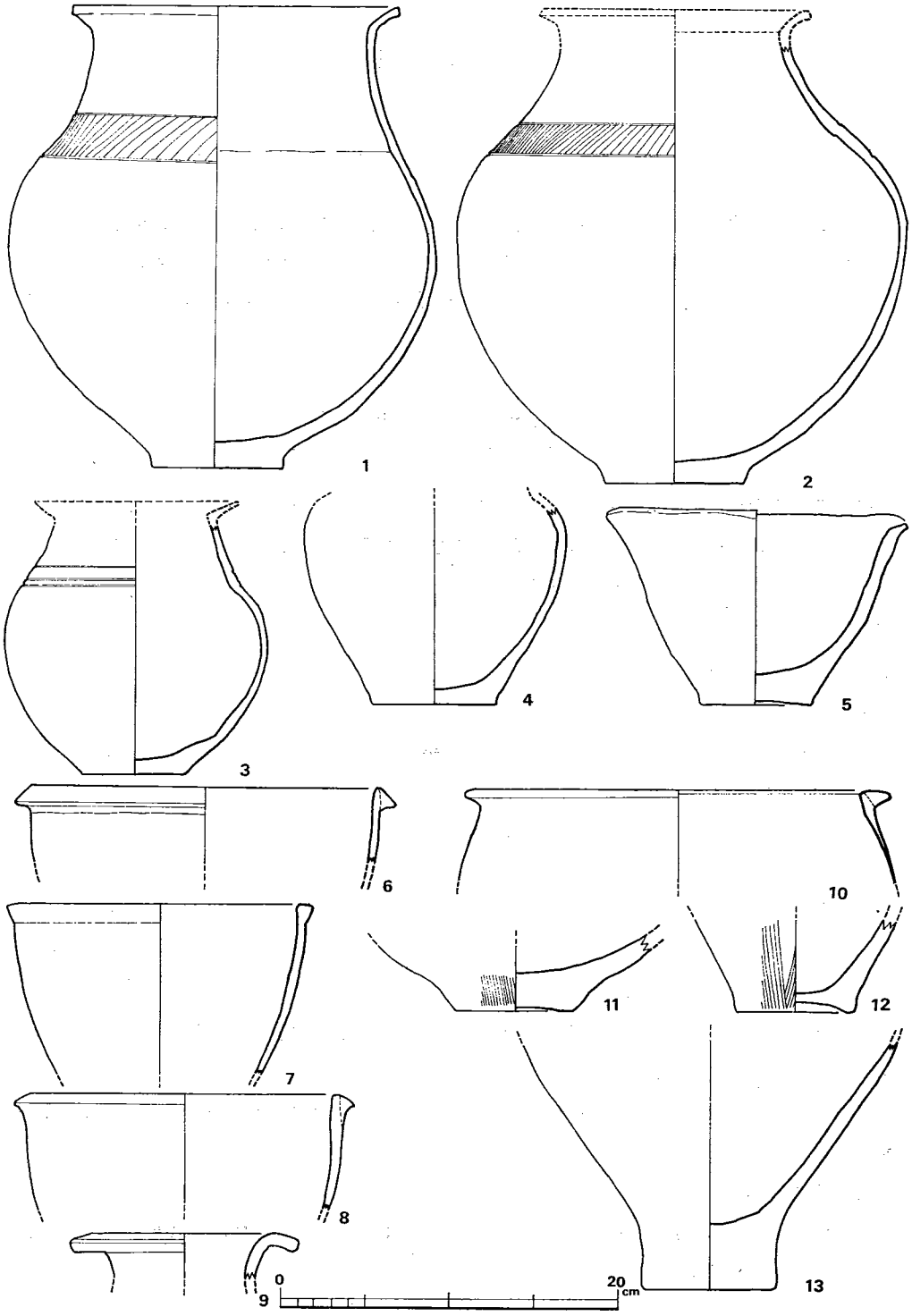


Fig. 26　第2号・第4号竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）

明瞭であるが，ヘラ整形の上から刷毛でナデているようである。3の内面下半部には炭化物が附着している。

第3号竪穴 (Fig. 28)

底面は1.7×1.2*m*を測る隅丸方形を呈し，深さは2.6*m*の袋状竪穴である。

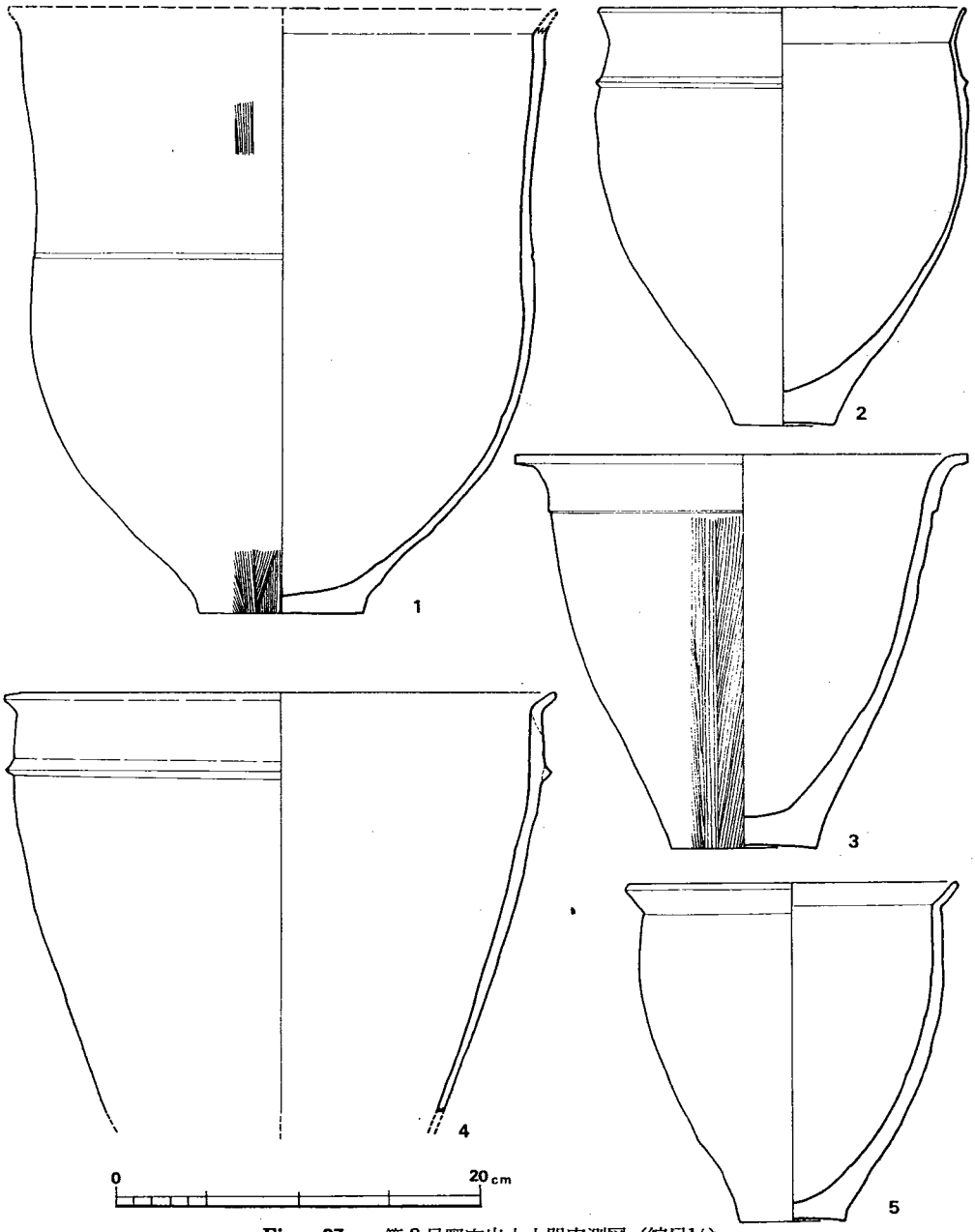


Fig. 27 第2号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

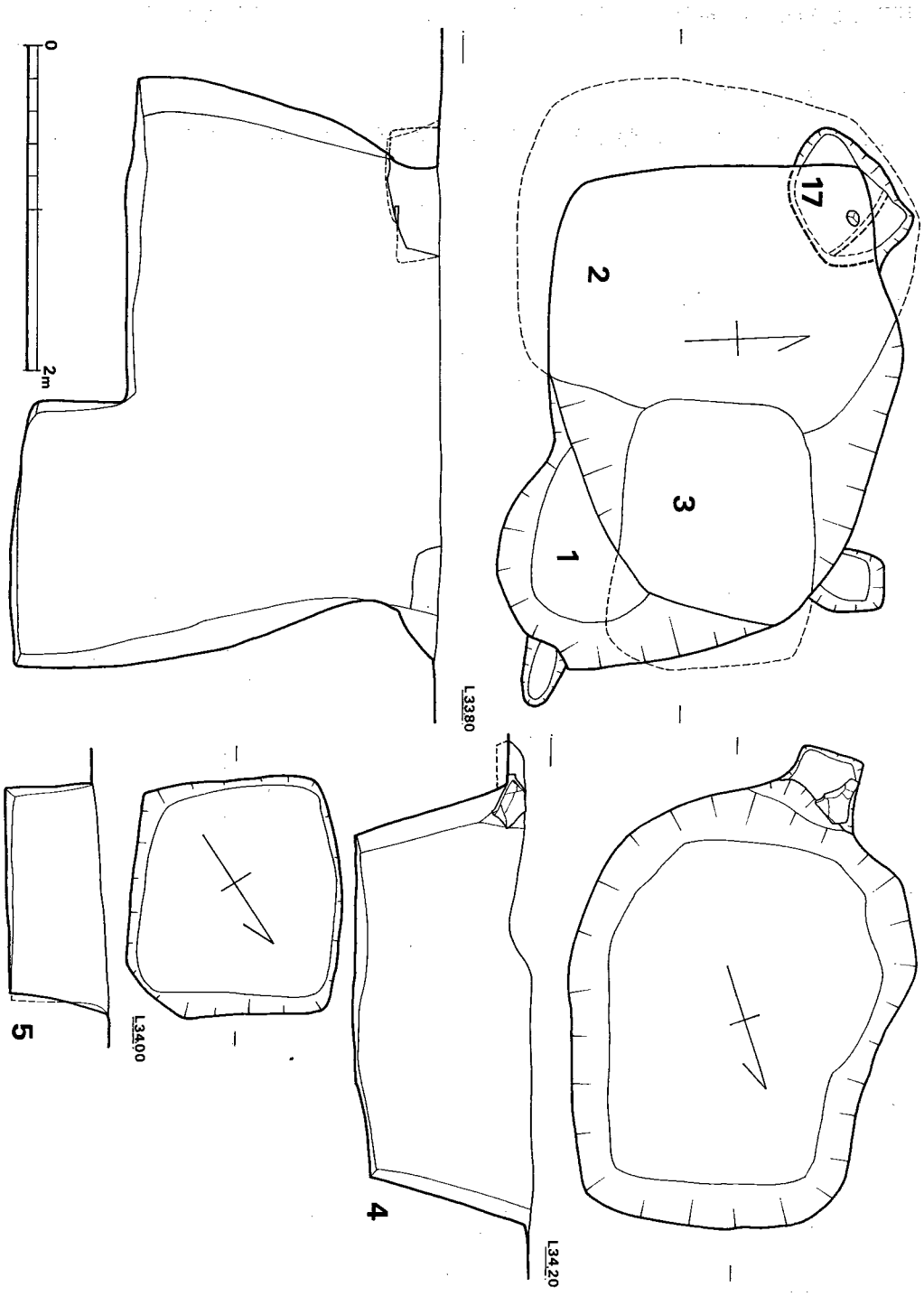


Fig. 28 第1～5号・17号竪穴実測図（縮尺1/40）

第4号竪穴 (Fig. 28, PL.12—2)

底面は2.1×1.4*m*を測る隅丸方形を呈し，深さは約1.1*m*である。

出土遺物 (Fig. 26)

9は焼成良好な壷である。6～8は鉢，10～13は甕である。

第5号竪穴 (Fig. 28, PL.14—1)

底面は1.2×1.2*m*を測る方形を呈し，深さは約0.6*m*である。

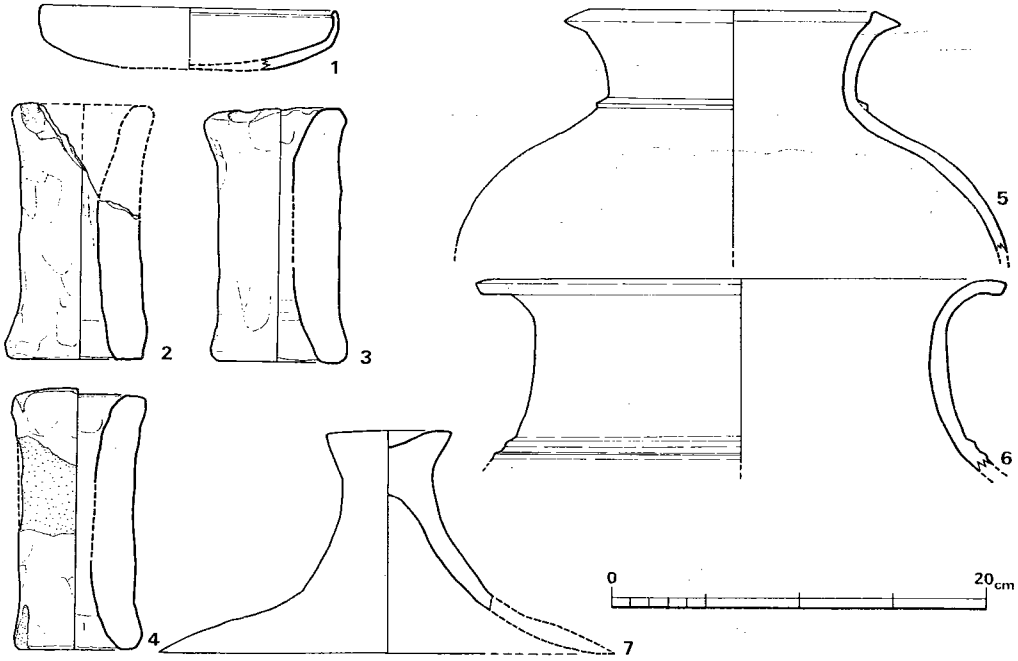


Fig. 29 第5号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

出土遺物 (Fig. 29, PL.29—2～6)

1の土師器は焼成脆弱で，器壁の剝落が著しい。口唇端は内側にやや肥厚する。2～4の支脚は一括して出土した。5，6の壷はいづれも胎土中に砂粒を多く含み，ナデ調整は粗雑である。

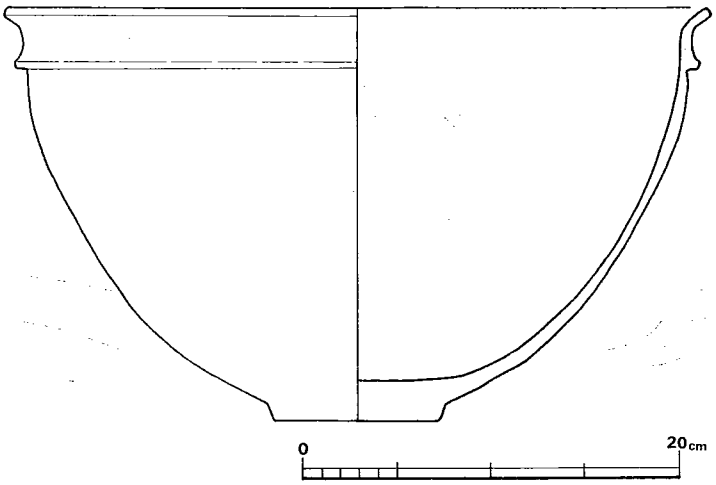


Fig. 30 第7号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

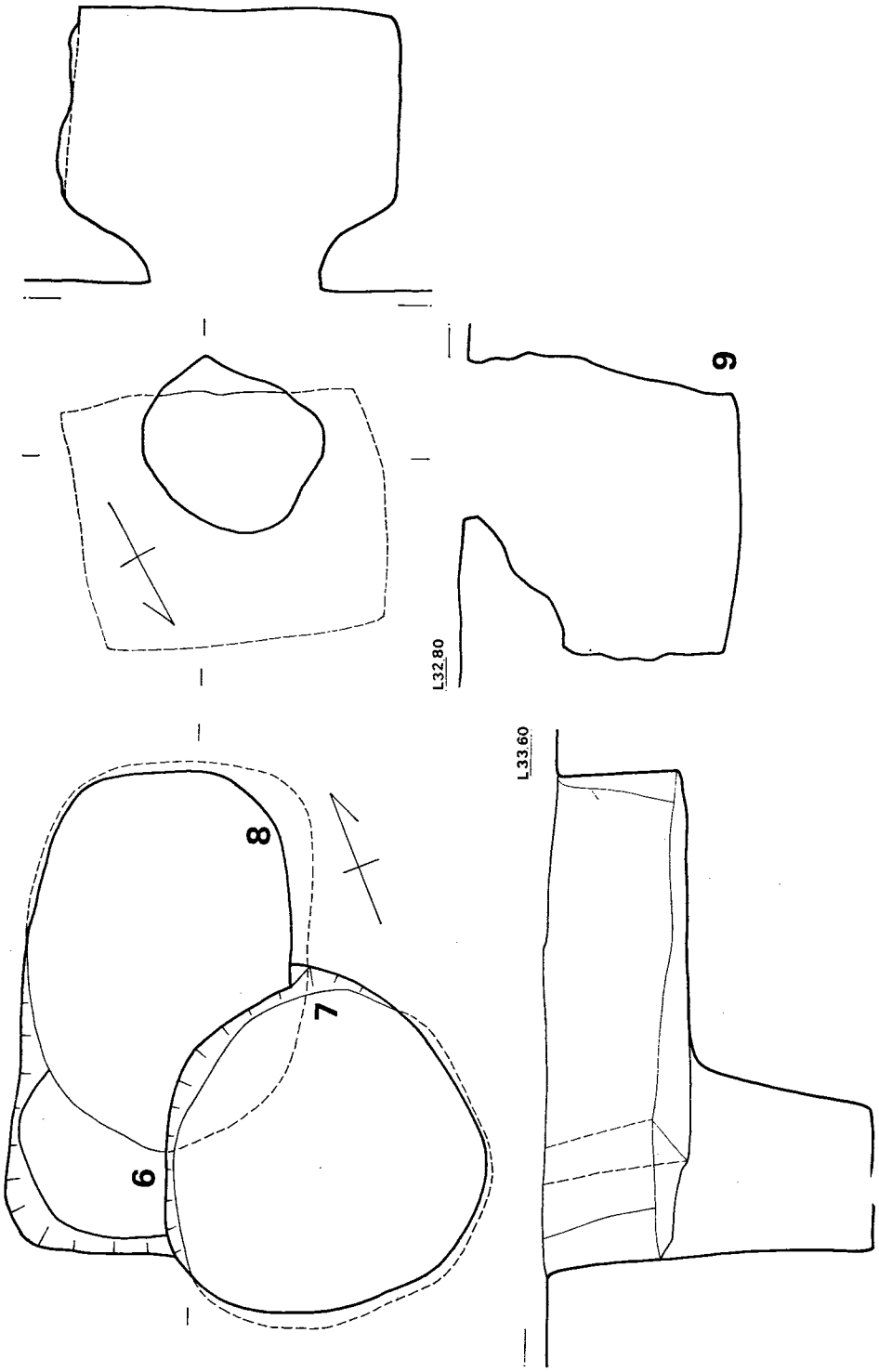


Fig. 31 第6～第9号竪穴実測図（縮尺1/40）

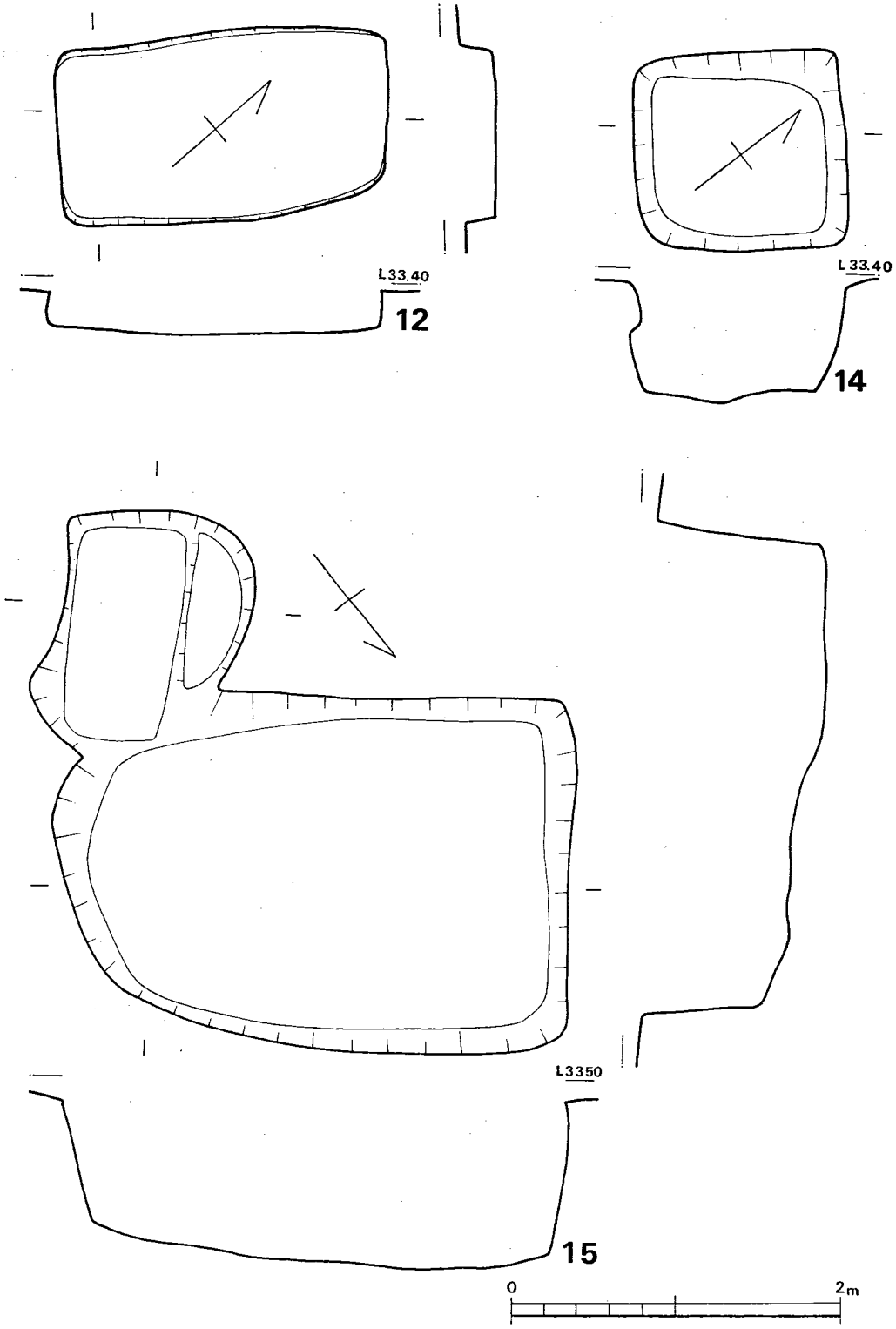


Fig. 32 第12・14・15号竪穴実測図（縮尺1/40）

第6号竪穴 (Fig. 31, PL.14—2)

第7および第8号竪穴によって切られている。平面形は隅丸方形と思われるが，規模は不明である。深さは残存最深部で約0.8*m*である。

第7号竪穴 (Fig. 31, PL.14—2)

底面は径約1.9*m*の円形を呈し，深さは約1.9*m*と深い。西北隅を第8号竪穴によって切られている。

出土遺物 (Fig. 30)

器壁剝落により調整法は不明瞭である。

第8号竪穴 (Fig. 31, PL.14—2)

第7号竪穴上に築かれた，底面2.3×1.6*m*の楕円形竪穴である。深さ0.8*m*で，やや袋状を呈する。

出土遺物 (Fig. 34, PL.29—7)

内部からは多量の土器が出土した。1は高さ49*cm*の大型短頸甕で，口縁部も端部を僅かに外彎させているにすぎない。胴部調整のハケメは幅広で，間隔は密である。加熱によって胴下半部は赤変し，上半には煤が附着している。2，3にはいづれも煤が附着している。2の口唇部は剝落著しく，刻みの状態は不明瞭である。4の口縁部は僅かに外傾し，その幅は最大胴部幅

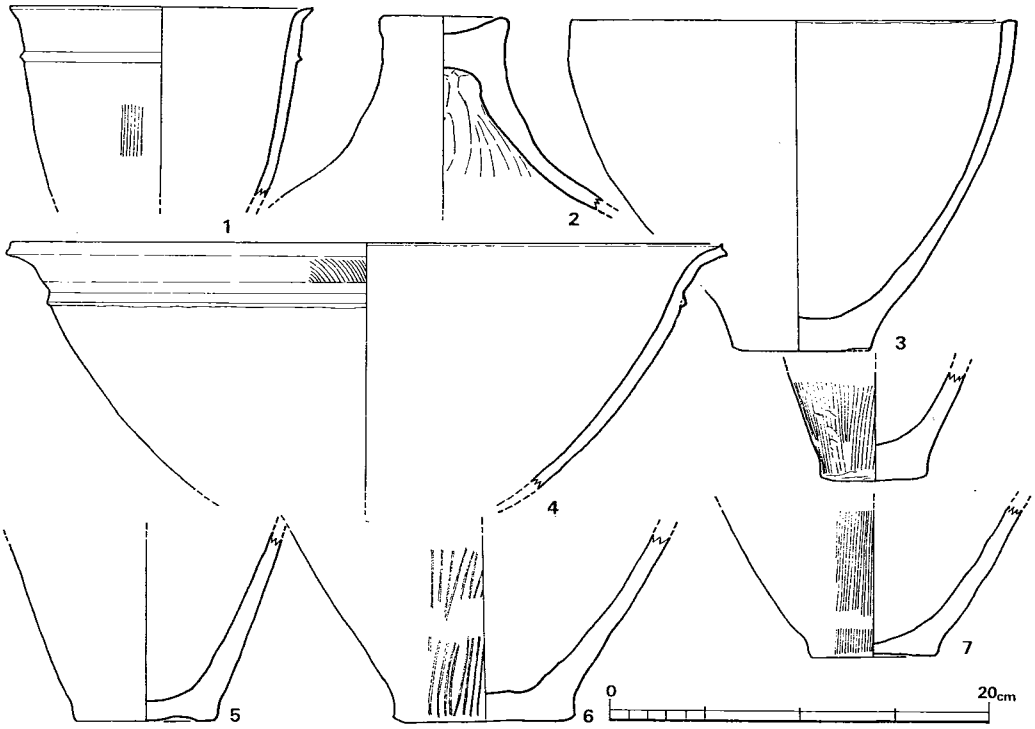


Fig. 33　第9号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

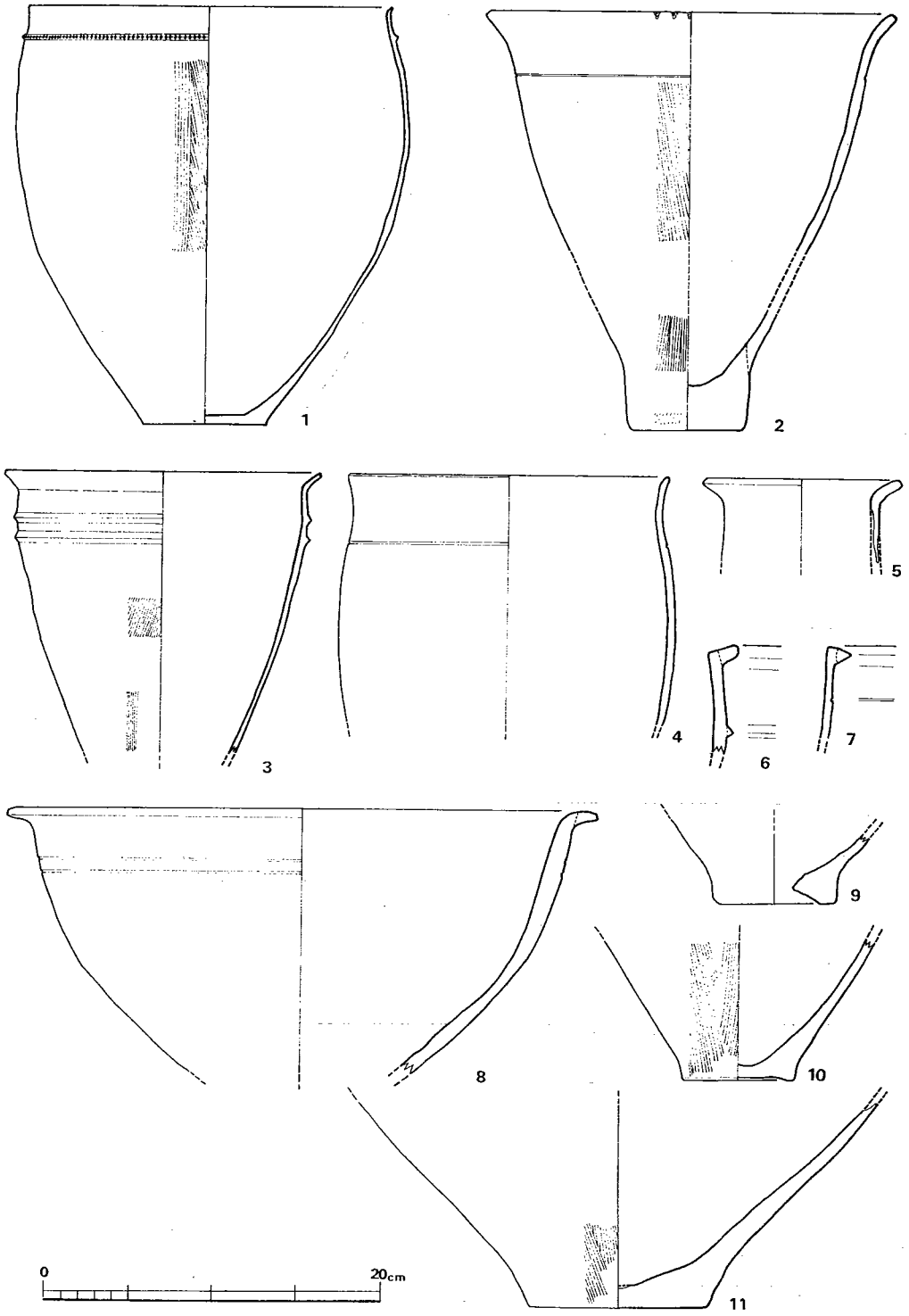


Fig. 34 第8号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

に匹敵する。器面調整は不明瞭である。8は2条の沈線を口縁部下に入れた鉢型土器で，ヘラ状工具で内外面とも調整している。

Fig. 47—7・11 の石鏃は，いづれもサヌカイト製で，リタッチは丁寧である。

第9号竪穴 (Fig. 31, PL.13—1)

残存口径は1.0×0.7*m*の楕円形，底面は1.75×1.4*m*の方形を呈し，深さ1.6*m*の，ほぼ完形の袋状貯蔵穴である。袋状をなす断面は上部約⅓のみで，下部はほぼ垂直な壁面である。なお口径部は南壁が幾分崩壊した感があるが，全体的に南に片寄っている。

出土遺物 (Fig. 33, PL.29—8)

口縁部を短かく外彎させた甕で，器面調整は胴部一部にハケメを見るのみで，大部分の器面は剝落している。2の蓋は脚端を欠く。頂部内外面には指圧痕がみられる。淡茶褐色を呈する。

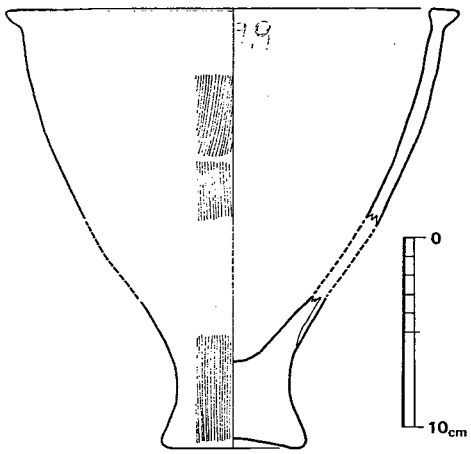


Fig. 35 第10号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

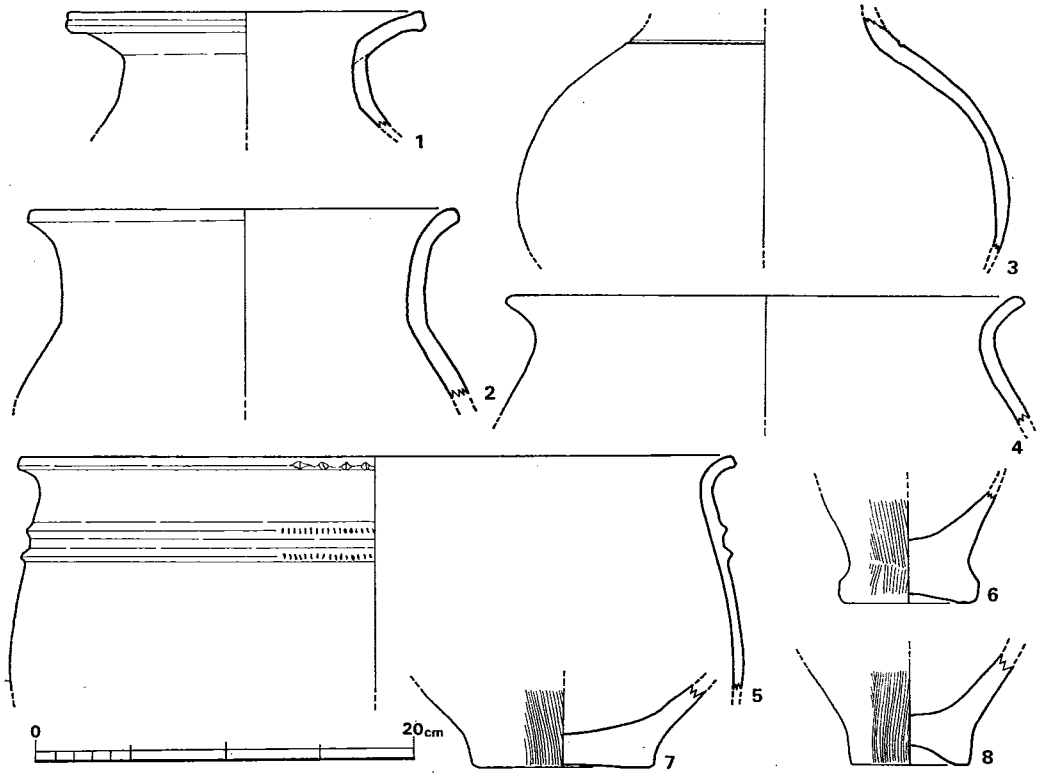


Fig. 36 第11号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

3は外面を丁寧にナデた深鉢である。胎土も精良である。茶褐色を呈する。4は内外面とも丁寧にナデており，垂下する貼付凸帯の前後にハケメを見るのみである。口唇部は強いナデによって若干窪んでいる。Fig. 49—9の砥石は使用面を僅かに残すのみで，原形は不明である。

第10号竪穴

長さ1.15*m*の不整形2段掘りの竪穴である。

出土遺物 (Fig. 35)

平端口縁の甕で，胴部から底部にかけて，細かく丁寧なハケメが観察される。口縁部内側および底面には指圧痕がみられる。

第11号竪穴

2.2×1*m*の不整長方形を呈し，深さ1.4*m*の底面には，さらに2つの小穴がある。2つの竪穴の切り合いかとも考えられるが，土層断面からは首肯されなかった。

出土遺物 (Fig. 36)

1は南側小穴中より出土した壷である。口唇部は強いヨコナデのため若干窪んでいる。2は胴の張りが小さな壷で，ヨコナデによって外面を調整している。3は胎土，焼成ともに良好な壷で，胴部上半はヨコナデ，下半はタテナデ調整している。橙褐色を呈する。4，5は頸部のしまった甕である。5の刻みは深く，特に凸帯上のそれは，長さ3㎜ほどの尖ったヘラ先を

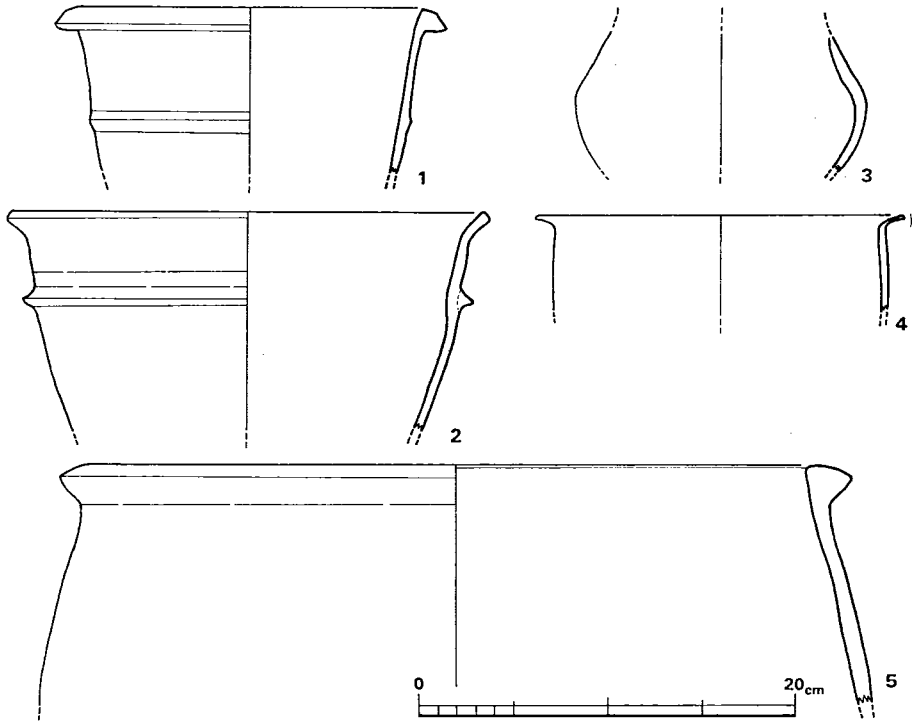


Fig. 37 第13～15号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

軽く押し当てた程度である。

Fig. 48—3の土製紡錘車は胎土が粗く，焼成も良くない。Fig. 49—6は玄武岩製磨製石斧片で，表面の風化が顕著である。

第12号竪穴 (Fig. 32)

2.0×1.1*m*の長方形を呈し，深さ30*cm*の壁は，ほぼ垂直である。

出土遺物

内部から Fig. 48—1の土製紡錘車が出土した。

第13号竪穴

長さ5.4*m*の溝状遺構である。最大幅1.1*m*で深さ約1*m*である。長辺のうち西南辺はほぼ垂直に落ち込むが，東北辺は摺鉢状になっている。なお，第12，14号竪穴とは1*m*強の間隔で平行関係にある。

出土遺物 (Fig. 37，PL. 29—9)

2の甕は荒いハケメによって整形され，さらに凸帯から口縁部にかけて，その上をヨコナデしている。4は胎土，焼成ともに良好な甕で，口縁部は薄い。

第14号竪穴

(Fig. 31)

一辺1.3*m*の方形竪穴で，深さ0.7*m*の壁は一部袋状をなす。

出土遺物 (Fig. 37)

3は壷胴部片で，黄茶褐色を呈する。5の甕の口縁部は厚く，ヨコナデしている。茶褐色を呈しており，焼成は良好である。

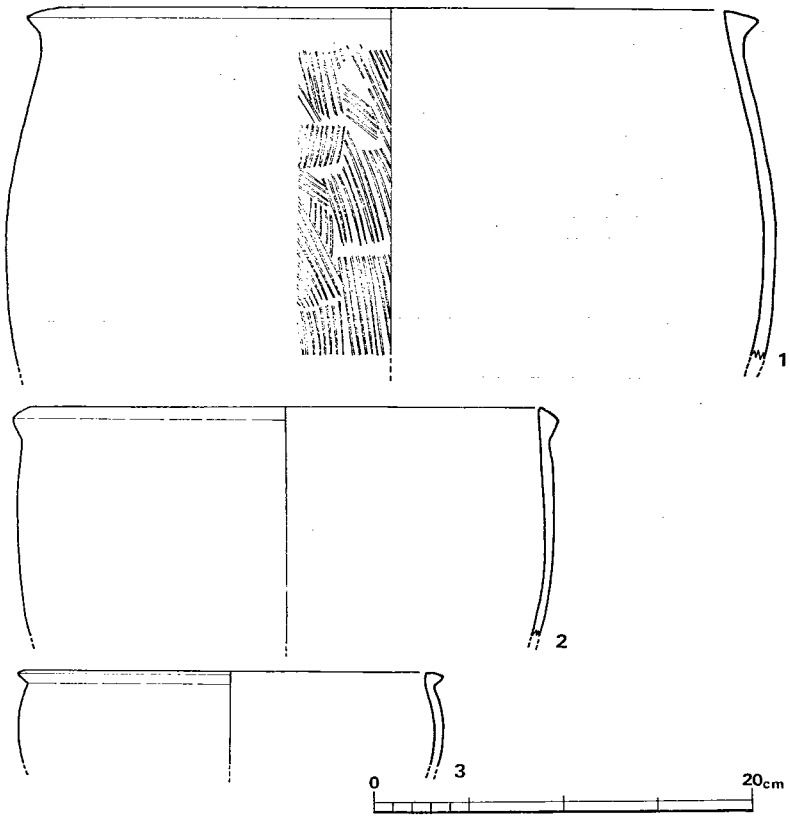


Fig. 38　第16号竪穴出土土器実測図（縮尺¼）

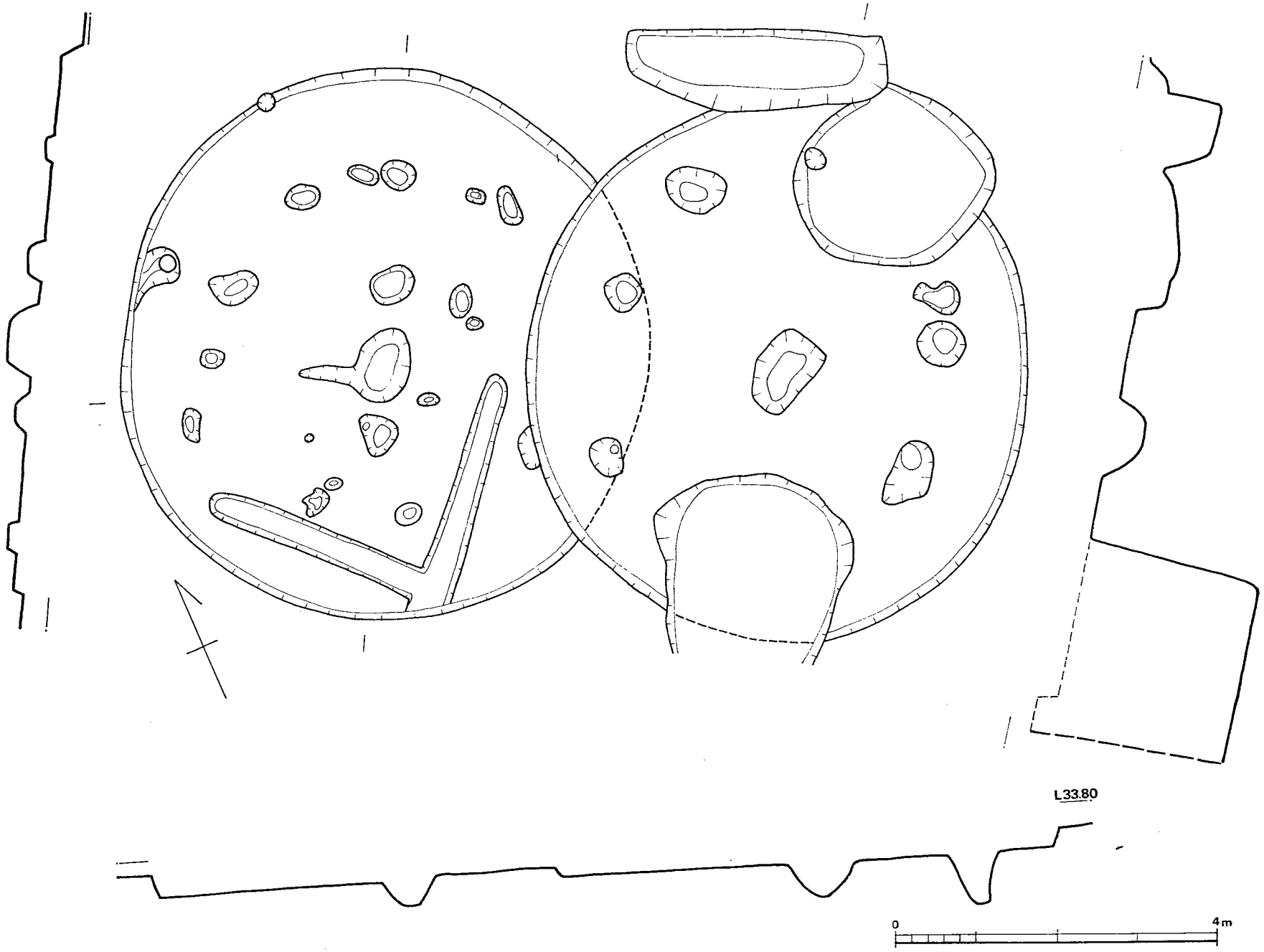


Fig. 39 第 1・第 2 号 住 居 址 実 測 図（縮尺1/40）

第15号竪穴 (Fig. 32)

3.0×1.1*m*の長方形を呈し，最深部で約1*m*を測る。北側に接する2段掘り竪穴との切り合い関係は平面および断面観察によっても明らかでなかった。

出土遺物 (Fig. 37—1)

1の甕は垂下した厚い貼付口縁をもつ。凸帯は幅広く扁平である。胎土中石粒が多い。また風化が著しく器面調整は明らかでない。

第16号竪穴

2.9×1.6*m*の長方形を呈し，深さ約1*m*を測る。

出土遺物 (Fig. 38, PL30—1)

1は三角凸帯を貼り付けた口縁部を持ち，胴部のハケメは荒く雑である。 2，3はいづれも器面の剝落がはなはだしく，調整法は不明瞭である。

住居址

2軒の円形住居址が検出された。いづれも床面中央に楕円形ピットを持ち，多くの柱をめぐらした住居址である。

第1号住居址 (Fig. 39, PL.15—1)

径6.4*m*の円形を呈する。西南および東側の竪穴埋土上に築かれている。また西壁は第2号住居址に，東北壁は長方形竪穴によって切られている。壁高は0.23～0.15mを残している。柱穴と考えられるもの6を検出したが，西南の竪穴埋土上で，柱穴らしき痕跡を認めることはできなかった。床面中央には1.0×0.7*m*の楕円形を呈し，深さ0.4*m*の小竪穴を検出した。内部に焼土は入っていない。

出土遺物 (Fig. 40)

床面上および埋土中からは弥生式甕口縁片1，底部片2，および砥石を検出したにすぎない。1，2はいづれも荒いハケメ整形が認められる。

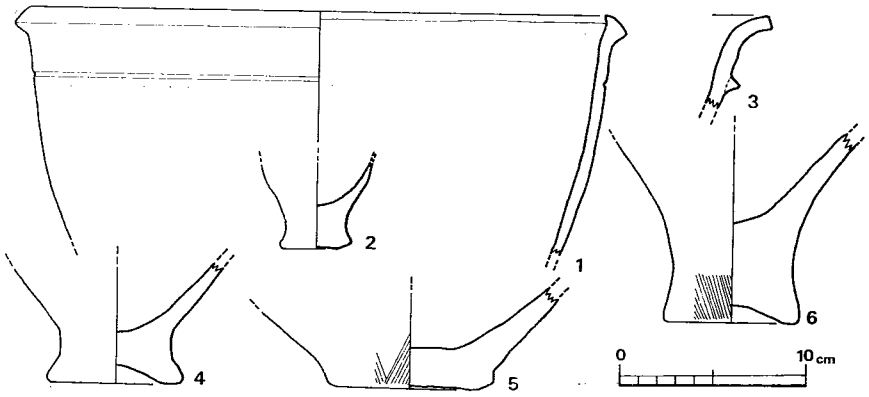


Fig. 40 第1・第2号住居址出土土器実測図 (縮尺¼)

第2号住居址 (Fig. 39, ＰＬ.15—2)

径6.8*m*の円形を呈する。壁と平行にめぐる柱穴は12あるが，いずれも深さは0.1*m*内外と浅い。北西壁側柱穴のみは深さ0.4*m*を測る。床面中央には1.0×0.7*m*の楕円形を呈し，深さ0.7*m*のピットがある。内部に焼土は入っていない。なお両側には深さ各0.15*m*の小ピットがある。

出土遺物 (Fig. 41)

埋土中上部からは土師器，須恵器が出土した。1は蓋受けのあまい坏身である。2の高台は外反が著しい。坏部底面には9条の相交する沈線が引かれている。3は土師器盤で，ヨコナデ整形されている。床面からは2点の弥生式土器片が出土した。Fig. 40—1 は口縁部に三角凸帯を貼付けた甕で，ナデ整形している。ほぼ全面に煤が付着している。2は口縁部を欠く小形壷である。整形法は風化のため不明瞭である。Fig. 48—9 は片岩製，10は土器片利用の円盤である。紡錘車の未製品とも思われる。

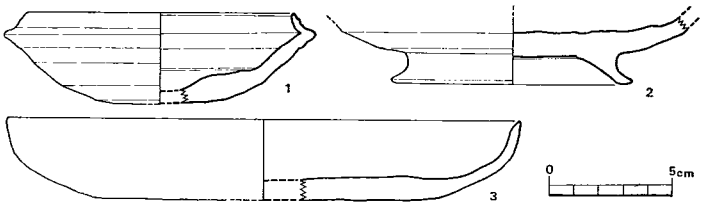


Fig. 41　第2号住居址出土土器実測図（縮尺⅓）

2. 古墳時代の遺構と遺物

第17号竪穴

(Fig. 28, ＰＬ.12—1)

0.84×0.60*m*の長方形を呈し，深さ0.3*m*の竪穴である。

出土遺物

(Fig. 42, ＰＬ.30—2～4)

1は床面中央に接して出土した。内外面とも指の圧痕が残る。特に口縁部内側に顕著であ

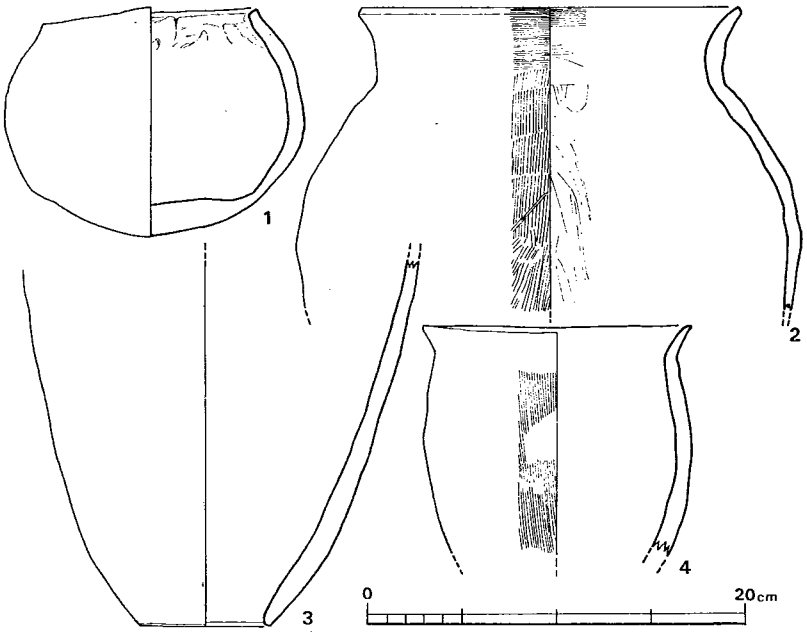


Fig. 42　第17号竪穴・第3号住居址出土土器実測図（縮尺¼）

る。口唇部も凹凸が激しい，2の壷は口縁部内外面と，胴部以下のハケを使いわけている。頸部以下の内面にはヘラケズリの痕が顕著である。3の甑は内外面ともヘラケズリされており，底部附近にのみヨコナデ調整痕が観察される。

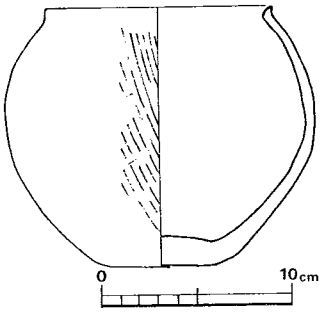


Fig. 43 第18号竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）

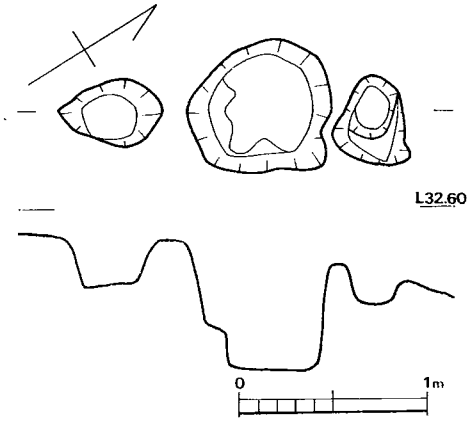


Fig. 44 第18号竪穴実測図（縮尺1/40）

第18号竪穴 (Fig. 44)

径約0.76*m*の不整円形竪穴で，深さは約0.7*m*測られる。

出土遺物 (Fig. 43, PL.0—6)

完形の坩である。短い口縁を持ち，底部はやや上げ底である。胴部のハケメは粗い。

住居址

第3号住居址 (Fig. 45, PL.16—1)

南東半を道路で切られた方形住居址である。主柱穴は2本分検出された。いずれも掘り方は大きく，深さも0.7*m*近い。北西壁側中央に茶褐色粘質土で築いた竈がある。中央には甕を伏せて支脚としている。

出土遺物 (Fig. 42—4, PL.30—5)

支脚として用いられた甕の口縁部内外面はハケの上をヨコナデ，胴部はハケによって整形している。（酒井仁夫）

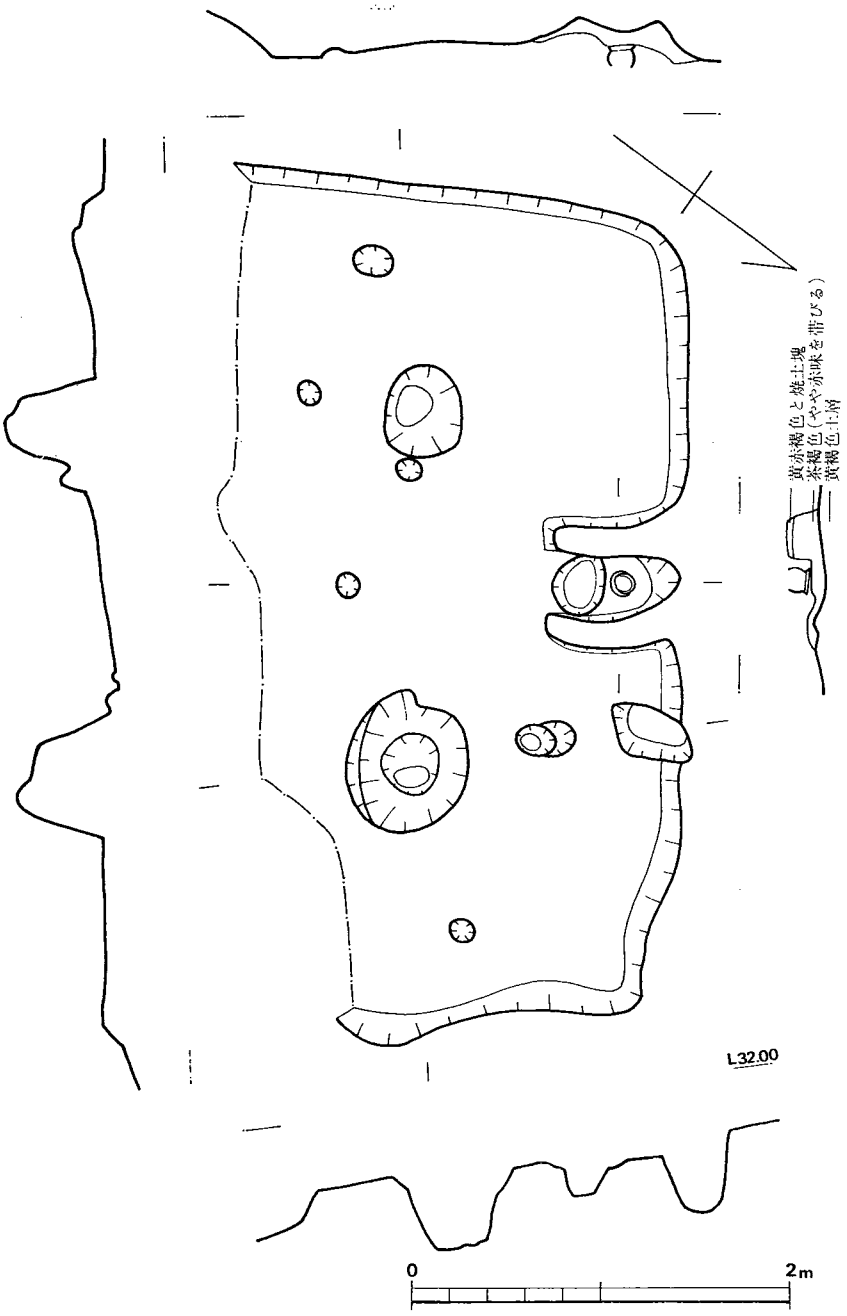


Fig. 45 第 3 号 住 居 址 実 測 図 (縮尺1/40)

C. 第 2 地 点 (Fig. 24, 付図Fig. ②)

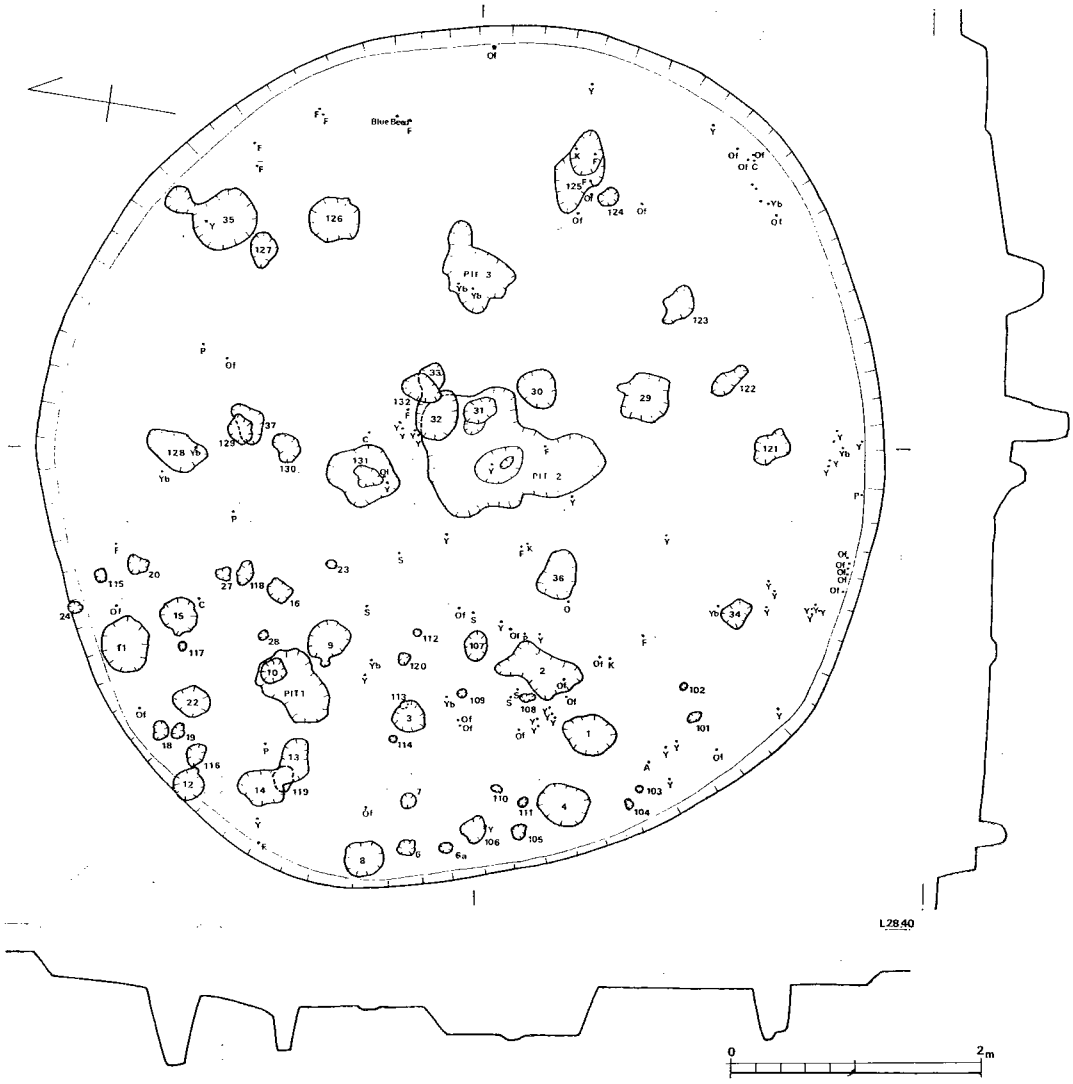
弥生時代住居址1軒と古墳時代住居址7および溝4が検出された。

1. 弥生時代の遺構と遺物

住居址

第1号住居址 (Fig. 46, PL.15—1)

この住居址は，円形竪穴式の弥生中期のものである。これは進入道路東側に設けたトレンチ



Y 弥生式土器　Yb 弥生式土器底部片　K ナイフ　A 石斧片　S 種 子
P 尖頭器　Of 黒曜石片　C 石核　F 剝 片

Fig. 46 第 1 号 住 居 址 実 測 図　(縮尺 1/60)

内で見出された。竪穴は黒色耕作土層下にあり，竪穴上部はこの耕作土層により切られている。

竪穴内の堆積層は，10cmずつ掘り下げた。これは，竪穴床面上の遺物と内部堆積層の遺物とを区別するためである。しかしながら，当初の目的は十分に達せられなかった。したがって図ではすべての遺物の平面的な出土位置を記しておいた。

柱穴は二つのグループにわけられる。ひとつは竪穴内部堆積層上から竪穴床面下にまで掘り込まれている。これらの柱穴は，図においては，二桁の番号で示した。これらの柱穴は，竪穴が廃棄，埋没した後に，掘りこまれたとも考えられる。しかしまた，本来この竪穴の付属施設であって，そこに立てられていた柱が廃棄時に抜き去られずに後まで残ったために，内部堆積層中に柱穴状のピットを残したものとも考えられる。

他のグループは100番台の番号で示した柱穴である。これらは床面から掘り込まれ，本来この竪穴に属するものである。

第1号住居址の平面形は，A点からA1点までが6.24m，B点からB1点までが6.60mのほぼ円形である。黒色耕作土層下面より床面までの深さは10～20cmを測る。

西南部分から植物の柱の炭化物が出土した。種別は明らかでない。これらは床面上ではなく，床面からやや浮いた状態で出土した。

黒曜石製の剝片と削器は北側に多く出土した。土器片は南西側に多く認められた。こうした遺物の出土位置の違いがもつ意味は明らかでないが，今後の検討にまちたい。

床には不整形のくぼみが三ヵ所ある。これらくぼみの内部にはごく少量の炭があり，炉址と考えられる。

北東部床面下では，直径数十cmの範囲内から石英の礫群が見出された。その性格は明らかでない。第4号竪穴床面下と西側トレンチ地山層内で発見された石英礫群と同様のものと思われる。(Richard Pearson)

耕作土中出土遺物 (Fig. 46～48, PL.34～36)

古墳時代遺物に混って弥生時代のものと考えられる石器類が出土している。

石鏃 (Fig. 47—1・2・4～6・10・12, PL.34—1)

1，4，10，12は黒曜石製，他はサヌカイト製である。4は両面加工ではあるが，表裏ともに原剝離面を残している。6の裏面は縁辺にリタッチを加えているのみである。12は抉り部辺だけを両面リタッチした剝片鏃である。

尖頭器 (Fig. 47・9, PL.34—2)

サヌカイト製の両面加工石器である。リタッチは丁寧で全面に及んでいる。

スクレイパー (Fig. 47—13～16, PL.34—2)

いずれもサヌカイト製である。14は両面加工，他は全て片面加工である。16の裏面は礫自然

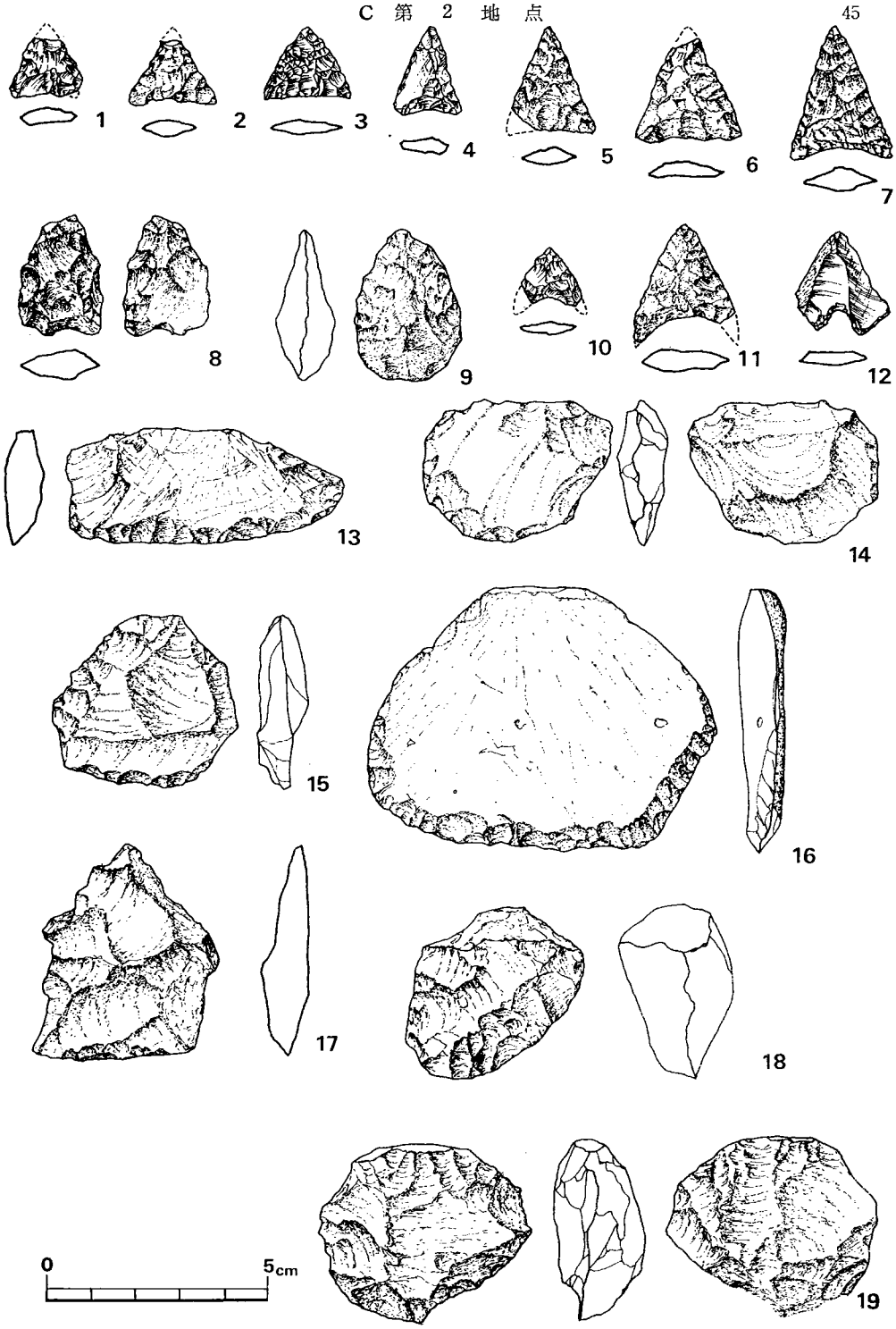


Fig. 47 出土打製石器実測図（縮尺⅔）

面を広く残し，周辺にリタッチを加えている。17の下辺刃部は両面からリタッチされている。

石核 (Fig. 47—18・19, PL.34—2)

図上上面が打面と考えられる。いずれも自然面で未調整である。18は左右からリタッチが加えられており，残核利用のスクレイパー (Core Scraper) とも考えられる。

石庖丁 (Fig. 49—1, PL.35—1)

凝灰岩製である。

砥石 (Fig. 49—4・5, PL.35—2)

4は上面のみを使用している。5は全面を使用している。いずれも砂岩製である。なおこれらを全て弥生時代のものとする積極的理由はない。

抉入石器 (Fig. 49—10, PL.35—2)

自然礫両側を打ち掻いている。使用痕などの削痕は観察されない。

磨石 (PL.36—2)

円形の火成岩礫を用いている。両面が使用され，磨耗している。(酒井仁夫)

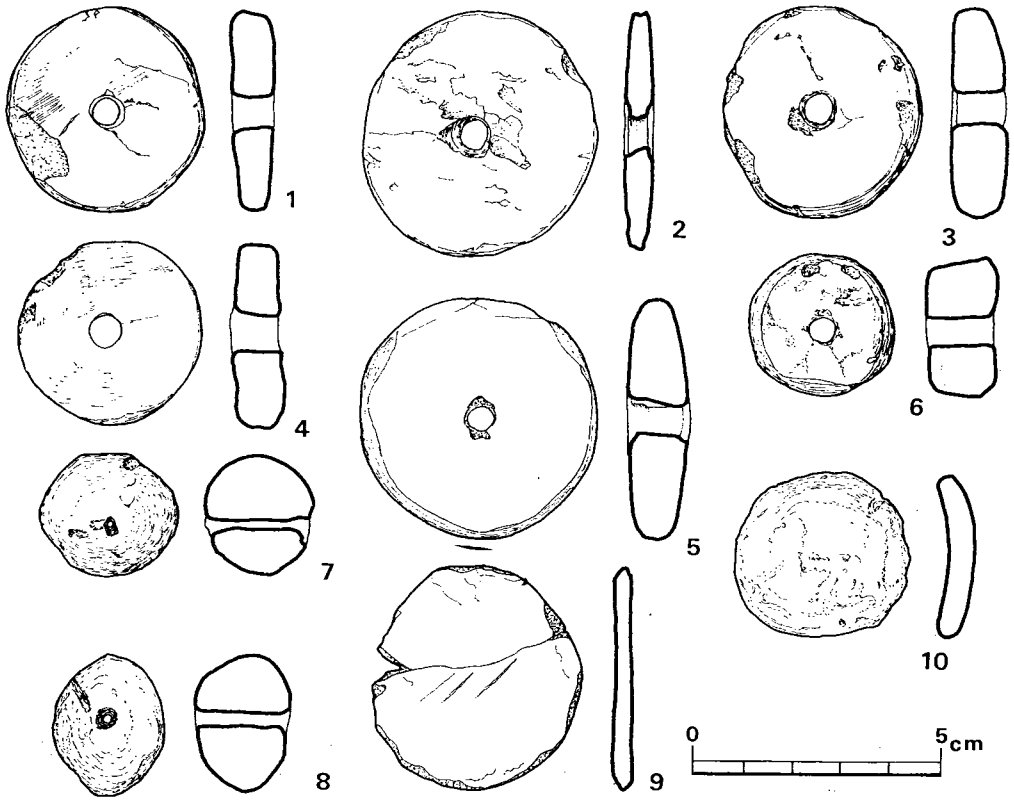


Fig. 48 出土紡錘車実測図(縮尺⅔)

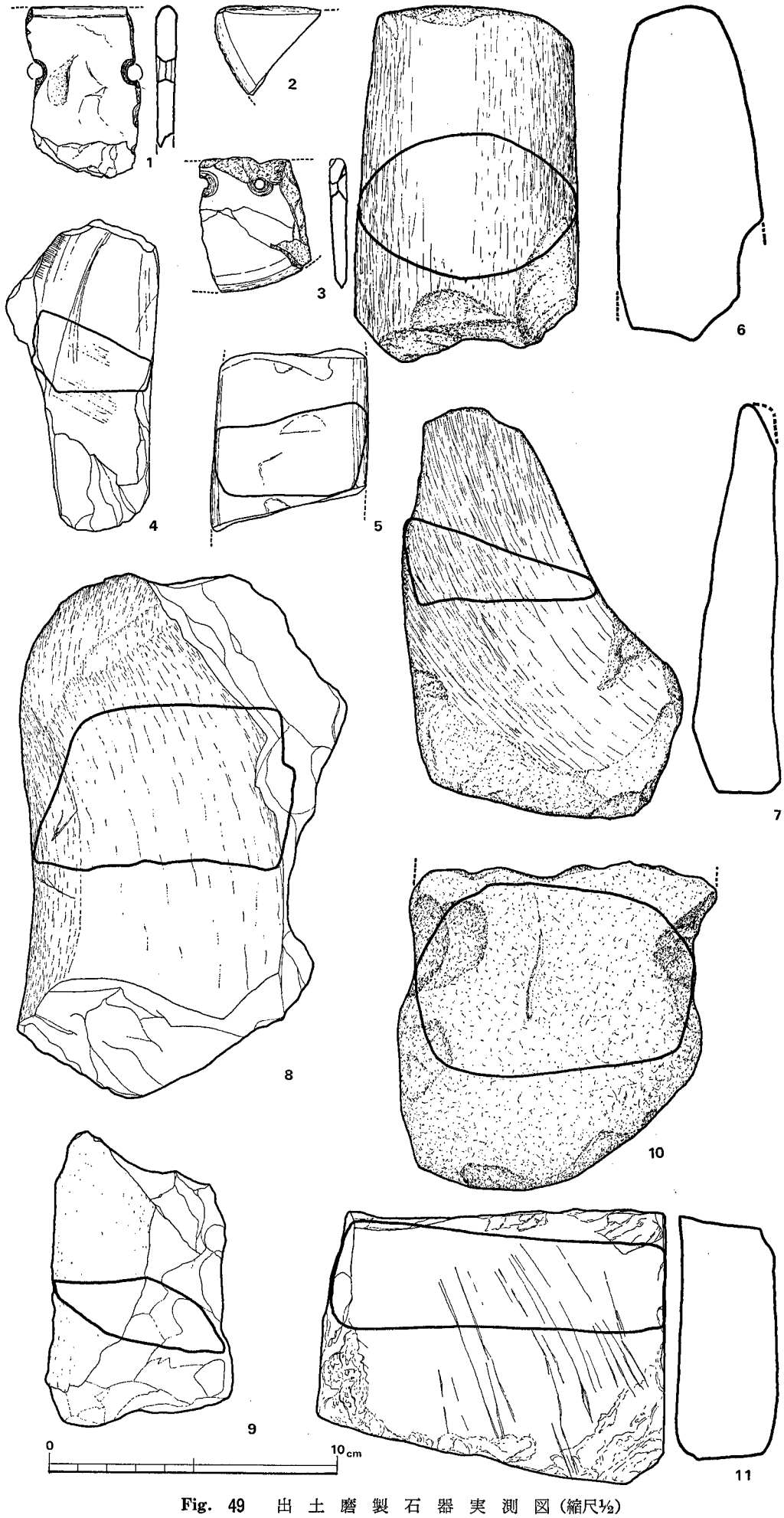


Fig. 49 出土磨製石器実測図(縮尺½)

2. 古墳時代の遺構と遺物

住居址

住居址7軒は3グループに区分される。つまり，第2・3・7号住居址のグループ，第4・5・6号住居址のグループがあり，第8号住居址は調査区域外の別グループに属すると思われる。なお第1地点第3号住居址が第4～6号住居址のグループに含まれるかどうかは西側区域の調査を経なければ決しがたい。

第2号住居址 (Fig. 51, PL.19—2)

この竪穴は古墳時代後期のものである。平面形は長方形で，短辺が3.94*m*，長辺が4.50*m*を測る。床面は黒色耕作土層下面から15～28*cm*の深さにある。床は踏みかためられ，厚さ約10*cm*の固い層をなしている。これは均質な層をなし，内部で層を細分することはできない。またこの層内には遺物は認められなかった。この層は張床かもしれない。

この竪穴の内部堆積層は10*cm*ずつ掘り下げた。北西部には，内部堆積層上から掘り込み，竪穴床面を切る長方形の穴がある。その底面は黒色耕作土層下面から30*cm*の深さにあり，平坦ではない。この長方形穴内では須恵器1片と鉄鏃1点が出土した。

図に示した柱穴のうち，二桁の番号を付したものは内部堆積層上から掘り込んだものであり，200台の番号を付したものはこの竪穴のもの，つまり古墳時代のものである。後者のうち，正方形にならんだ大きく深い柱穴が本竪穴の主柱穴である。

竪穴内北側の床面上には赤い固い層があり，その中には土師器片と黒色土が認められた。この層の下には，赤く焼けた土と炭とが直径52*cm*，深さ24*cm*に堆積していた。炉址と考えられる。この炉の上の層は，あとで設けた床と考えられる。

(Richard Pearson)

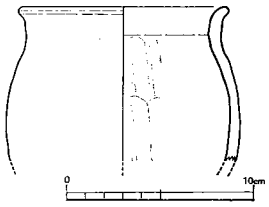


Fig. 50 第2号住居址出土土師器実測図（縮尺1/4）

出土遺物 (Fig. 50)

遺物の出土位置には特筆すべき点は認められないが，炉の周辺からはとくに土師器片が多く出土した。(Richard Pearson)

Fig. 50は口縁部内外面を丁寧にヨコナデしており，胎土も少量の砂粒を含むも密である。胴部外面には煤が一面に付着している。(酒井仁夫)

第3号住居址 (Fig. 52, PL.19—1)

一辺4*m*の方形を呈する。削平が著しく，東壁および北壁の東半を残すにすぎない。東壁中央の張り出し部分の床面は焼けているので，竈と考えられる。柱は方形に組んだ4本を主にしたと思われるが，それに見合う西隅の1本が検出されなかった。

出土遺物 (Fig. 53・55)

落込土中より2点の須恵器が出土した。1の坏蓋は天井部が丸く，口唇部内側に軽い稜線が

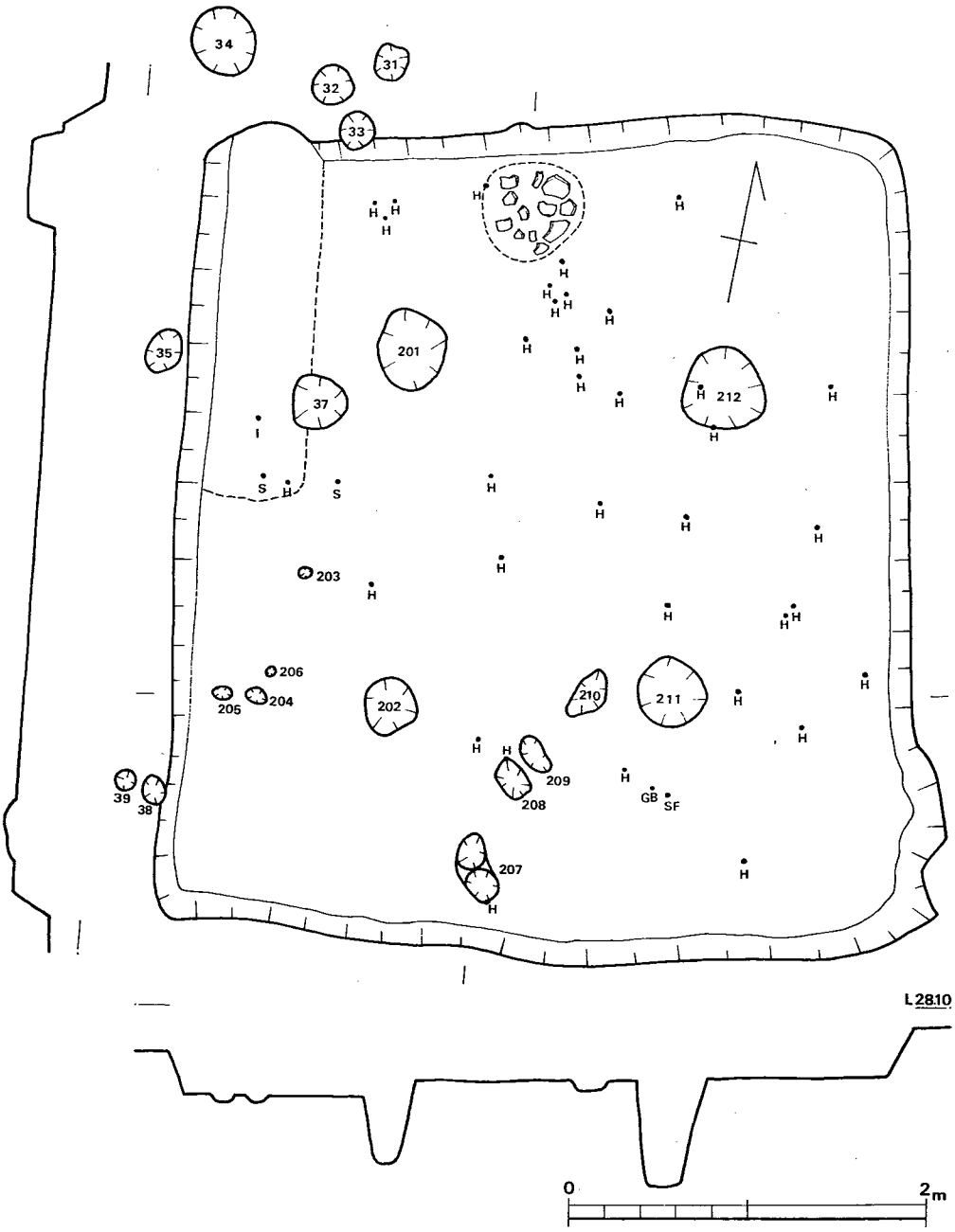


Fig. 51 第 2 号住居址実測図（縮尺 1/40）

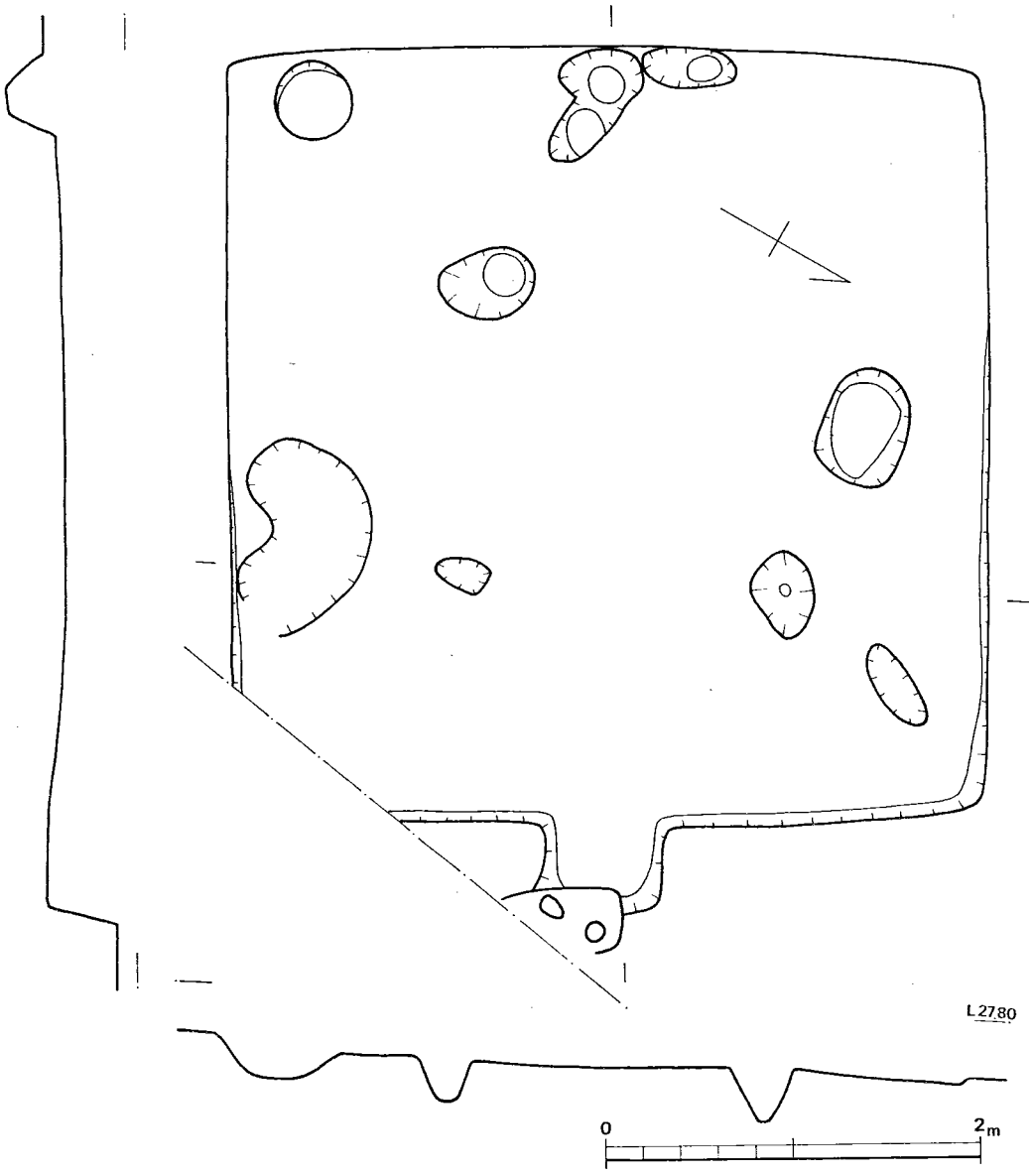


Fig. 52 第 3 号住居址実測図（縮尺1/40）

入る。2の坩身口唇端は平坦で，若干窪む。内外面ともヨコナデを施している。Fig. 55—1の甕は短く外反する口縁部をもつ。内面にはタテのヘラケズリ痕が明瞭である。口縁部のヨコナデは丁寧である。焼成良く赤褐色を呈し，胎土は緻密である。

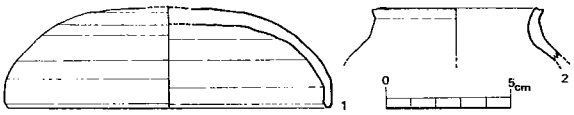
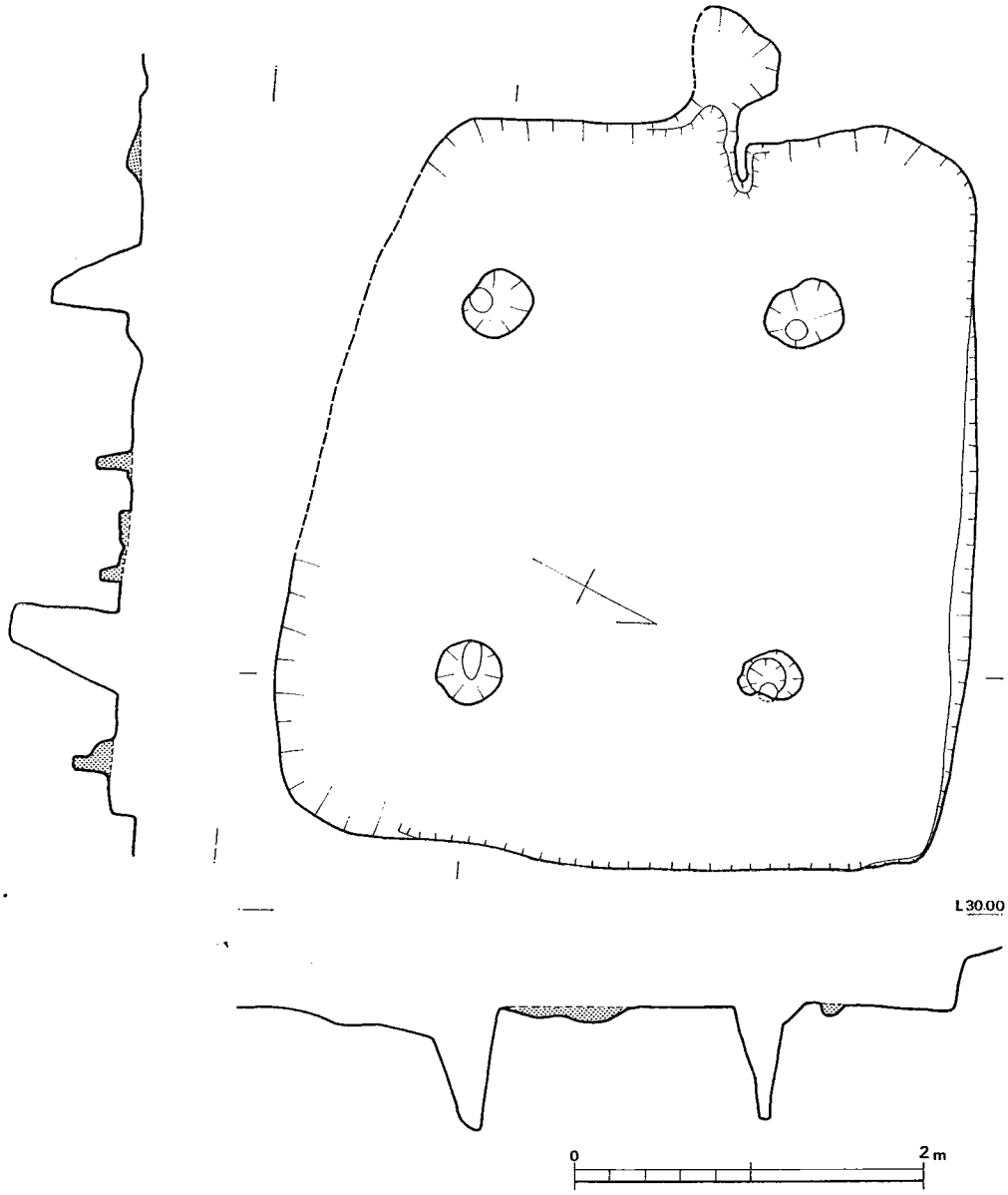


Fig. 53 第3号住居址出土須恵器実測図（縮尺1/3）

第4号住居址 (Fig. 54, PL.20—1)

4.2×3.8*m*の方形住居址である。床面の凹凸がはなはだしく，その上を貼床整形している。西壁中央に張り出し部があり，竈跡と想定される。4柱穴はいずれも60*cm*前後と深い。なお床面下より石英礫群が検出された (Fig. 69 参照)。



Fg. 54 第4号住居址実測図 (縮尺1/40)

出土遺物 (Fig. 55・56, PL.31—4)

出土遺物は全て落込土中である。Fig. 56—1・2 の坏蓋天井部は平坦であり，未整形である。かえりは口唇部より短かく，水平に近い。暗褐色を呈する。3の坏蓋は天井部が丸く，口縁部までなめらかに移行すると思われる。口唇部は平坦である。胎土中僅かに砂粒を含む。4は土師器高坏である。脚部外面はヘラケズリしている。坏部の調整法は器面風化のため不明瞭である。胎土は精良であるが，焼成が悪い。Fig. 55—2 の甕胴部は縦方向のハケメ調整した上を，さらに細かい斜め方向のハケで調整している。胴部内面は雑なヘラ削りを施したままである。口縁部はヨコナデ調整である。胎土焼成とも良好である。

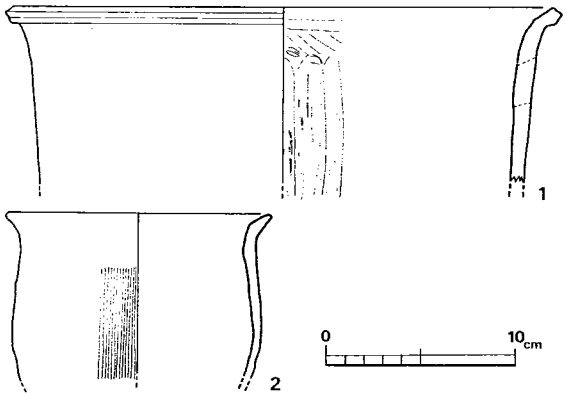


Fig. 55 第3・第4号住居址出土土師器実測図（縮尺1/4）

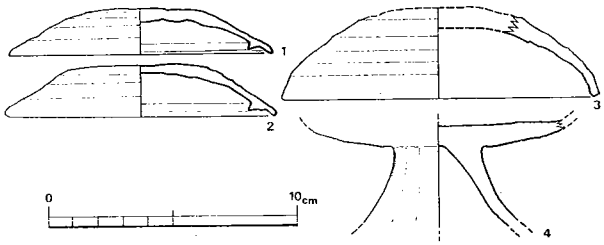


Fig. 56 第4号住居址出土須恵器・土師器実測図（縮尺1/3）

第5号住居址 (Fig. 58, PL.20—2)

一辺2.6*m*の方形を呈する小型の住居址である。北西壁側にのみ周溝がある。北東壁の北隅に床の焼けた張り出し部があり，竈と想定される。床面上には柱穴はなく，4壁の中央外側に各々1本の柱穴かと思われる穴がある。

出土遺物 (Fig. 57)

床面上から3点の土師器が出土した。1は口縁部内側のみヨコナデされ，頸部から口縁部外側にかけて横位のハケメが施されている。赤褐色を呈し，胎土精良な壷である。2は竈周辺で出土した甕である。口縁部内側から口唇端部のみにヨコナデを施している。胴部には煤が附着している。胎土中に砂粒が目立つ。3はヘラによって丁寧に削られた壷底部である。胎土中に砂を多く含むが，焼成は良好である。Fig. 49—11は2面を利用した砥石である。表面に多くの

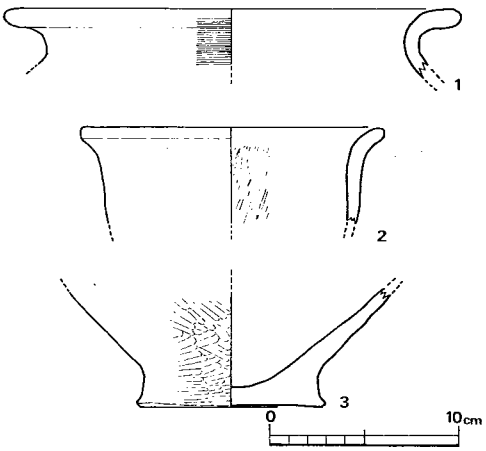


Fig. 57 第5号住居址出土土師器実測図（縮尺1/4）

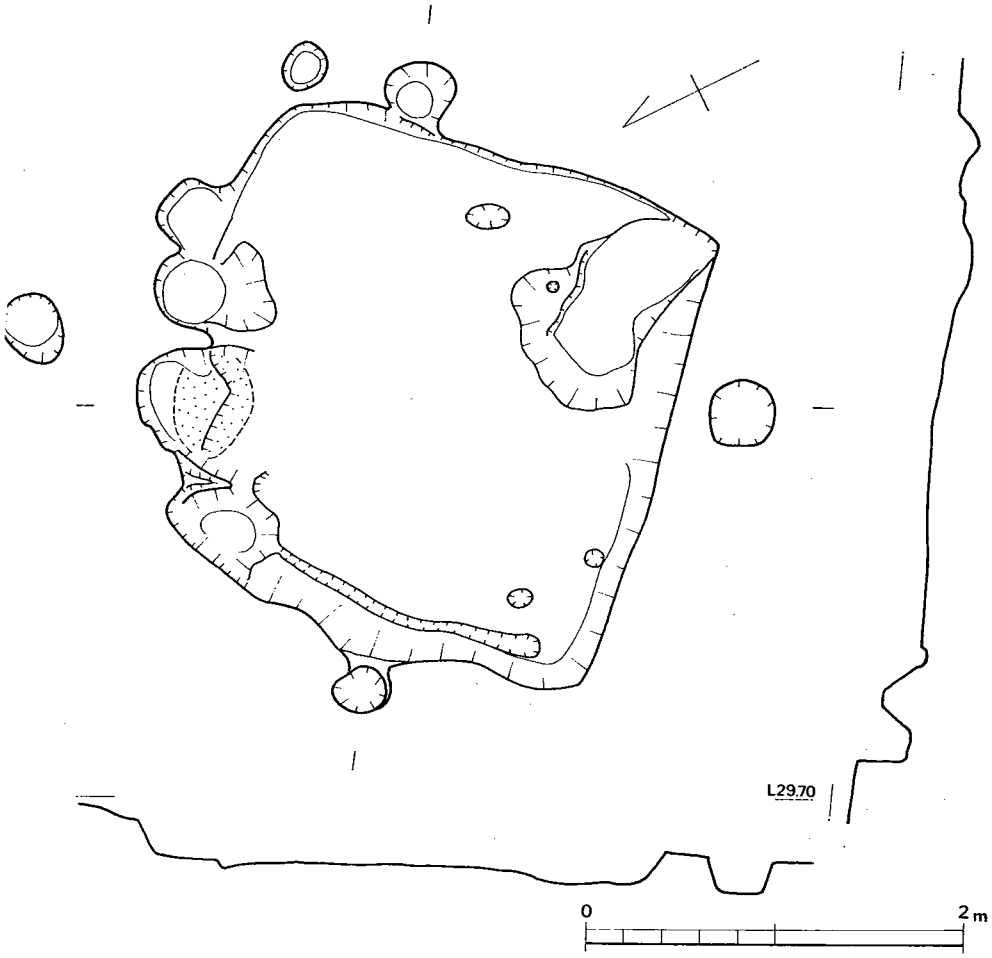


Fig. 58 第5号住居址実測図（縮尺1/40）

使用痕が観察される。

第6号住居址 (Fig. 60, PL.19—2)

はなはだしく削平され，南西壁は不明であるが，一辺5.3 *m*前後の方形を呈していたと想定される。当遺跡では最大の住居址である。床面は貼床整形されている。また挿図断面図にみられるように柱痕が検出された。床面上で10余の柱穴があるが，主柱の並びは明らかでない。

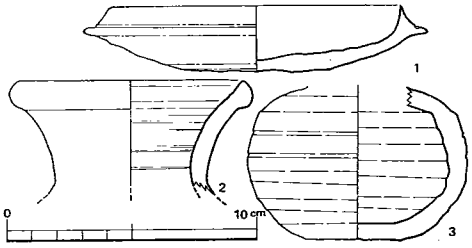


Fig. 59 第6号住居址出土須恵器実測図（縮尺1/3）

出土遺物 (Fig. 59, PL.31—2)

1の坏身は床面より出土した。蓋受け部はあまく，かえりは断面三角形をなす。2，3は落

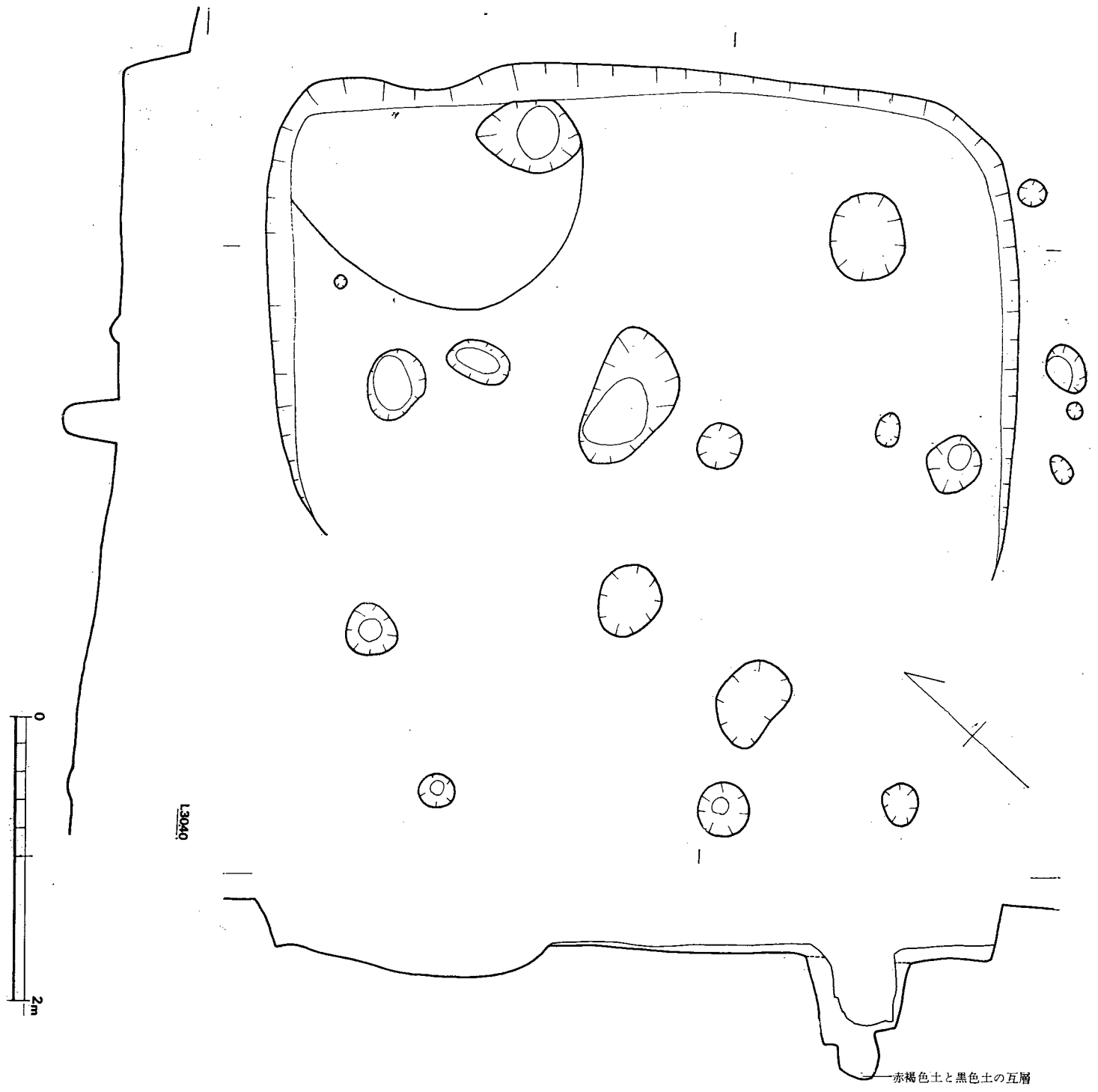


Fig. 60 第 6 号 住 居 址 実 測 図（縮尺 1/40）

込土中より出土した。2は壷あるいは瓶の口縁部で，口唇部のみヨコナデを施している。3は孔部を欠損した甕胴部である。ヨコナデは施されていない。Fig. 46—7 は床面上から出土した有孔土玉である。

第7号住居址 (Fig. 59, PL.17)

一辺3.4 *m*の方形を呈する。西壁および南壁は5～6 *cm*の立上りをもつのみである。西壁中央に竈を設けている。床面中央に4柱穴をもつ。

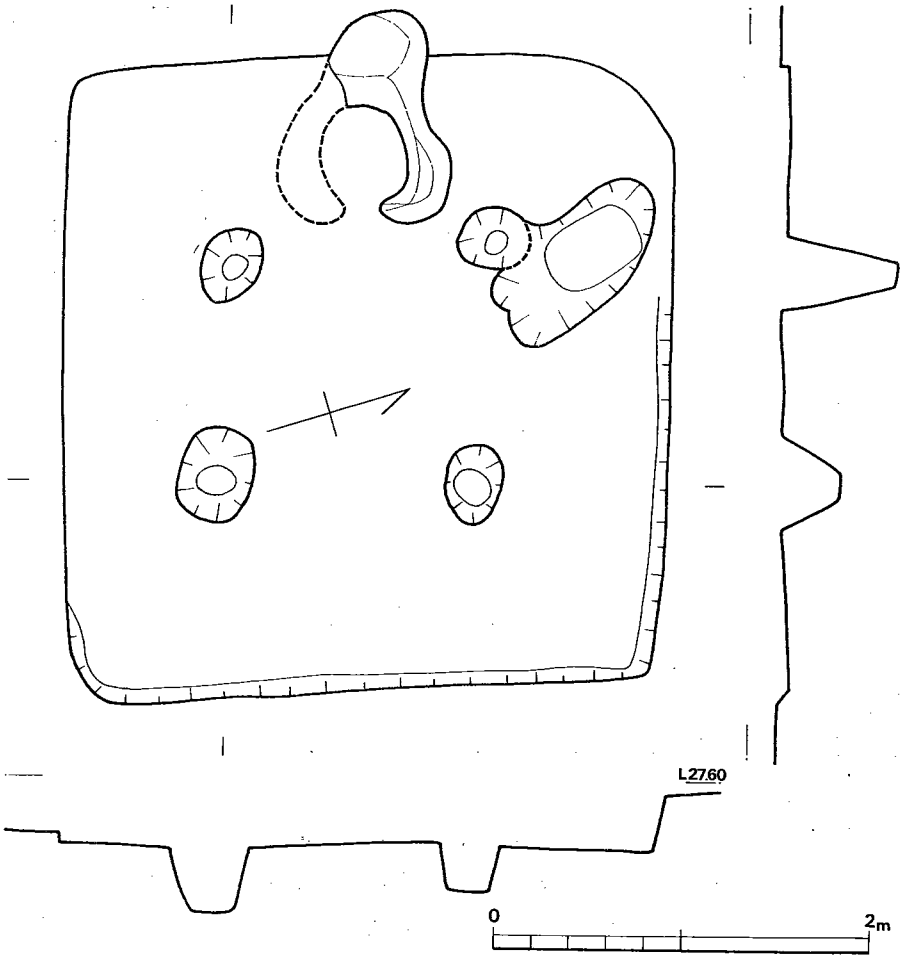


Fig. 61 第7号住居址実測図（縮尺1/40）

第8号住居址 (Fig. 62, PL.22—1)

発掘区南端で検出された。西壁は道路のため削平されている。南北長3.7 *m*を測る。床面中央の2ヵ所のピットが主柱穴と思われる。

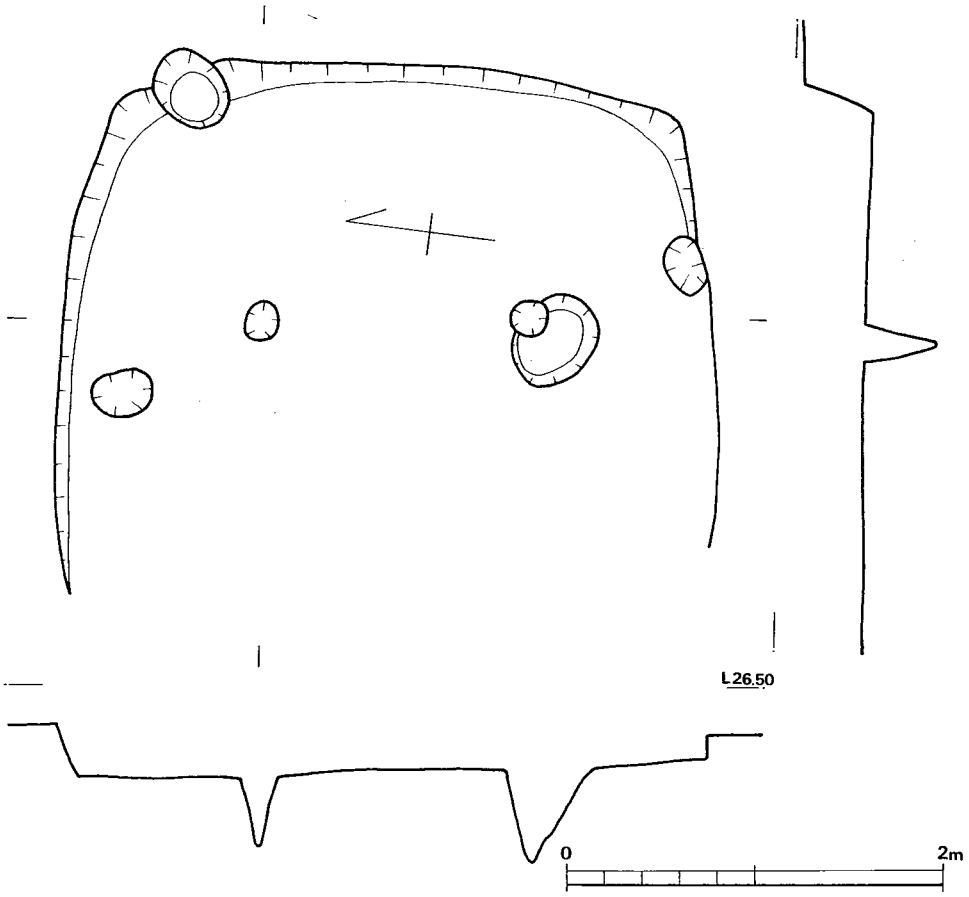


Fig. 62 第 8 号 住 居 址 実 測 図（縮尺1/40）

竪穴

第1号竪穴

北壁は道路崖面に切られている。東西辺は1.6 *m*である。

出土遺物（Fig. 63, PL.32—5～9）

内部埋土中より須恵器2点，土師器3点出土した。1は坩蓋と考えられる。口唇端部は丸味を帯びている。天井部までヨコナデが施されている。2の坏蓋の口縁部はほぼ垂直で，天井部は未調整である。3～5の土師盤は概同型である。内外面とも丁寧なヨコナデを施している。胎土中に砂粒を比較的多く含む。赤橙色を呈し，焼成温度は低い。6は土製支脚である。加熱のため表面の剝落ははなはだしい。

溝

4本のうち北側3本は南北方向，南側1本は東西方向である。北端の溝は第7号住居址を切っている。

第3号住居址南側の溝中より甑（Fig. 64—5，PL.31—6）が出土した。口縁部内外面および胴下部外面のみがハケメの上からヨコナデが施されている。把手には指痕が多く残っている。

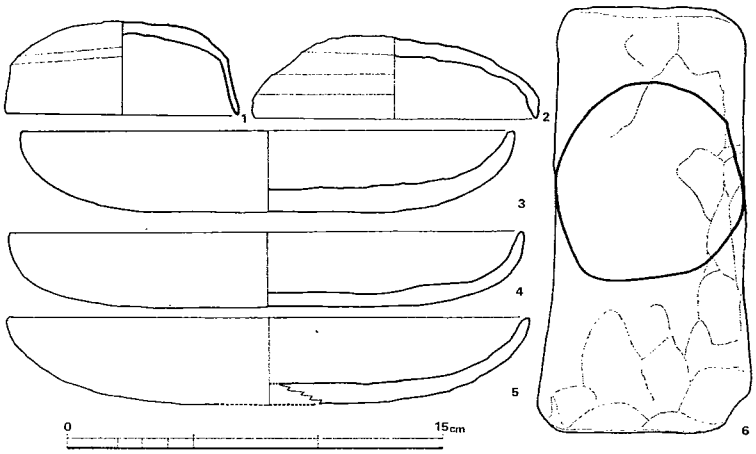


Fig. 63 第1号竪穴出土須恵器・土師器実測図（縮尺½）

耕作土中出土遺物

(Fig. 64, 65)

弥生時代から歴史時代にかけての各時期土器類が表土および耕作土中より出土したが，大半は古墳時代のそれである。Fig. 64—2 は風

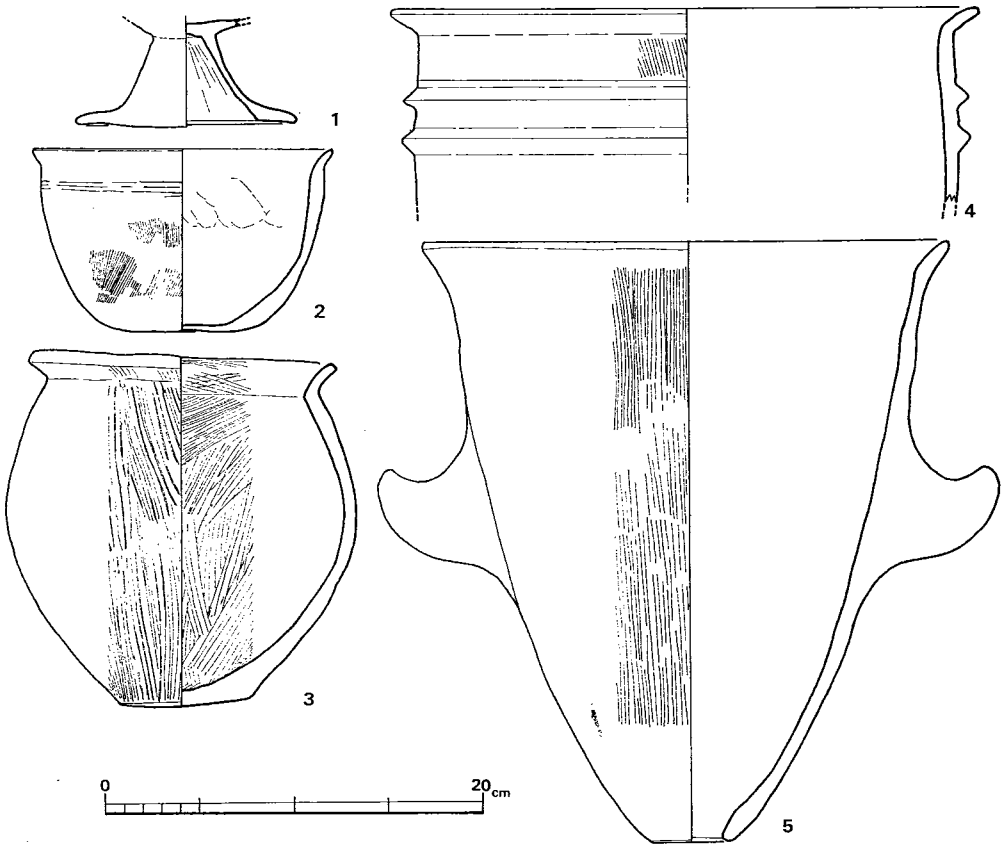


Fig. 64 耕作土中出土土器実測図（縮尺¼）

化がはなはだしく，整形法は不明瞭であるが，口縁下に3本以上の沈線が引かれ，胴部は全面縦あるいは斜位のハケメが施されたと思われる。底部には煤が附着している。3は底部を含む全面を荒いハケメで整形した甕である。口縁外面のみを上からヨコナデしている。胎土は良好で，砂粒は少ない。Fig. 65—1・2の坏蓋の天井部，6～10の坏身の底部はいづれも未調整である。4の坏部外面のヨコナデは雑であるが，内面のそれは丁寧である。高台は短かい。5の高坏脚部中央には粗雑な2条の沈線を引いている。脚端は明瞭な稜をなす。内面に井字形のヘラ記号がある。

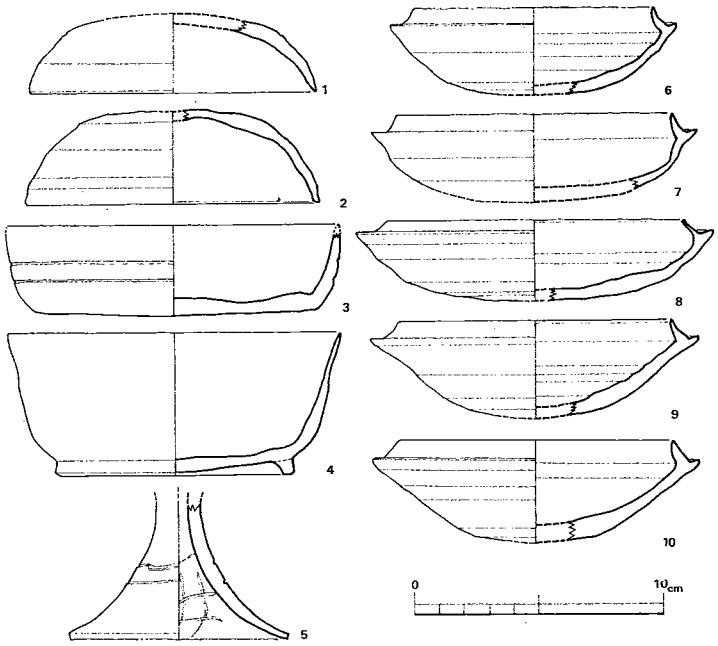


Fig. 65　耕作土中出土須恵器実測図（縮尺1/3）

3. 歴史時代の遺構と遺物

第2号竪穴(Fig. 68, PL. 22—2)

2.3×2.0*m*の楕円形ピットである。深さは1.0*m*を測り，摺鉢状をなす。南北両端に小柱穴を有する。

出土遺物 (Fig. 66, PL. 32—1～4)

内部埋土中上層からは土師器，須恵器，布目瓦片が投げ捨てられた状態で多量に出土した。Fig. 66—1・2は甕，3は甑で，いずれも外面タテナデ，口縁部のみヨコナデ整形を施している。4は表面の風化が

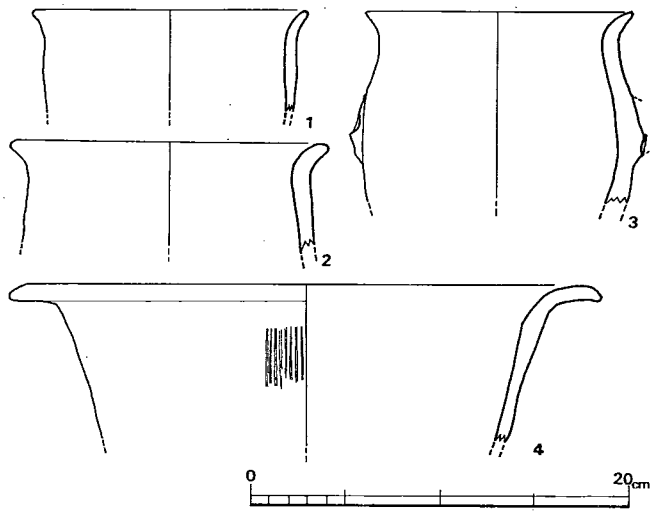


Fig. 66　第2号竪穴出土土師器実測図（縮尺1/4）

はなはだしいが，胴部一部にハケメが観察される。Fig. 67—1は天井部の平坦な坏蓋で，ツマミはなく，口縁端部のかえりはあまく，稜は不明瞭である。2は扁平な宝珠様ツマミのついた坏蓋であるか，風化がはなはだしく調整法は不明瞭である。3，4の高台は端部がやや上がり，短かく，細い。坏部はほぼ直線的に伸びる。3は青黒色，4は灰黒色を呈する。5は摩耗がはなはだしく，詳細は不明瞭である。6，7の高台は3，4に較べて太り，ヨコナデは丁寧である。8は長頸壷胴部で表面のヨコナデは丁寧で，焼成も良好である。

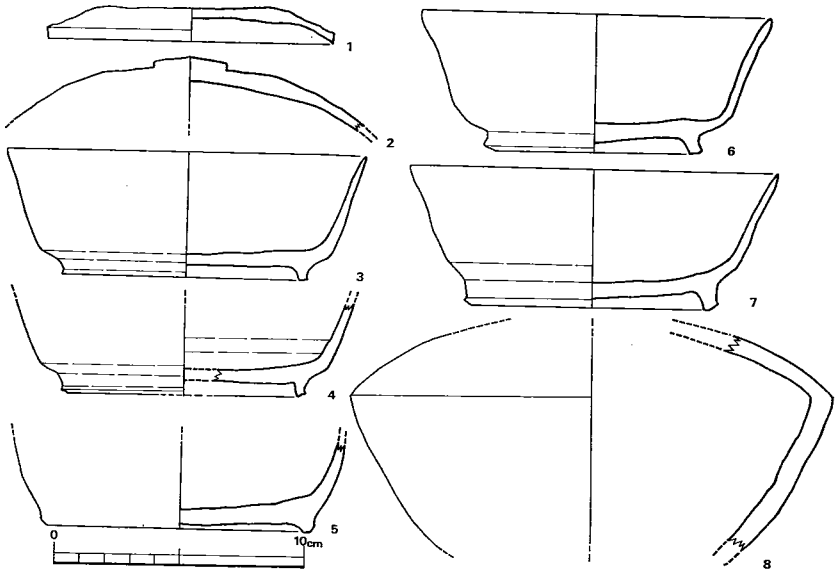


Fig. 67 第2号竪穴出土須恵器実測図（縮尺1/3）

4. 石英礫群 (Fig. 69, PL. 23)

第4号住居址床面下，灰褐色ローム層中から石英礫群が検出された。第1号住居址床面下および発掘区西北部，第4号住居址南側でも，同様の礫群が検出されている。

石英は全て核礫のみであり，剝片は含まれていない。また石材も石英のみで，黒曜石，サヌカイトなどはまった

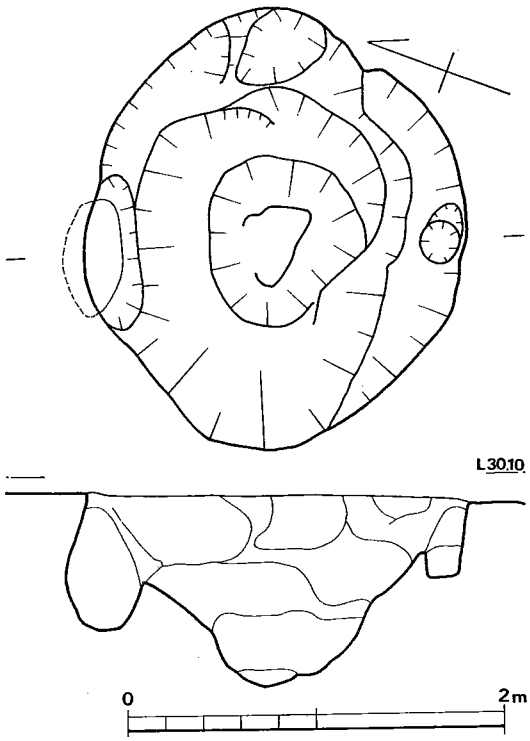


Fig. 68 第2号竪穴実測図（縮尺1/40）

く出土していない。

礫中には石器も混在しているようであるが，一定の剝離法を示すものはなかった。

(酒井仁夫)

註　調査期間中の賀川光夫先生の指導による。

Fig. 69　石　英　礫　群（縮尺1/20）

D. 第 3 地 点 (Fig. ③, PL.24～26)

弥生時代竪穴4と古墳時代竪穴1および住居址2が検出された。

1. 弥生時代の遺構と遺物

竪穴のうち方形を呈するものは2，円形を呈するものがある。

第1号竪穴

(PL.25—2)

口径1.6×1.0m，底面2.7×1.7mの長方形を呈する。深さ1.15mを測り，袋状をなす。

第2号竪穴

1.4×0.8mの楕円形を呈する。

第3号竪穴 (Fig. 70, PL.25—3，表1)

口径1.9m，底面径2.66mの円形を呈する。深さ1.9mを測り，袋状をなす。

第4号竪穴

3.15×2.1mの楕円形を呈する。

出土遺物 (Fig. 71, PL.33—2)

内部から完形の甕が出土した。口縁部が短かく，頸部は垂直である。胴部は直線的にすぼまって底部にいたる。口縁部内外面および頸部外側にヨコナデを施している。頸部から胴上半部にかけて煤が附着している。底部はやや上げ底である。2は表面風化がはなはだしい。内面はナデ整形しており，底部には指痕が目立つ。

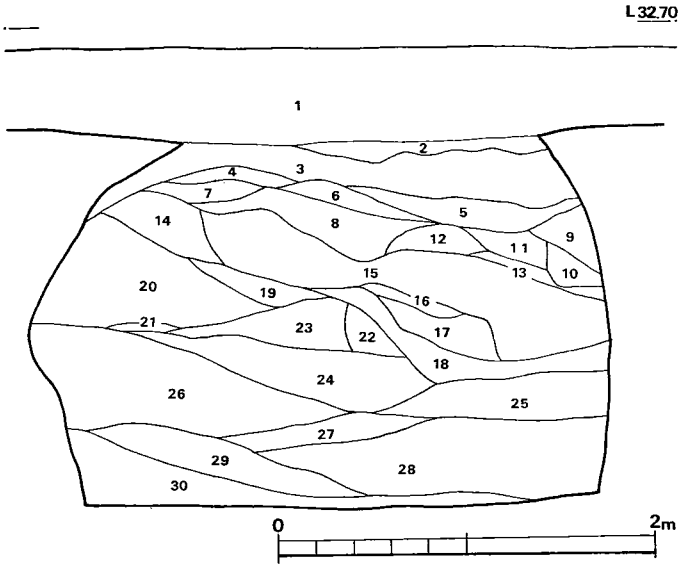


Fig. 70　第3号竪穴内土層断面図（縮尺1/40）

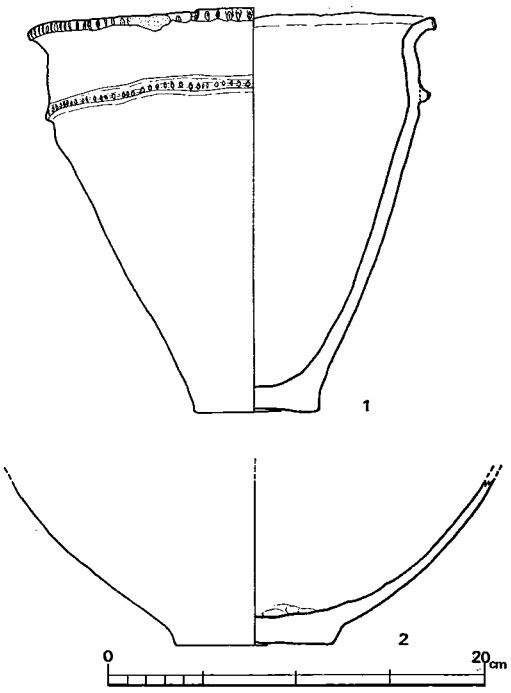


Fig. 71　第4号竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）

耕作土中出土遺物

紡錘車 (Fig. 48)

4は土製品で，両面に細いハケメがみられる。6も土製品で，中央孔は直線的である。

石庖丁 (Fig. 49)

1および3は共に凝灰岩製である。

砥石 (Fig. 49—6)

断面図上の上辺，左辺が使用面である。

2. 古墳時代の遺構と遺物

第5号竪穴

1.6×1.45*m*の長方形を呈する。深さは0.20*m*と浅い。

出土遺物 (Fig. 73, PL.33—1・3)

内部から多くの土器を出土した。Fig. 73—6～9 は弥生，他は土師である。6は胴部最大径が頸部に近い位置にある甕で，頸部は短い。表面は剝落が著しい。

8，9は表面凹凸のひどい支脚である。1は上半部をヨコナデ調整した鉢で，内面一部は有機物が附着し，黒く変色している。2は内外面に細かなハケメを施している。口縁部に焼成後，一孔を穿っている。胎土は砂粒が多く粗い。3・4・5は器面の風化がはなはだしいが，口縁部はヨコナデ，胴部はタテナデのようである。

住居址

第1号住居址 (Fig. 74, PL.26—1)

一辺3.7*m*の方形を呈する。西壁および北壁西半は耕作によって削平されている。北壁側中央に半欠の竈が設けられている。床面上に8本の柱穴があるが，中軸線上の3本が主柱穴と考えられる。東壁側中央のピットは比較的深く(床面より32*cm*)，貯蔵用であろう。床面上北東隅より土師甕(Fig. 76—5)が，南西隅から須恵器坏蓋(Fig. 72)および坩4個(Fig. 76—1～4)が出土した (PL. 26—3)。

出土遺物 (Fig. 72・76, PL.33—5～8)

Fig. 72 は天井部から体部へなめらかに移行する坏蓋で，口縁部は内傾する。Fig. 76—1～4の坩は全て同型で，同一時に製作されたものであろう。ほぼ均一の肉厚で，口縁が直立し，端部はとがっている。口縁部および胴上半部にハケメが施され，胴下半部は斜位あるいは縦位にナデている。胎土中砂粒が混じり，薄い茶褐色を呈する。

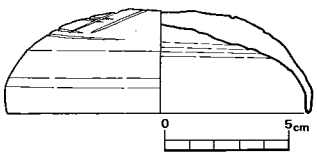


Fig. 72 第1号住居址出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

第2号住居址 (Fig. 75, PL.26—2)

西半を崖断面に切られた一辺4.4*m*の方形住居址である。床面上には炭化物が散乱してい

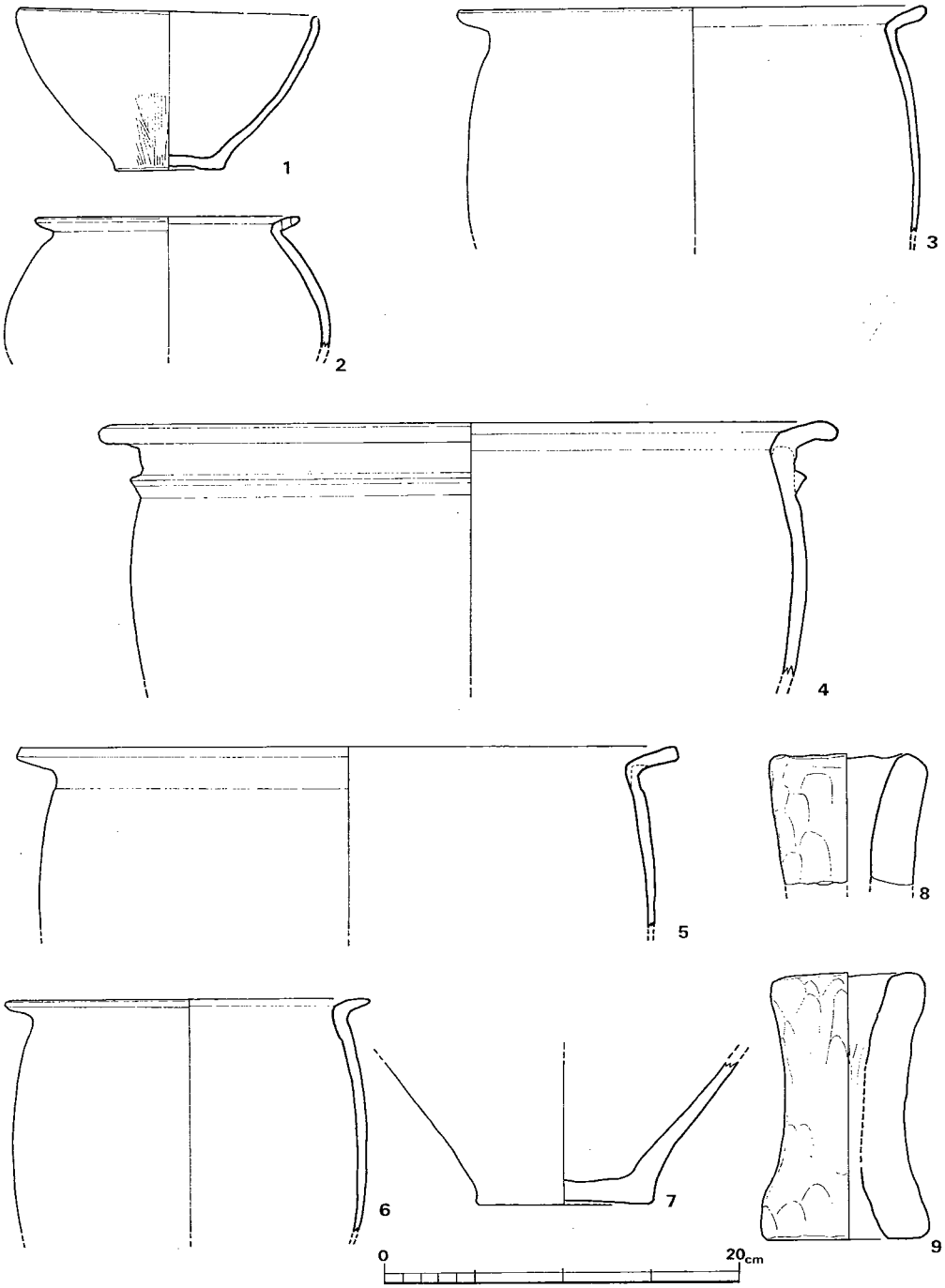


Fig. 73 第 5 号竪穴出土土器実測図(縮尺 1/4)

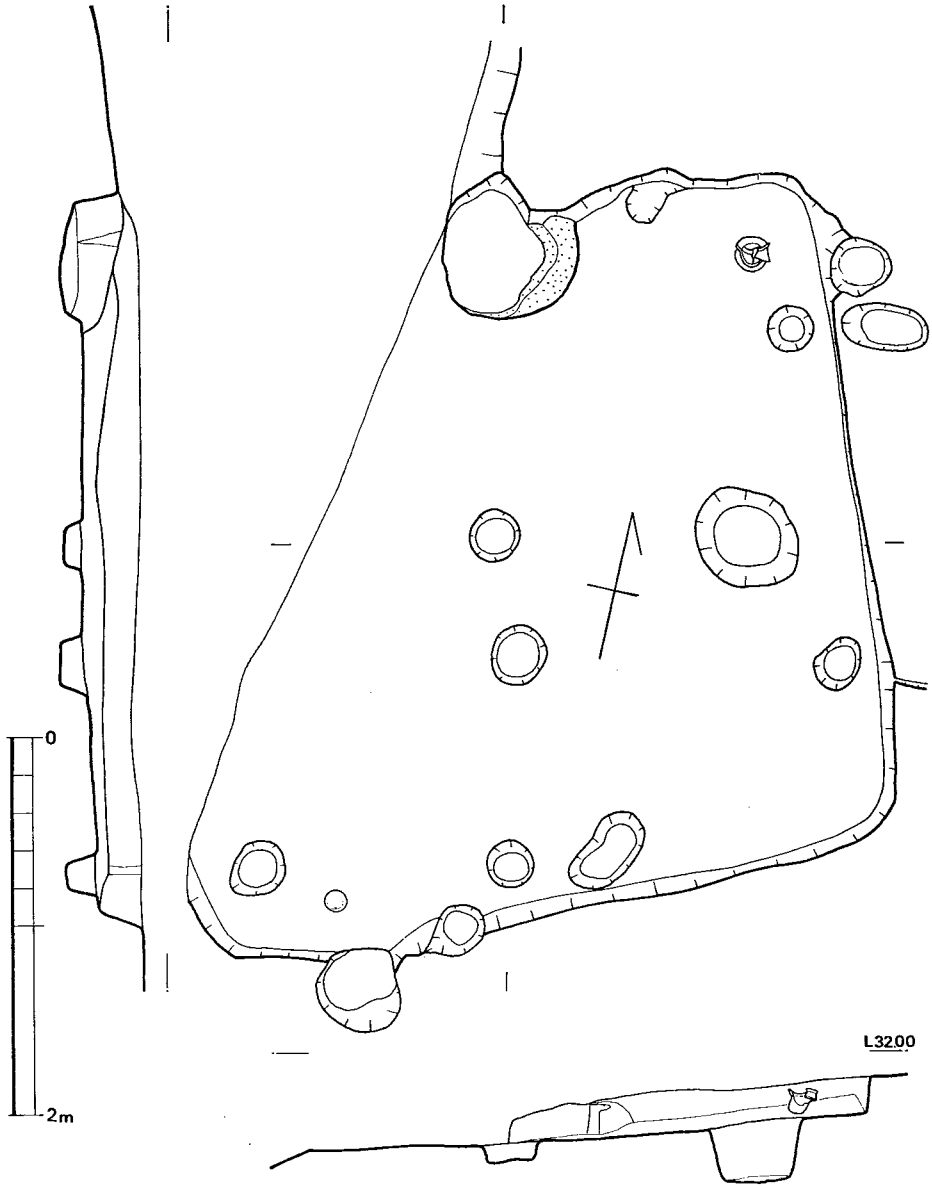


Fig. 74 第 1 号 住 居 址 実 測 図 (縮尺1/40)

たが，これらは概ね住居址中心部に向って倒れ込んでいた。柱穴は多数みられるが，半掘したのみであるため，正確な配列は不明である。(酒井仁夫)

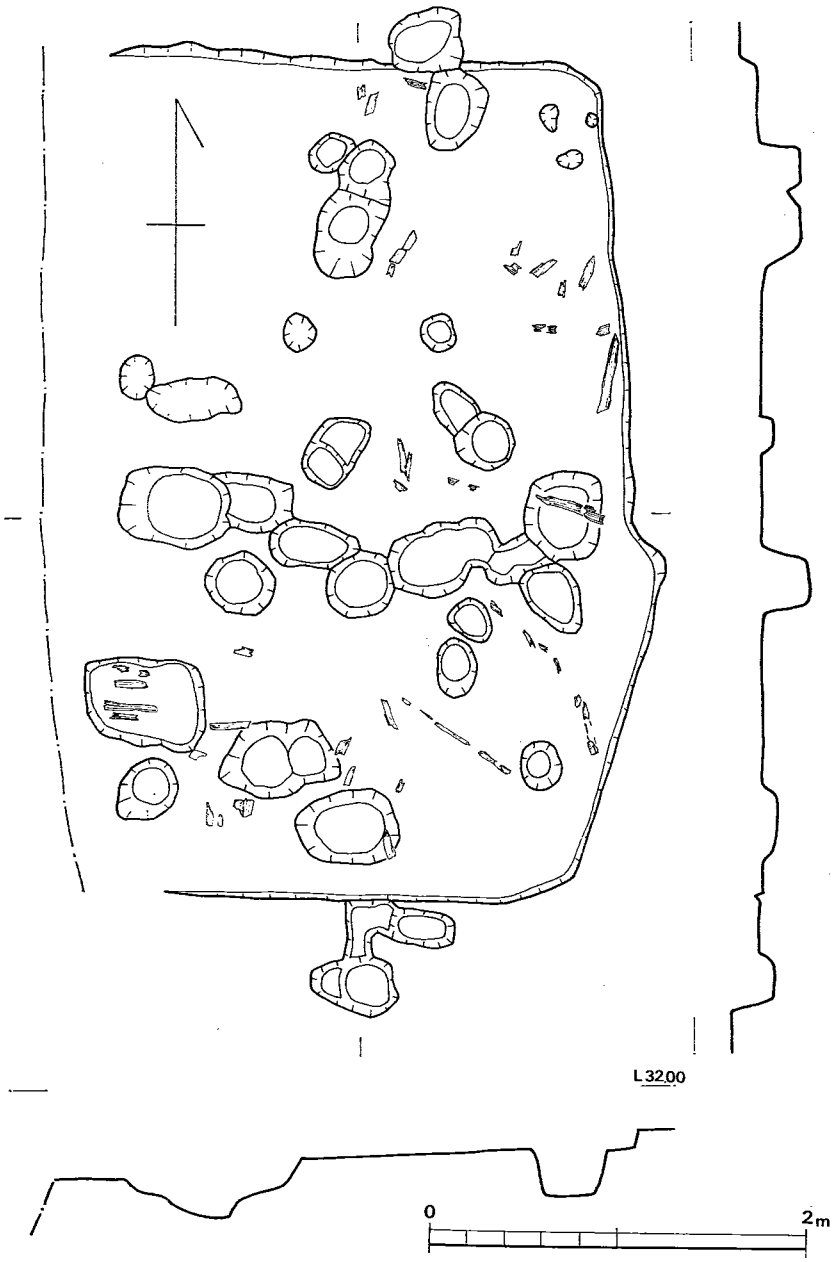


Fig. 75 第 2 号 住 居 址 実 測 図 (縮尺1/40)

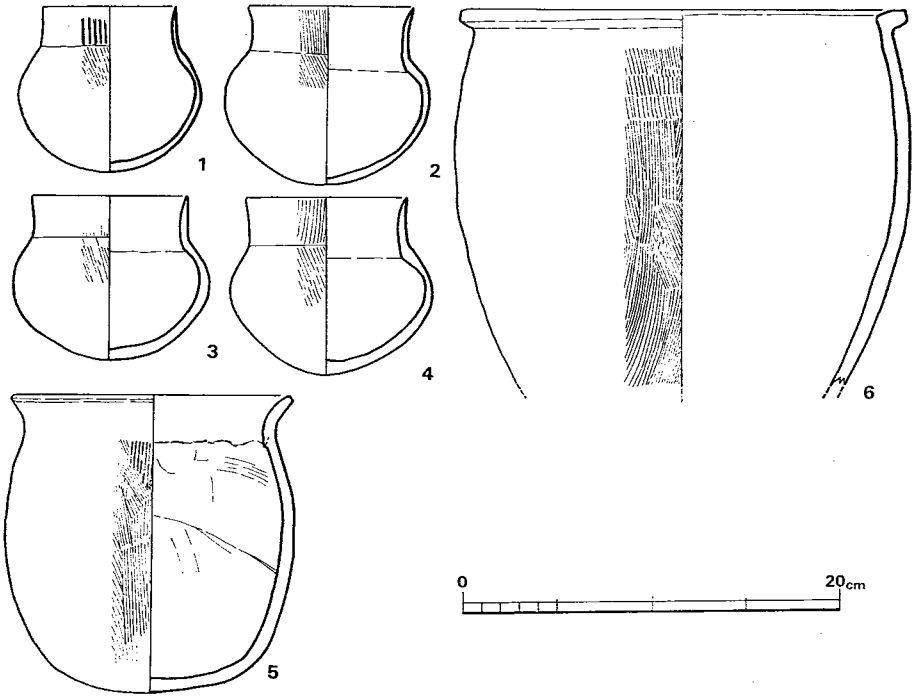


Fig. 76 第1号住居址出土土師器実測図（縮尺¼）

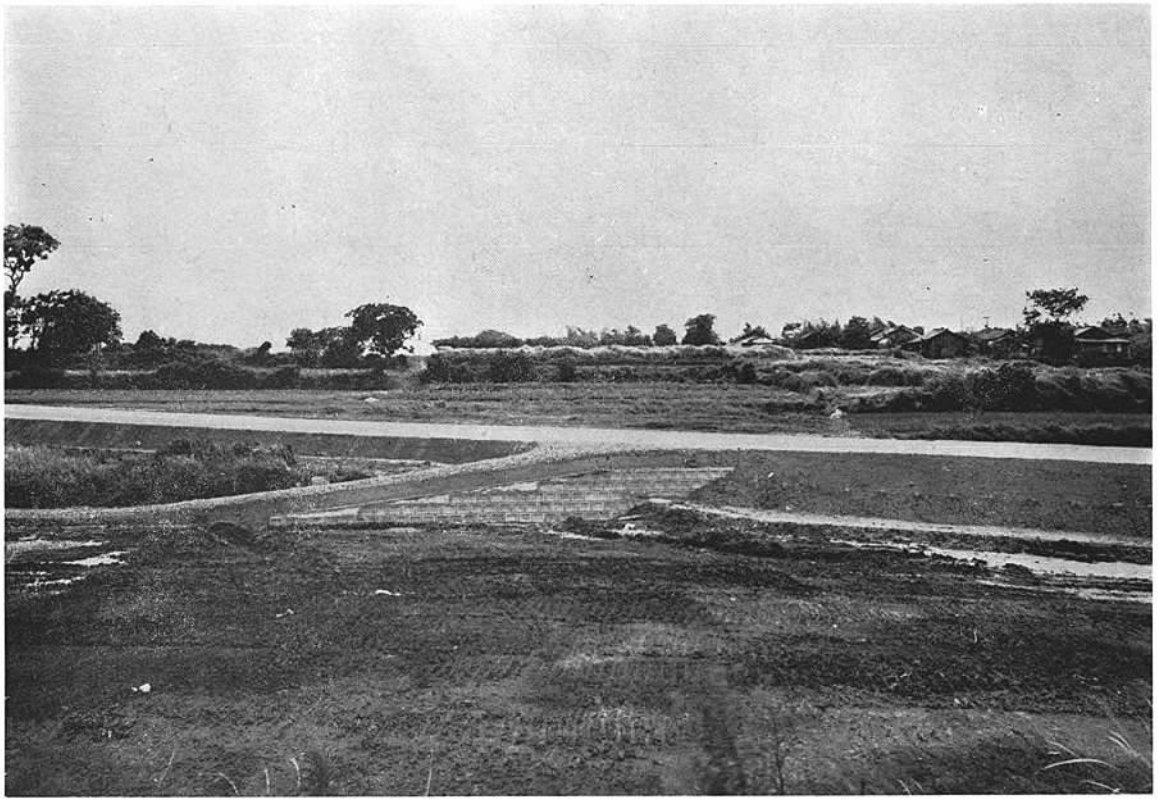
表 1 第3号竪穴層位名称一覧表

1	暗黄褐色土（耕作土）	11	黄褐色土	21	褐色土
2	黄褐色土	12	黒褐色土	22	褐色土
3	砂質暗黄褐色土	13	黒色土	23	黒褐色土
4	粘質暗黄褐色土	14	黄褐色土	24	褐色土
5	砂質暗黄褐色土	15	黒褐色土	25	褐色土
6	褐色土	16	黒色土	26	砂質褐色土
7	粘質暗黄褐色土	17	黄褐色土	27	灰黄色土
8	黒色土	18	黒褐色土	28	粘質褐色土
9	黄褐色土	19	褐色土	29	灰黄色砂質土
10	褐色土	20	褐色土	30	粘質褐色土

（1）遺 跡 遠 景（南より）

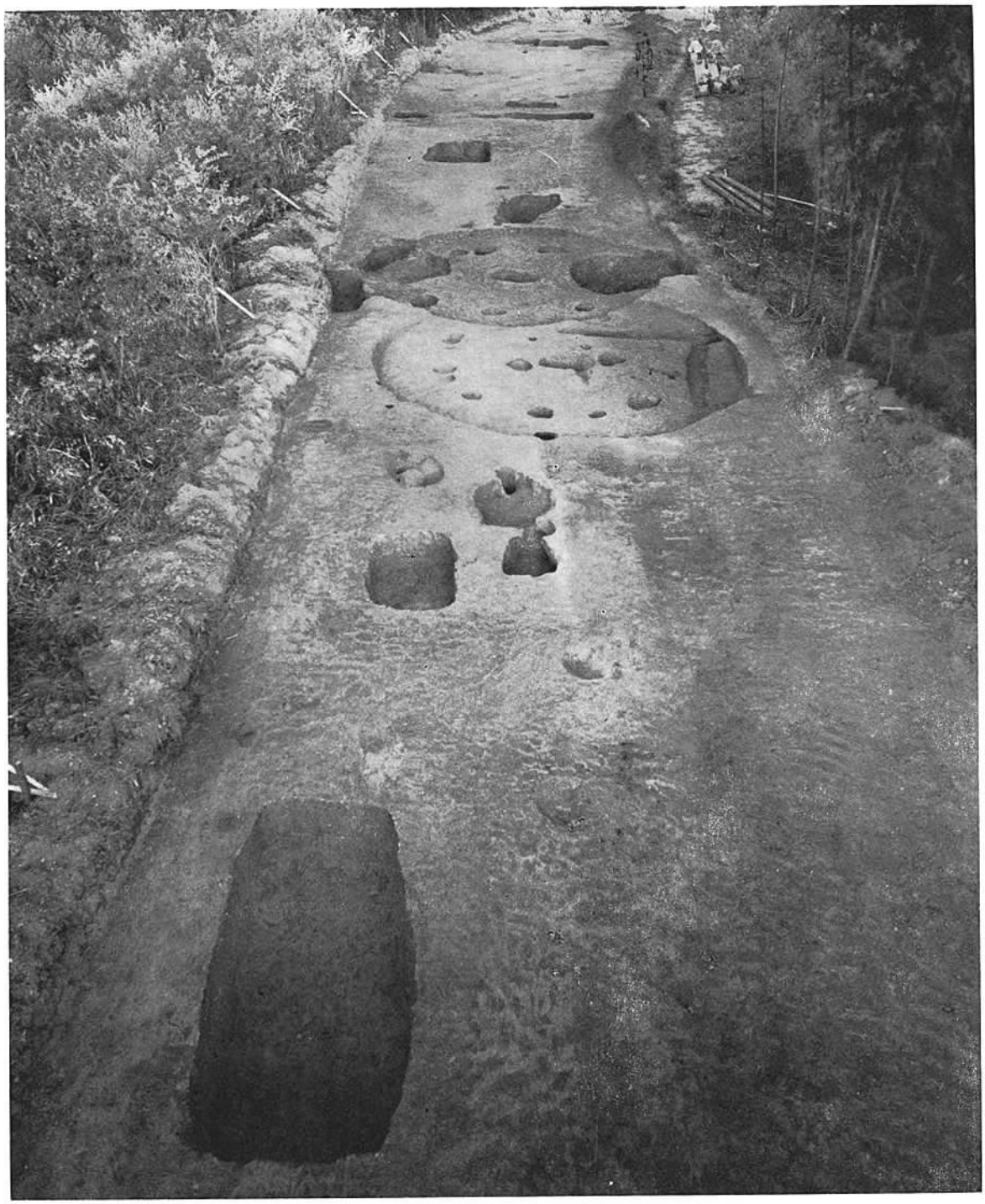
（2）第 1 地点遠景（西より）

（1）第 2 地 点 遠 景（北より）



（2）第2・第3地点遠景（西より）

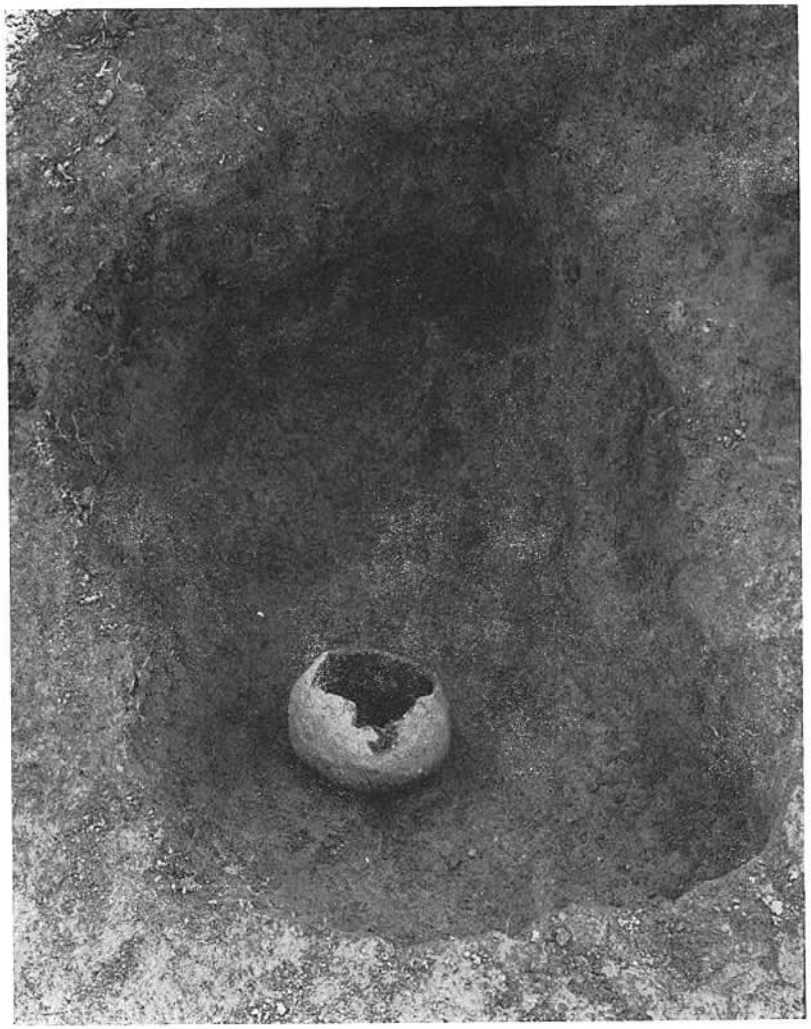
第１地点第１～第８号竪穴全景（北より）



第 1 地点全景（北より）

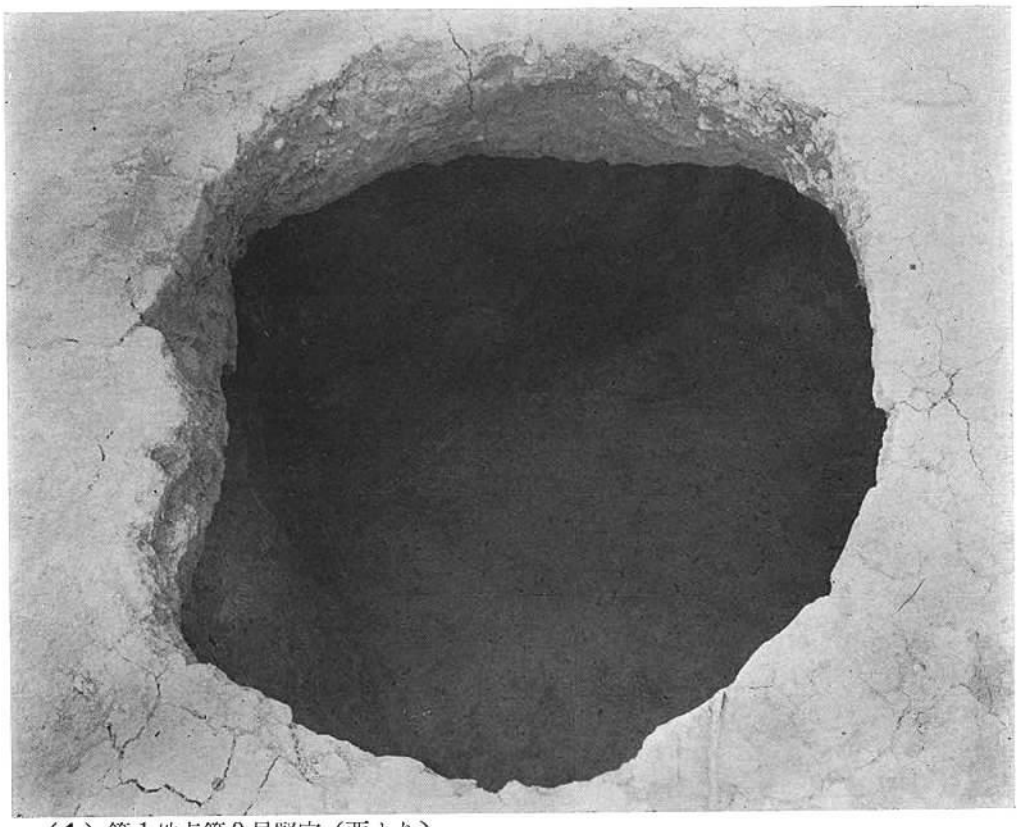
（1）第1地点第1・第2号竪穴（北より）

（2）第1地点第2号竪穴内遺物出土状況（北より）



(1) 第1地点第17号竪穴（西より）

(2) 第1地点第4号竪穴（南より）

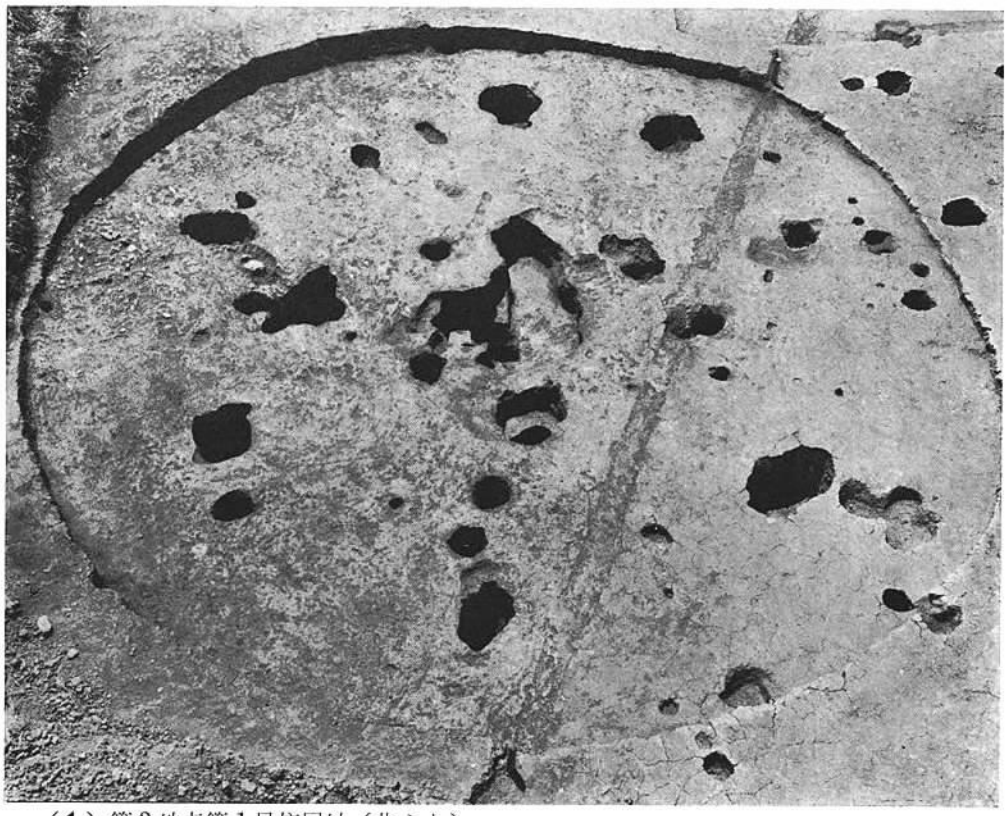


（1）第1地点第9号竪穴（西より）

（2）第1地点第1～第3号竪穴（北より）

（1）第１地点第５号竪穴（西より）

（2）第１地点第６～第８号竪穴（北より）



（1）第2地点第1号住居址（北より）

（2）第1地点第1・第2号住居址（北より）

（1）第1地点第3号住居址（南より）

（2）第1地点第3号住居址竈（南より）

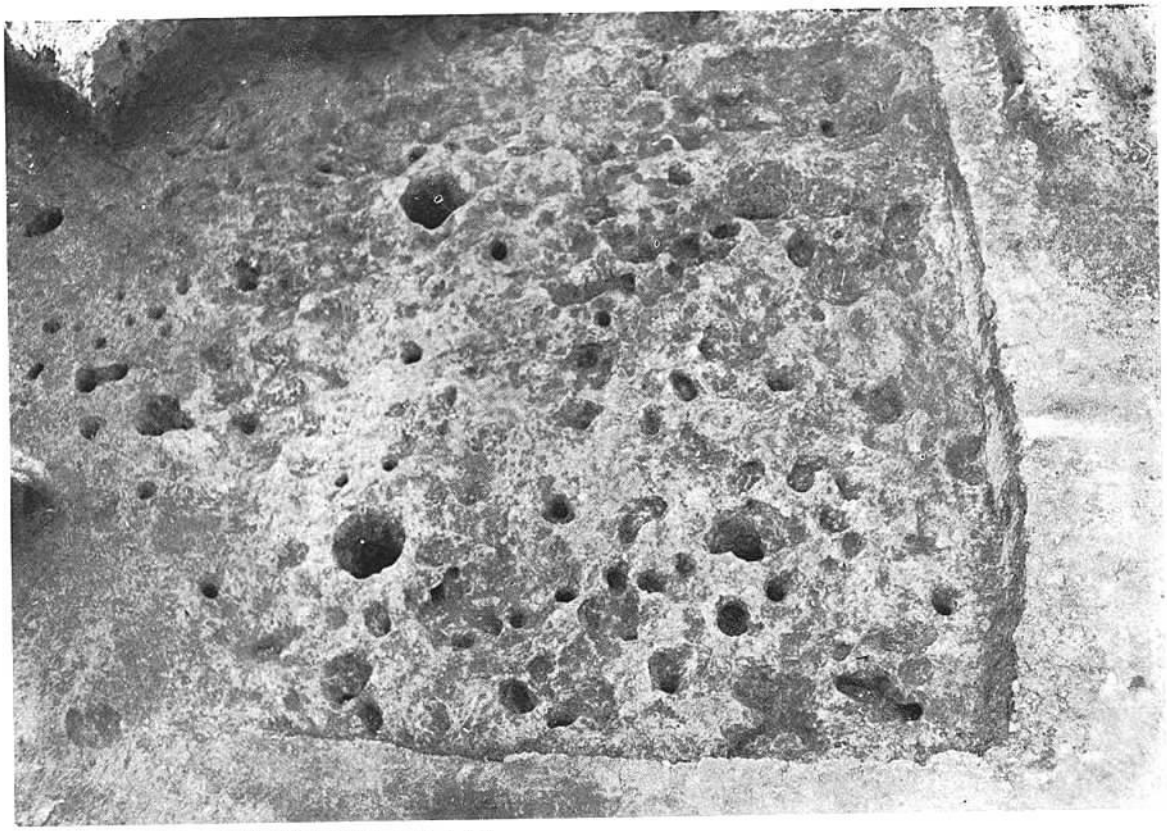
第2地点第1～第3・第7号住居址全景（西より）

（1）第2地点全景（南より）

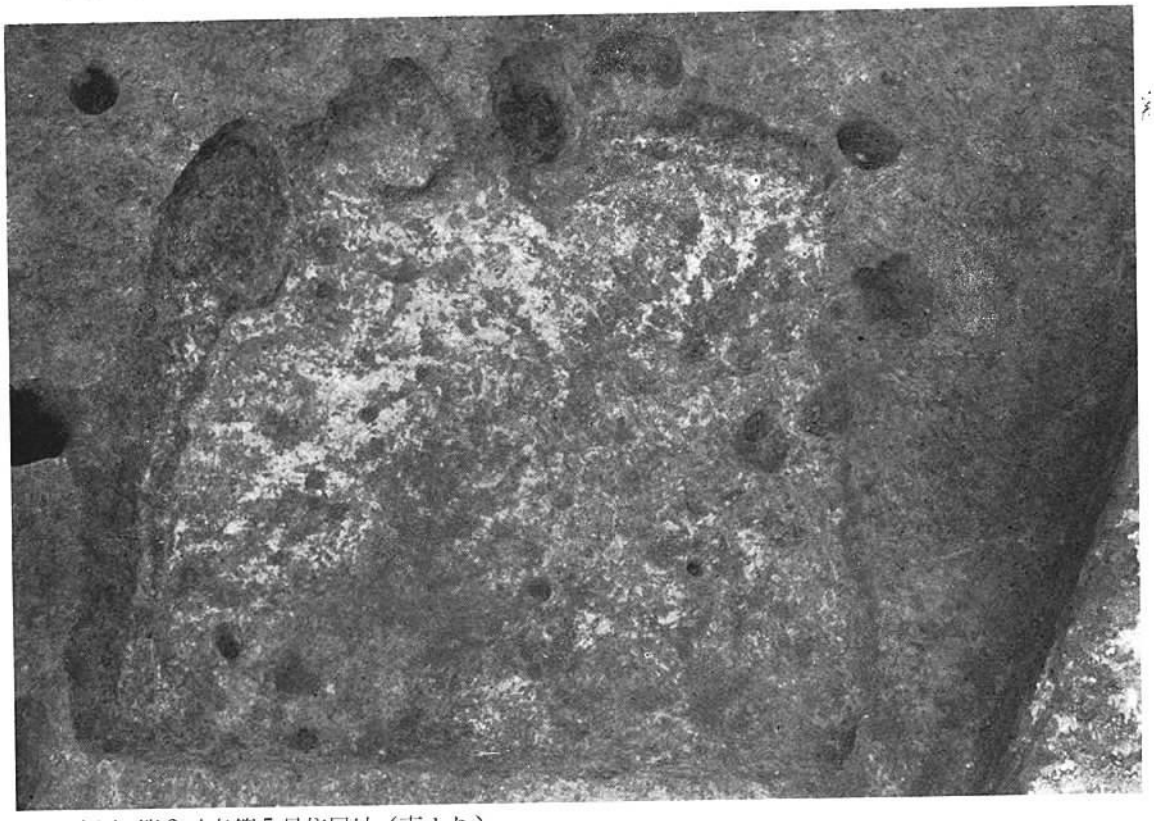
（2）第2地点南半全景（南より）

（1）第2地点第3号住居址（西より）

（2）第2地点第1・第2号住居址（北より）



（1）第2地点第4号住居址（北より）

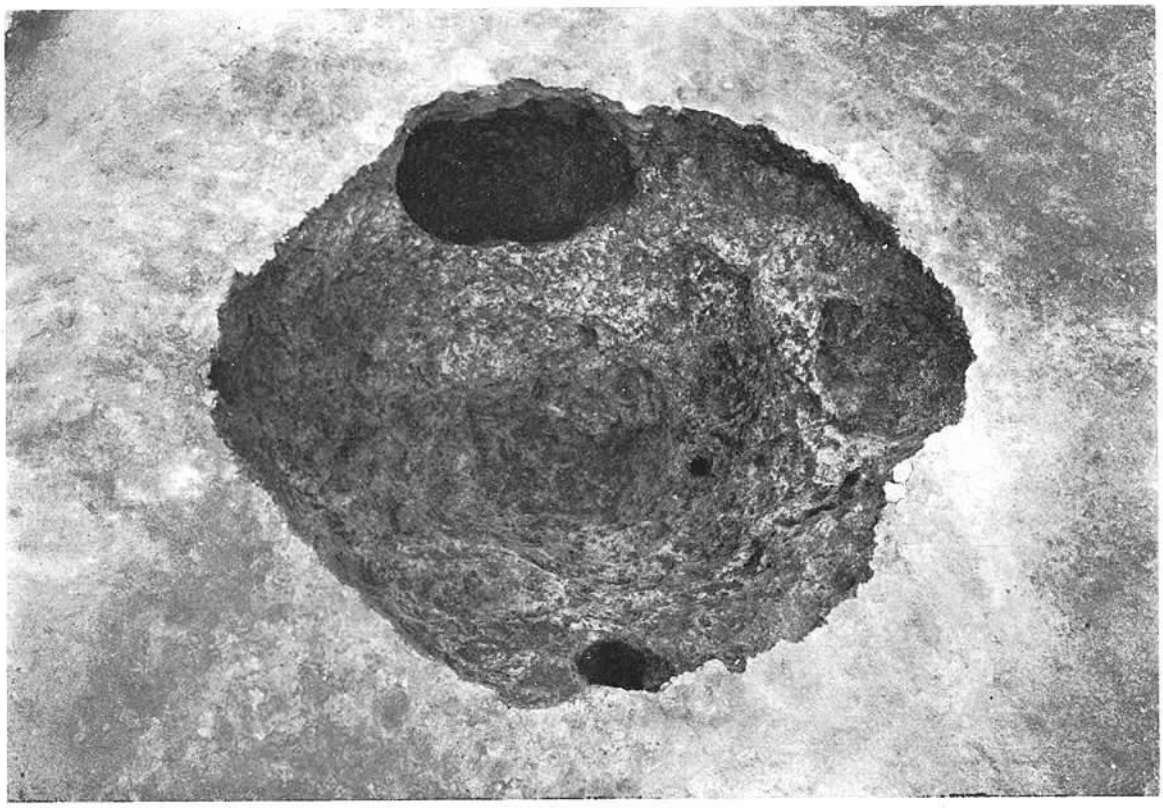


（2）第2地点第5号住居址（南より）

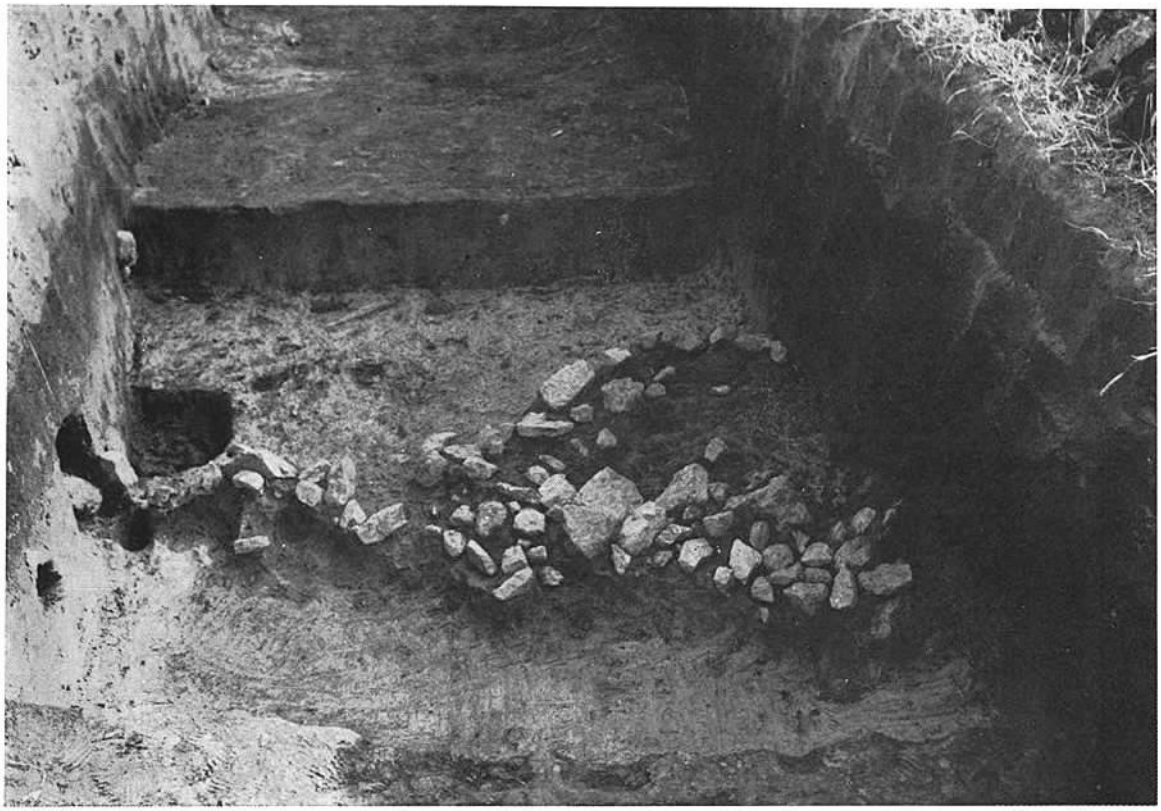
（1）第2地点第4・第5号住居址（北より）

（2）第2地点第6号住居址（南より）

（1）第2地点第8号住居址（北より）



（2）第2地点第2号竪穴（東より）



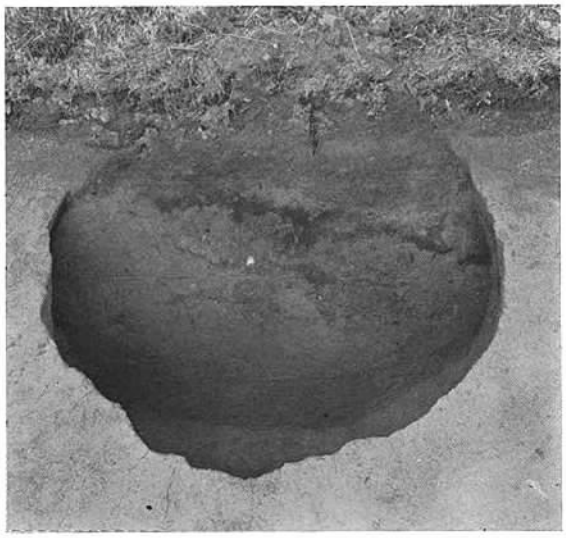
（1）第2地点第5号住居址下石英礫群

（2）石英礫群出土土層

第3地点全景（北より）

（1）第3地点南半全景（北より）

（2）第3地点第1号竪穴（西南より）

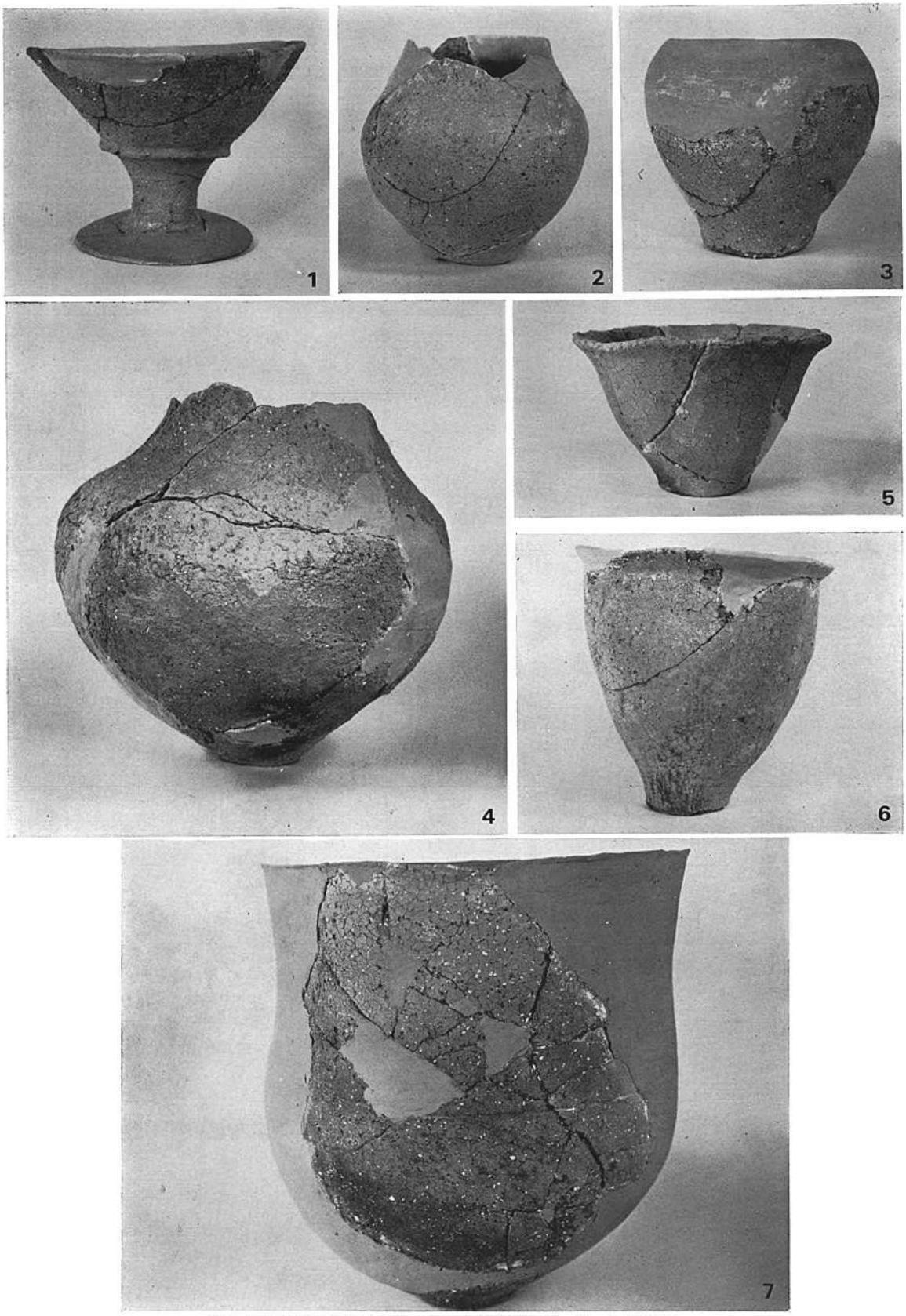


（3）第3地点第3号竪穴（西より）

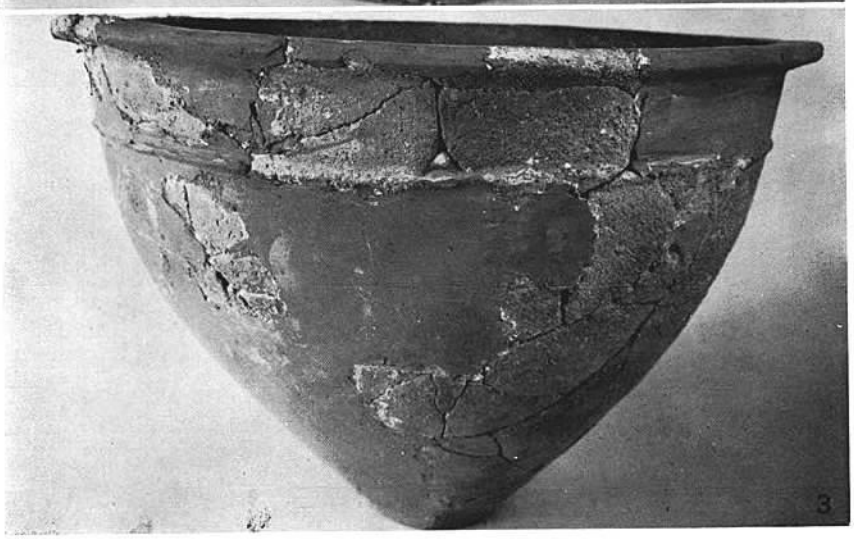
1）第3地点第1号住居址
（南より）

（2）第3地点第2号住居址
（東より）

（3）第3地点第1号
住居址内遺物出土状況



第1地点出土弥生式土器　1—1号竪穴，2～7—2号竪穴

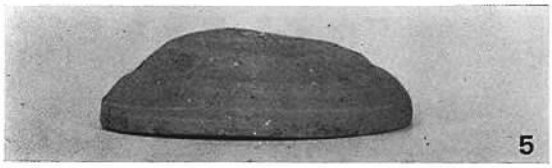


第1地点出土弥生式土器　1～3—2 号竪穴

第１地点出土弥生式土器　1—4号，2～6—5号，7—8号，8—9号，9—13号各竪穴

第１地点出土弥生式土器・土師器　1—16号竪穴，2～4—17号竪穴，5—3号住居址，6—18号竪穴

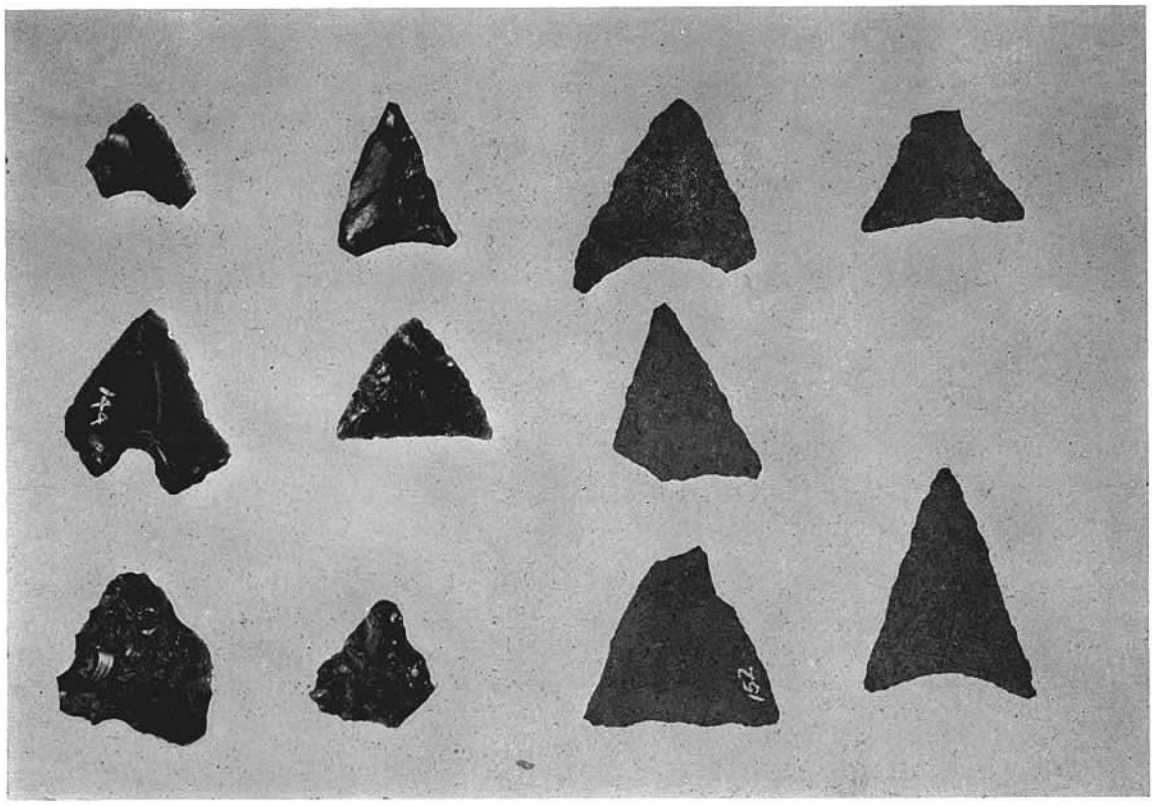
第2地点　出土土師器・須恵器　1—2号，2—6号，3—1号，4—4号，5—4号各住居址　6—3号溝



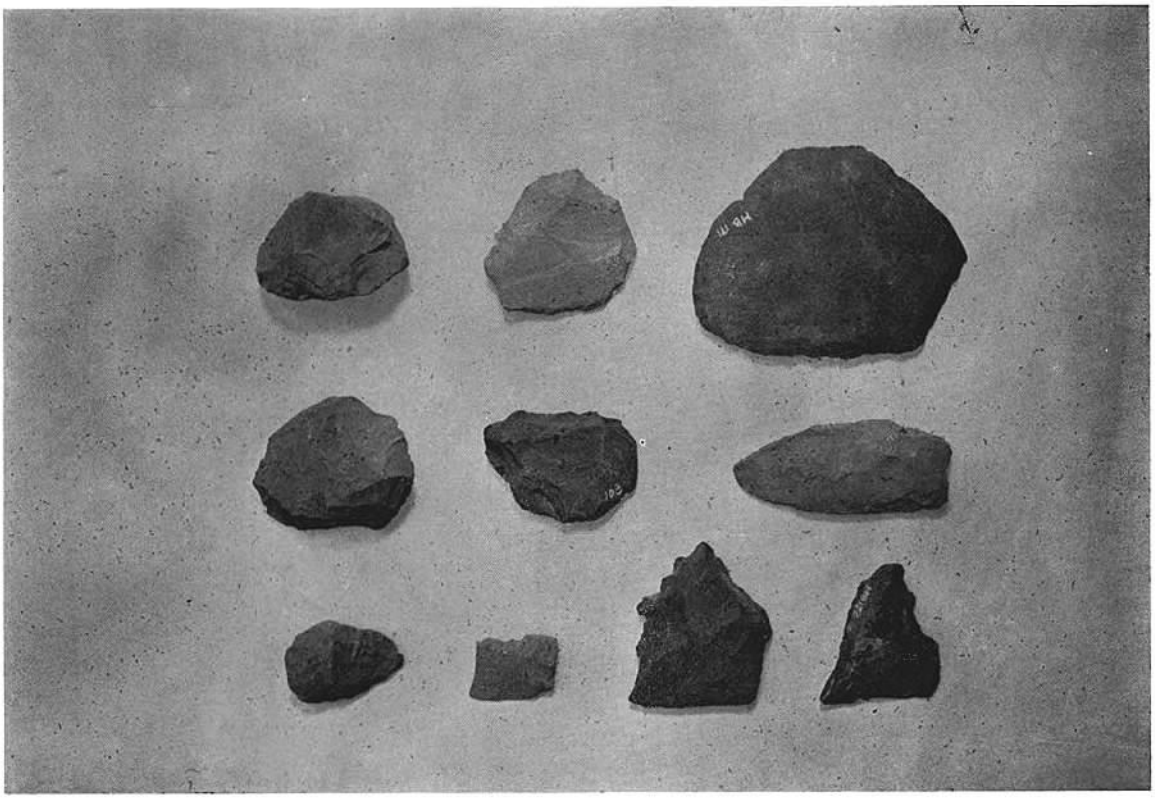
第2地点　出土土師器・須恵器　1～4—2号，5～9—1 号竪穴

1—5号，2—4号，3—5号各竪穴
4表採，5～8—1号住居址

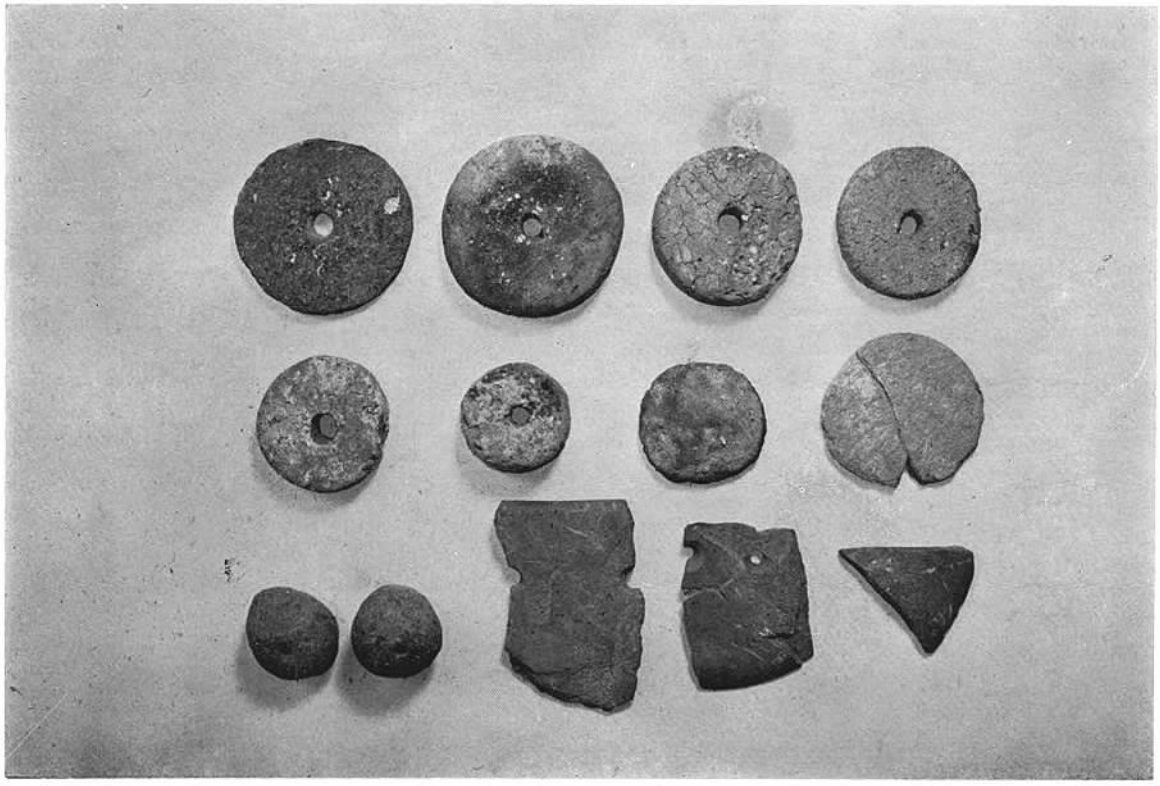
第3地点　出土弥生式土器・土師器



(1) 石　　鏃

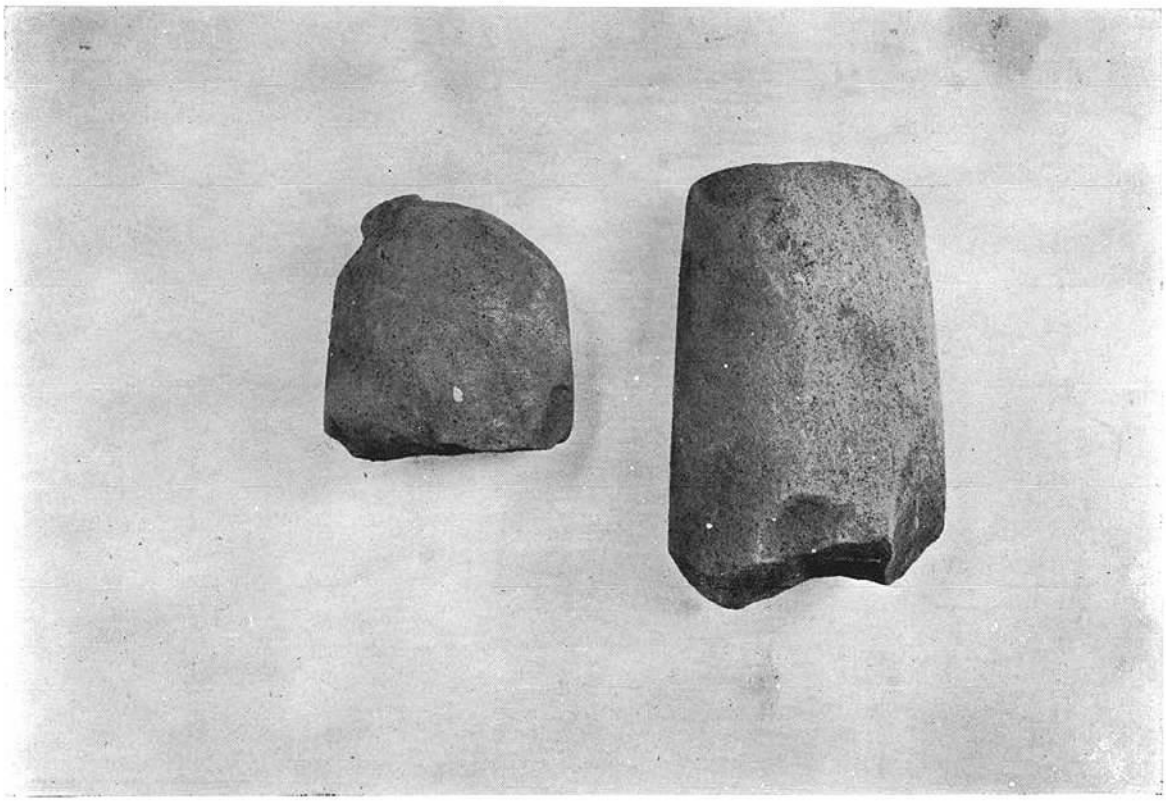


(2) 打 製 石 器

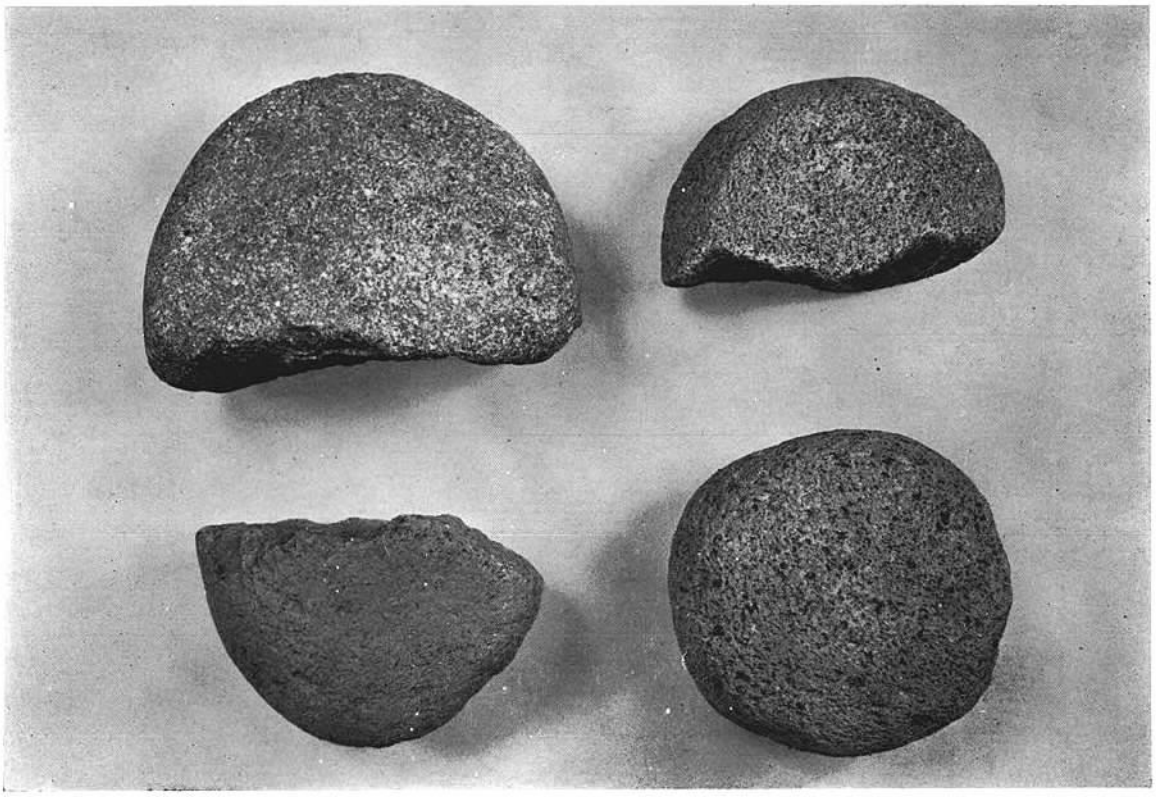


(1) 紡錘車・石庖丁

(2) 砥石など



(1) 磨 製 石 斧



(2) 磨　　石

V 上棚田遺跡

1. 遺跡の概況 (Fig. 77, PL.37)

古墳時代住居址が2軒検出された。調査日数は1日のみで，発掘範囲もごく限られた面積であったため，住居址も完掘するに至らなかった。特に第2号住居址は一部分を明らかにしたにすぎない。

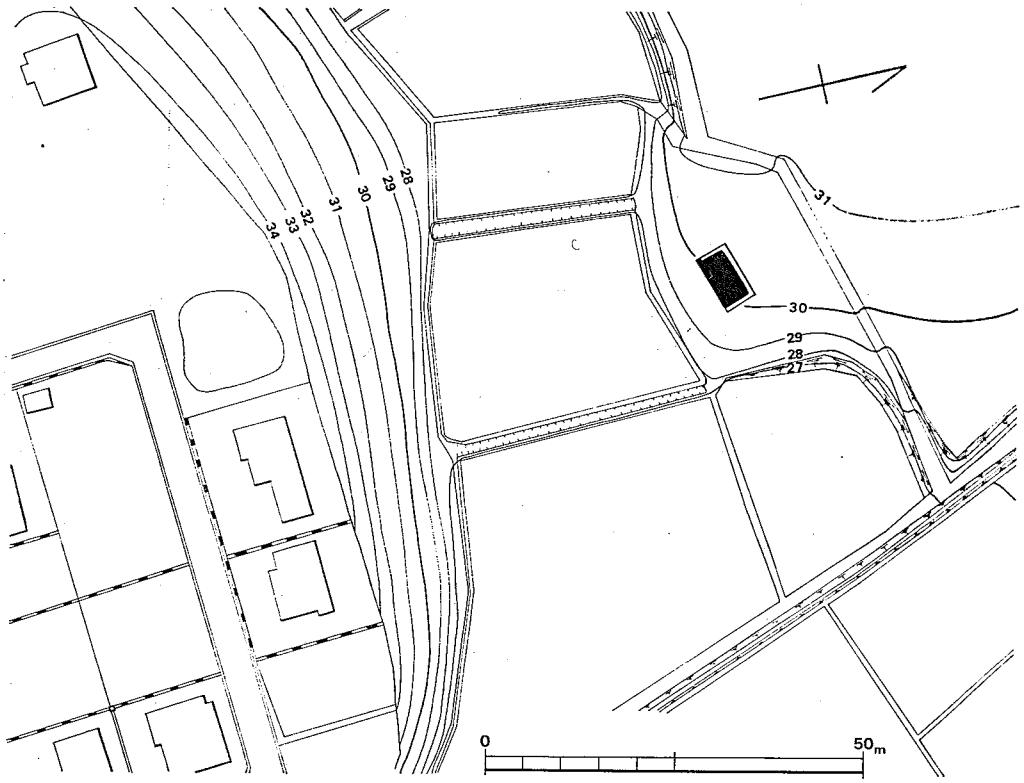


Fig. 77 上棚田遺跡全体図 (縮尺1/1,000)

2. 古墳時代の遺構と遺物

第1号住居址 (Fig. 78, PL.38)

北側壁にそってベッド状段部を有する東西長7.2 *m*の方形住居址である。南壁は第2号住居址に切られている。西壁側に周溝がある。床面上に2本の柱穴が検出されたが，主柱穴をなす

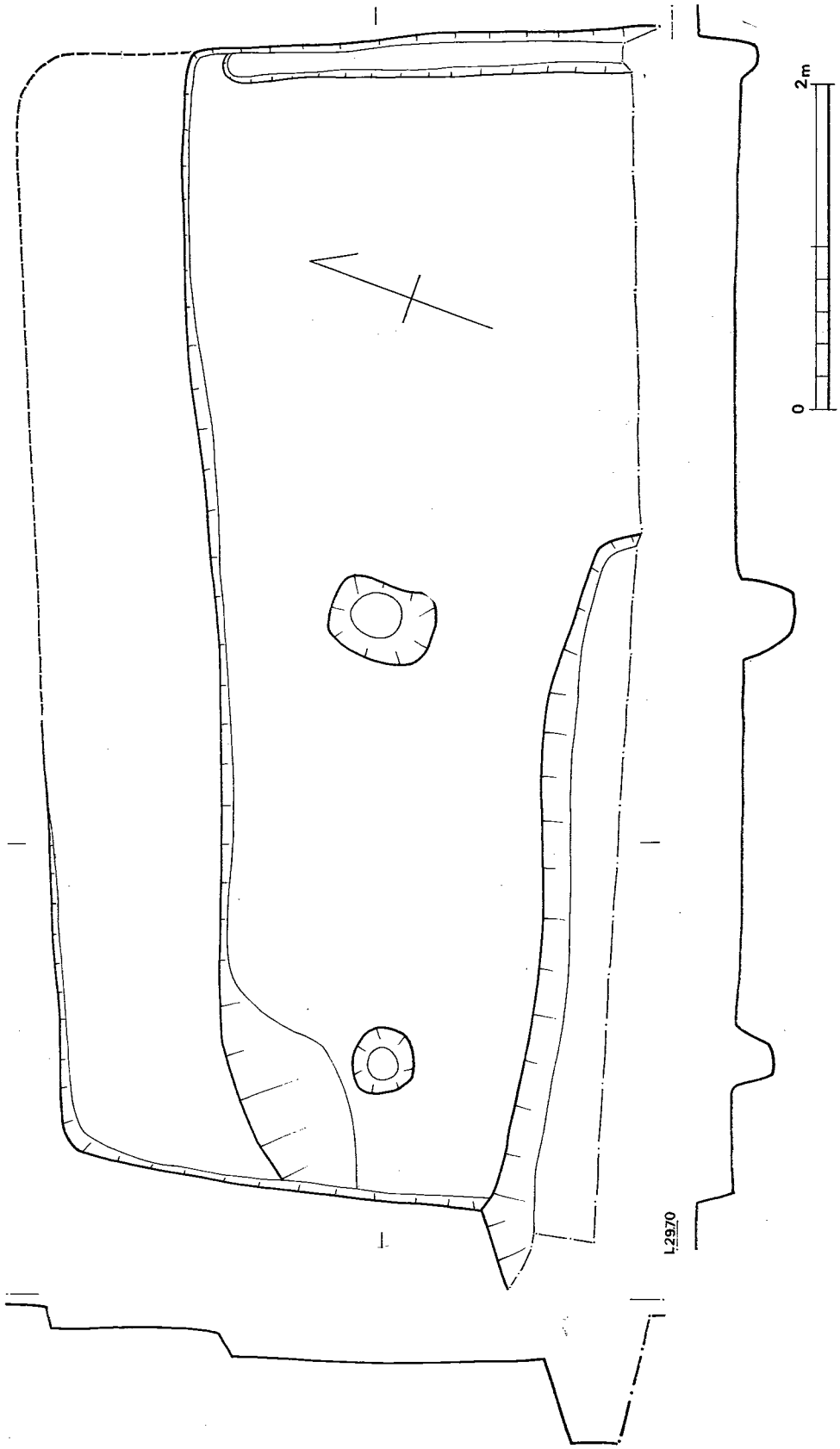


Fig. 78 第1・第2号住居址実測図（縮尺1/40）

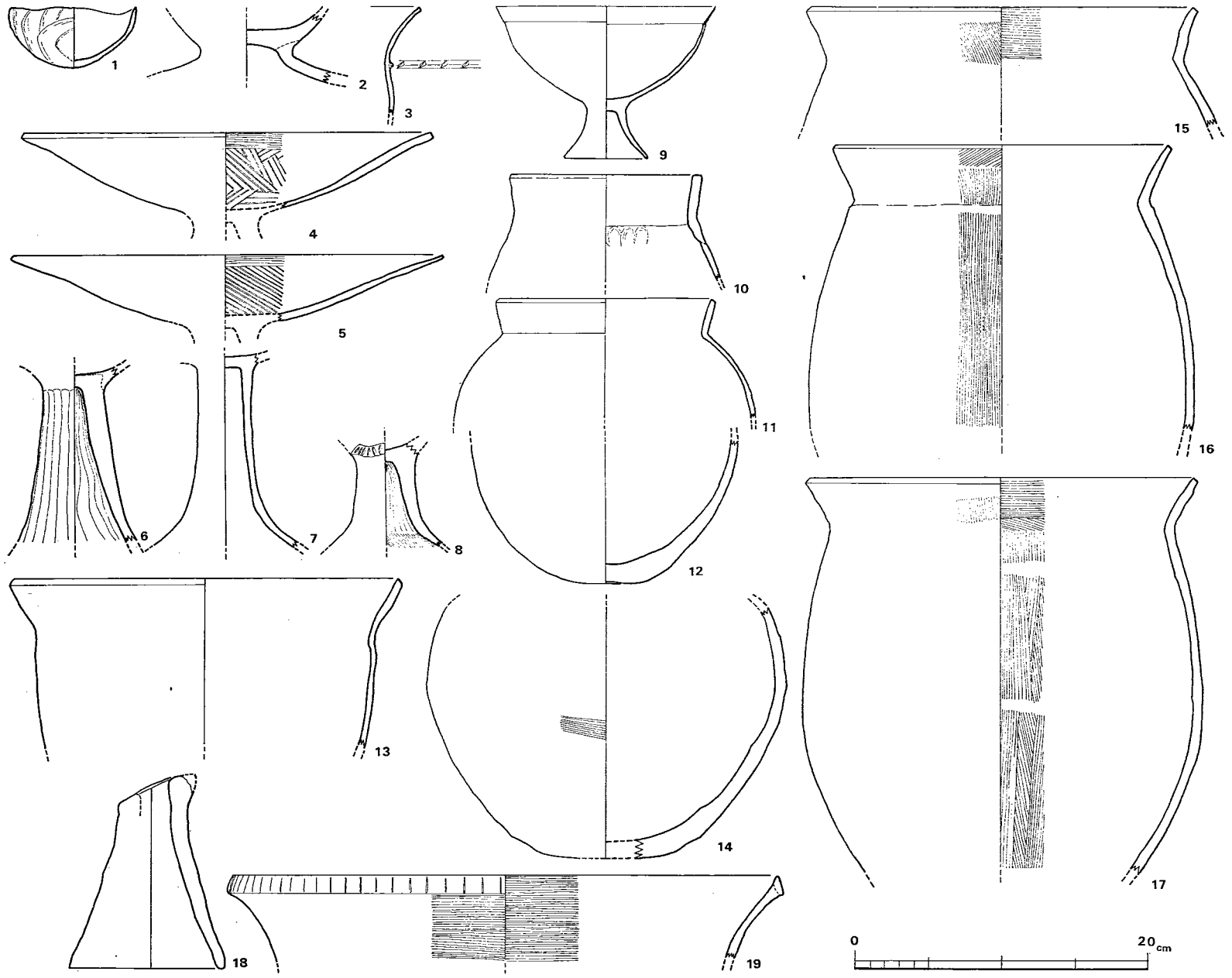


Fig. 79 第 1 号住居址出土土器実測図（縮尺¼，19のみ⅛）

のかどうかは不明である。

出土遺物 (Fig. 79, PL.39)

床面上に多くの土器片が散乱していた。特にベッド上西端および，床面中央部に集中していた。

椀（1）　外面を指でナデて仕上げ，内面は底部より口縁部に向けて斜めに傾いている。灰黄色を呈し，胎土，焼成とも良好である。

脚付椀（2）　脚部の大きく，広い椀である。風化がはなはだしく，表面の整形法は不明である。胎土中に砂粒が目立つが，焼成は良好である。

高坏（4～8）　4・5の坏部には6の脚部が接合するものと思われる。大きく開く坏部は口縁部下で折れ，若干水平に近くなる。外面は雑なナデのみであるが，内面は櫛状工具で丁寧にナデ，口縁部はさらに細い櫛で丹念にナデた優美な土器である。外面は黒色，内面は灰褐色を呈している。6はヘラケズリを施した脚部で，黒褐色を呈し，胎土は良好である。7・8は風化のため，器壁の整形法は不明である。7は胎土中砂粒多く，8は精良である。

台付鉢（9）　整形法は不明であるが，薄く仕上げられた鉢である。灰黄色を呈し，胎土は精良である。

壷 (10～12・14)　口唇部は平坦で，球形胴部をもつ。10の直立する口縁部は肉厚であるが，胴部に移行するにつれ薄くなる。12・14はいずれも赤橙色を呈し，焼成は良好である。

甕 (15～17・19)　最大径が口縁部にあり，ナデ仕上げの類 (13)，口唇部が平坦で胴が張り，ハケメ整形をした類 (15～17) と口唇部に平行刻みを入れた大型甕の3類に区分される。

支脚 (18)　表面に指圧痕が著しく，加熱により赤変している。

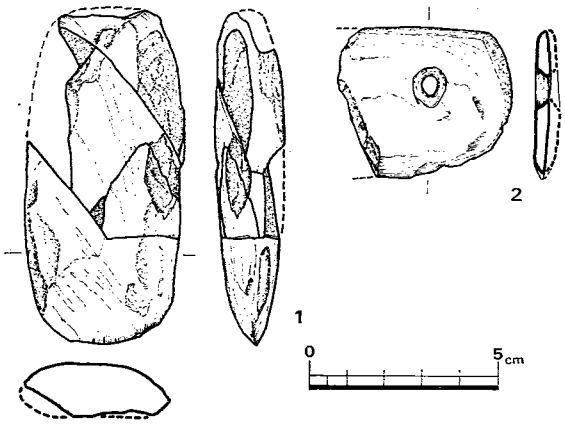


Fig. 80　第1号住居址出土石器実測図（縮尺½）

石器 (Fig. 80)

石斧（1）　床面上から破砕された状態で出土した。両刃で小形である。石質は火成岩であるが詳細は不明である。

石庖丁（2）　短冊形の石庖丁

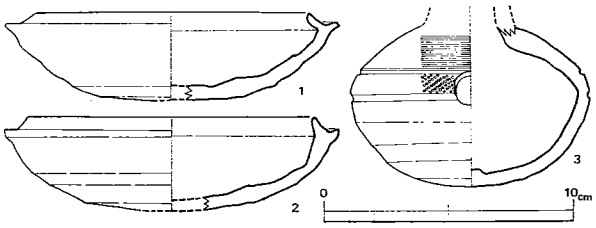


Fig. 81　第2号住居址出土須恵器実測図（縮尺⅓）

である。刃部は側縁にまで及んでいる。

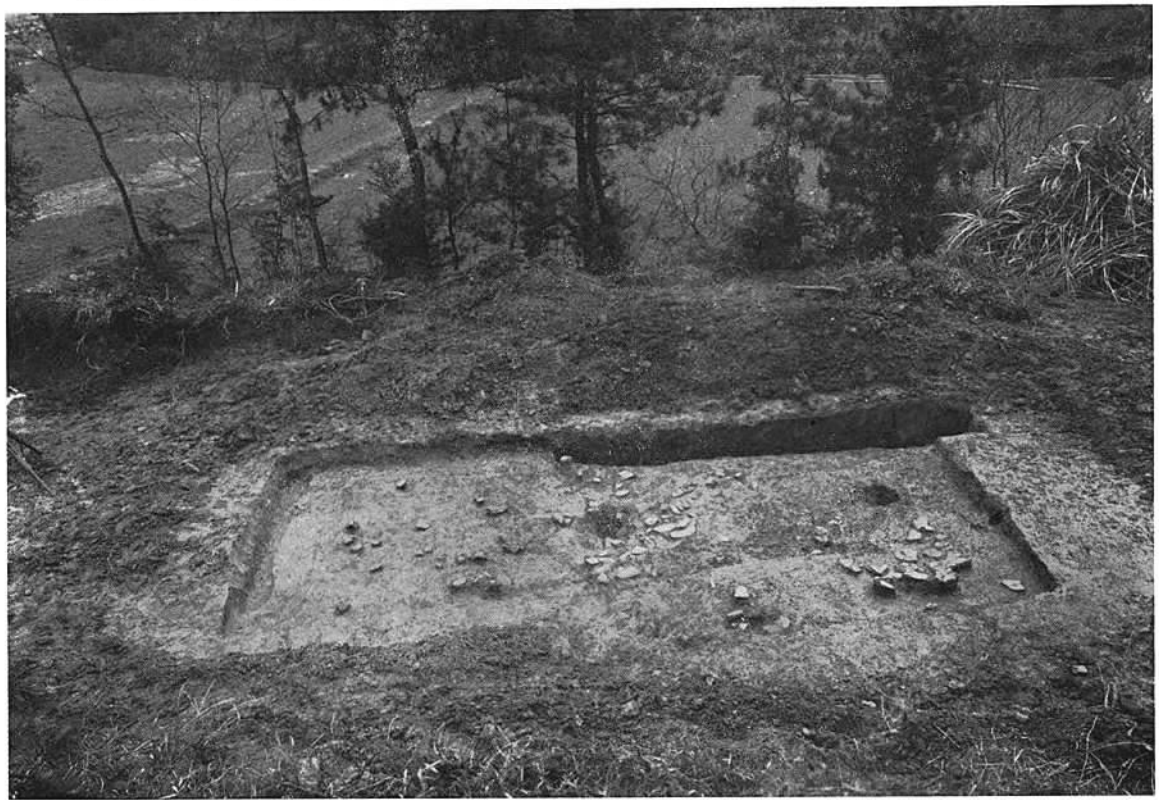
第2号住居址 (Fig. 78, PL.38)

北壁の一部を明らかにしたにすぎない。

出土遺物 (Fig. 81)

1，2はいずれもかえりの肉厚な坏身で，底部にナデは及んでいない。3の甕は胎土中に砂粒を含み，胴下半部はナデていない。(酒井仁夫)

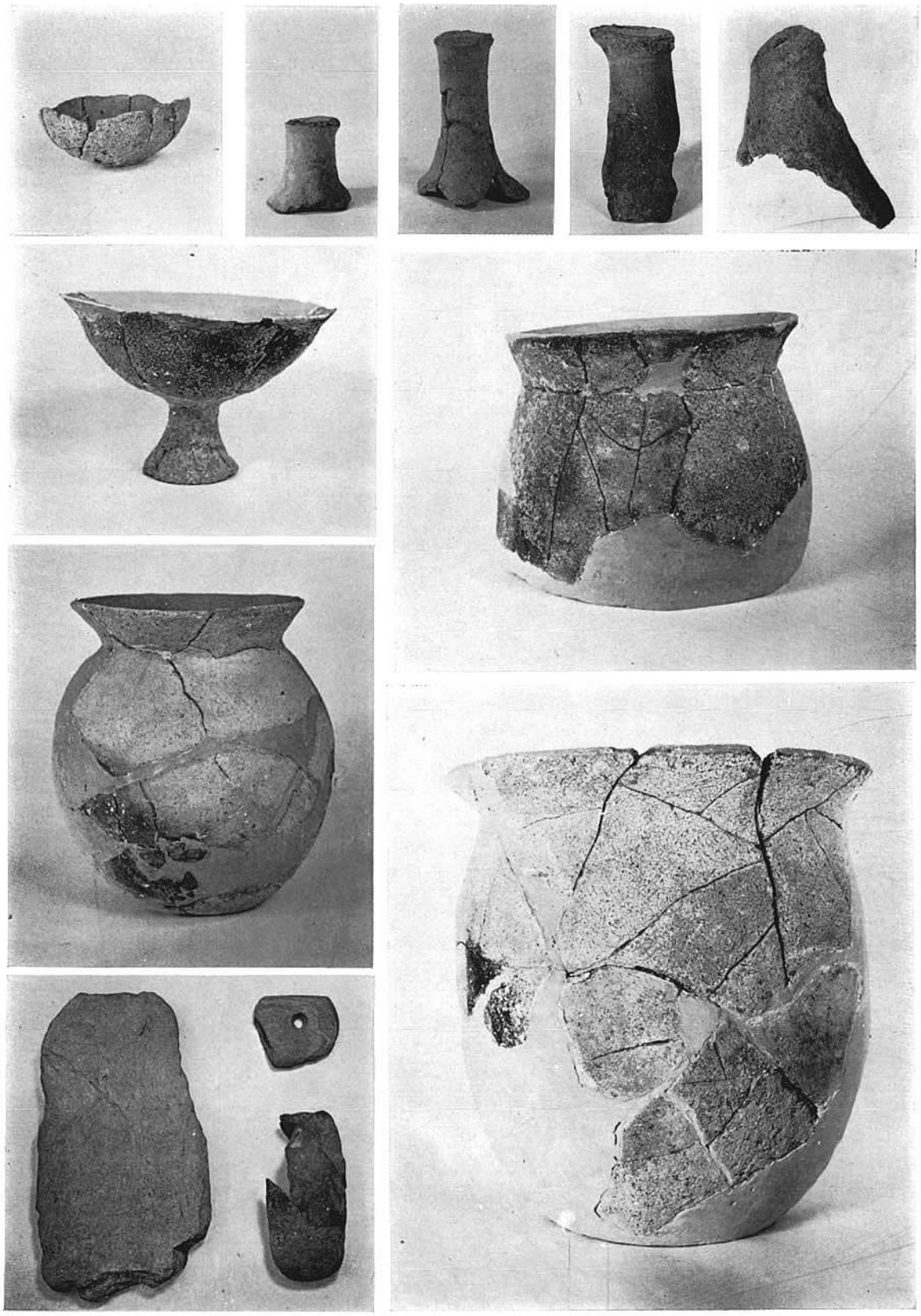
（1）遺　跡　遠　景（西より）



（2）住 居 址 全 景（北より）

（1）第1号住居址内遺物出土状況（南より）

（2）第1号住居址内遺物出土状況（南より）



第 1 号住居址出土遺物

Fig. 82　遺　構　分　布　図（縮尺1/160）

Ⅵ　ハサコの宮遺跡

1.　遺　跡　の　概　況 (Fig. 82, PL.40)

三沢種畜場遺跡群のほぼ中間にあり，三沢進入路関係の遺跡群中ではもっとも北方に位置するものである。遺跡は南北方向に細長い丘陵の鞍部より西南斜面に在り，長さ25*m*，幅16*m*の範囲にわたり発掘調査を実施したものである。検出された遺構は後述の通り，甕棺墓2基，土壙墓25基以上，溝2条であり，これらはいずれも現地表より20*cm*～30*cm*下で遺構の上面が検出され，遺構が中央部のほぼ平坦な丘陵頂部より麓に向って（北東～南西）密集している。

2.　弥生時代の遺構と遺物

甕棺墓

第1号甕棺 (Fig. 83・84, PL.42)

現地表から浅く，甕棺上部は遺存が悪い。墓壙は，1.20×0.72*m*の楕円形で－5度の傾斜をもって合口甕棺が埋置されている。成人用の接口式甕棺でN 55° 30′ E に位置し，接合部の密着には粘土を厚く用いて，目貼りを施している。

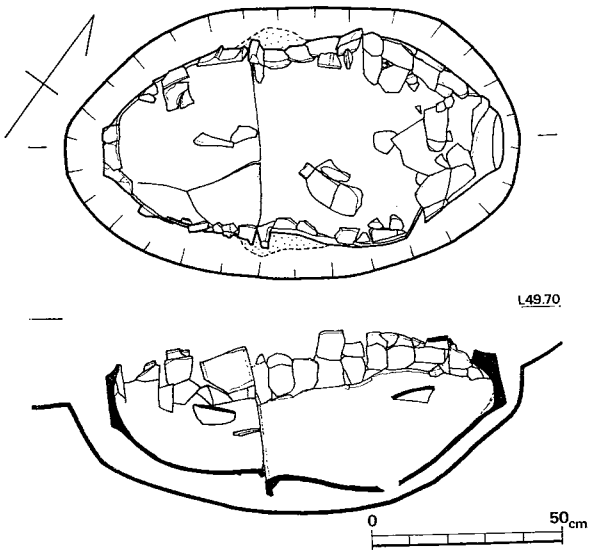


Fig.　83　第1号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

上甕は口縁部内径48.2*cm*，底部外径13.2*cm*，器高38.5*cm*，器厚ほぼ0.8*cm*を測り，最大径は口縁部にある鉢形土器である。口縁部下6*cm*に一条の三角突帯をめぐらしている。器面はハケメで調整されて明瞭に残っており，突帯はハケメの上に貼付けられていて整形後の所産であろう。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好である。

下甕は口径46*cm*，口頸部内径43.2*cm*，最大胴部は口端部より32.5*cm*下方で内径57*cm*，底部外径15*cm*，器高66.6*cm*を測り，器厚はほぼ1*cm*弱である。口縁端部に上下2条の刻み目をめぐ

らし，内側への突き出し部は鋭くて短かく，頸部より大きく外反する。頸部直下に3条の沈線，最大胴部直上に2条の沈線をめぐらし，胴腹部がふくらみをもち内面より穿孔した小孔がある。なおこの小孔は甕棺埋置の時は最下位に位置している。口頸部にハケメによる調整がみられ，色調は赤褐色を呈し，胎土中に小砂粒を少量混入し，焼成は良好である。甕棺は弥生時代前期末の特徴を示すものである。なお，棺内に人骨の遺存，副葬品は検出されない。

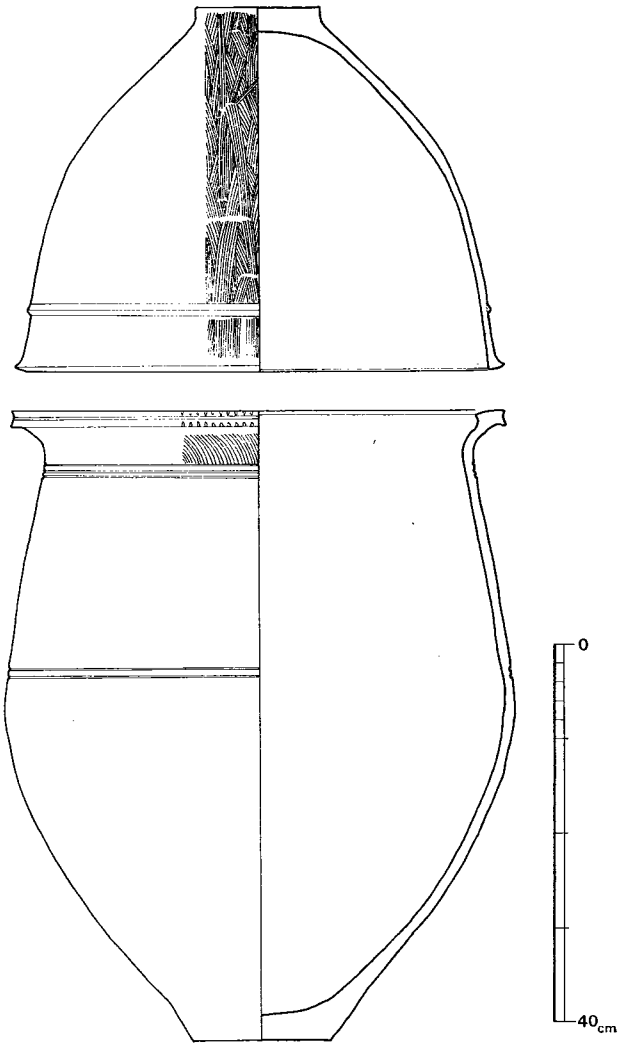


Fig.　84　第1号甕棺実測図（縮尺1/8）

第2号甕棺

(Fig. 85・86, PL.43)

現地表から浅く，上面半分を破壊され遺存状態が悪い。墓壙は平面・断面ともに確認しがたい。小児用の覆口式合口甕棺でN 8° 30′ Wに位置し，ほぼ水平に埋置されている。接合部には粘土はみられない。

上甕は口縁部内径32.4㎝，底部外径8.5㎝，器高27.8㎝，器厚0.7㎝を測る鉢形土器である。口縁部は厚味の逆L字形で口縁端部がやや外反し，端部は平坦である。口縁部下3㎝に1条の断面台形の突帯をもち，底部は平底である。色調は，外面と内面上半部は赤味をおびた茶褐色で，内面下半部は黒色である。焼成は良好であり，胎土は石粒を少量混入しているが密である。口縁部をヘラ調整し，体部をヨコナデによりていねいに仕上げている。

下甕は口縁部，底部を欠いている。口頸部内径約16㎝，最大胴部32.1㎝を測る壷形土器であり，口頸部に突帯がめぐらされている。色調は赤褐色を呈し，焼成は良好であり，胎土は石粒

を少量混入していてやや密である。内・外面ともヘラ調整を施しており，外面はていねいなつくりである。甕棺は弥生時代中期初頭に比定される。

土壙墓

土壙墓は総数25基を数え，南北方に位置するものがほとんどで，平面形は大きく分けて長方形と隅丸長方形，楕円形の三つに分類される。大きさは，長いもので約180㎝，短かいもので93㎝であり，130㎝から150㎝のものが多い。

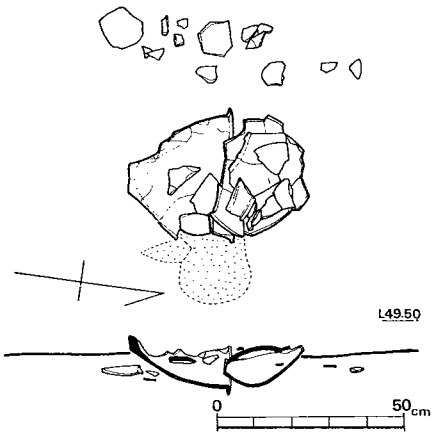


Fig. 85　第2号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

第1号土壙墓 (Fig. 99—1)

長さ223㎝，幅115㎝，深さ75㎝の長方形の墓壙のなかに，長さ146㎝，幅40㎝，深さ40㎝の長方形を呈し，土壙は墓壙内の西方にややかた寄ってある。短側壁，長側壁ともに垂直で，床面はほぼ平坦で南側が下る。

第2号土壙墓 (Fig. 89—2)

内径長さ143㎝，幅62㎝，深さ35㎝の不整隅丸長方形で，幅の広いものである。北側の短側壁はほぼ垂直で，その直下に楕円形ピットがあり，南側の短側壁は外側に傾斜が強い。四壁ともに直線的でない。地形に沿って西方が低く東方が高い。

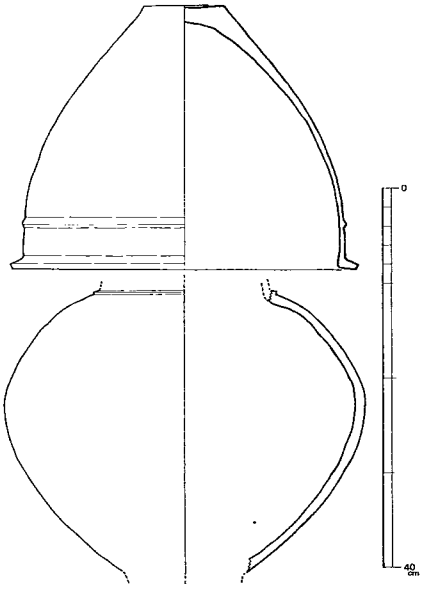


Fig. 86　第2号甕棺実測図（縮尺1/8）

第3号土壙墓 (Fig. 89—3)

内径86㎝，幅38㎝，深さ13㎝の隅丸長方形を呈し，四壁ともに外傾している。床面は平坦である。

第10号土壙墓 (Fig. 90—10)

内径92㎝，幅75㎝，深さ25㎝。径95㎝，幅70㎝と上幅が広く四壁ともに内傾している。床面はややくぼんでいる。

第20号土壙墓 (Fig. 90—20)

内径170㎝，幅約100㎝，深さ20㎝で不整長方形を呈している。南側床面に4個の小ピットがある。

第25号土壙墓 (Fig. 90—25)

内径85㎝，幅55㎝，深さ8㎝の楕円形を呈している。丘陵斜面に位置しているため西側がかなり低い。

以上，土壙墓の平面形により分類すると長方形が第1・6・9・14号，不整隅丸長方形は第2・8・17号，隅丸長方形は第3・5・7・16・18・19・21号，不整楕円形は第10・12・15号，不整長方形に第20・28号，楕円形は第11・13・23・25号土壙墓である。このうち墓壙の存るものに第1・9・14号とがある。さらに床面の特異なものについてみると，ピットが存在するものがあり，それは床面内に独立してある第2・5・7・15・18・20・24号と，床面の幅全体にわたってある17号とがある。前者のうちにはピットが一孔のものと複数のものに細分できる。各土壙墓のうち，第30号はもっとも特異である。この30号は東側半分に墓壙があり，その南側半分に6個の石塊が存在している。土壙墓内には認められない。また各土壙墓の方位についてであるがN5°WよりN40°Eを指しているのが目だつ。この範囲外は4基のみである。とくにN6°左よりN22°Eに集中する。なお，この方位内には第2号甕棺も含まれている。(上野精志)

耕作土中出土遺物

いずれも土壙墓群南側の斜面より出土した。

土器 (Fig. 87)

1は平坦口縁を持つ甕である。口縁部内外面は特に丁寧にナデている。2は石粒の多い茶褐色を呈した甕底部片で，甕棺として用いられていたとも考えられる。

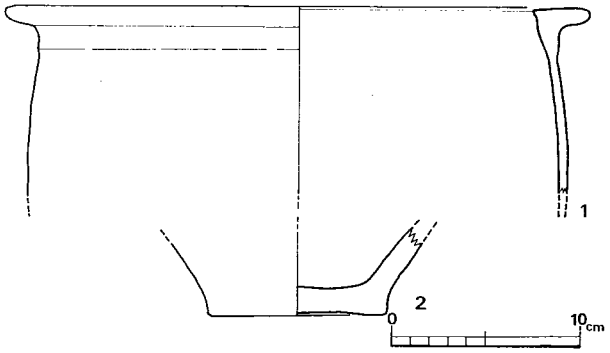


Fig. 87　耕作土中出土土器実測図（縮尺¼）

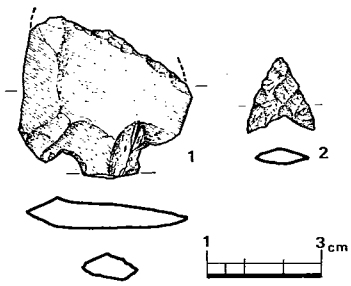


Fig. 88　耕作土中出土石器実測図（縮尺½）

石器 (Fig. 88)

1・2ともサヌカイト製である。1は簡単な調整で茎部を作り出している石鏃である。(酒井仁夫)

付記ではあるが，本報告のハサコの宮遺跡より北東に約50m離れた同一丘陵上には，昭和49年5月に福岡県教育委員会管理部文化課により，本ハサコの宮遺跡と同じ内容の弥生時代前期末にかけての甕棺25基（中期前半が主体）土壙墓8基以上，木棺墓4基以上が検出されている。(上野精志)

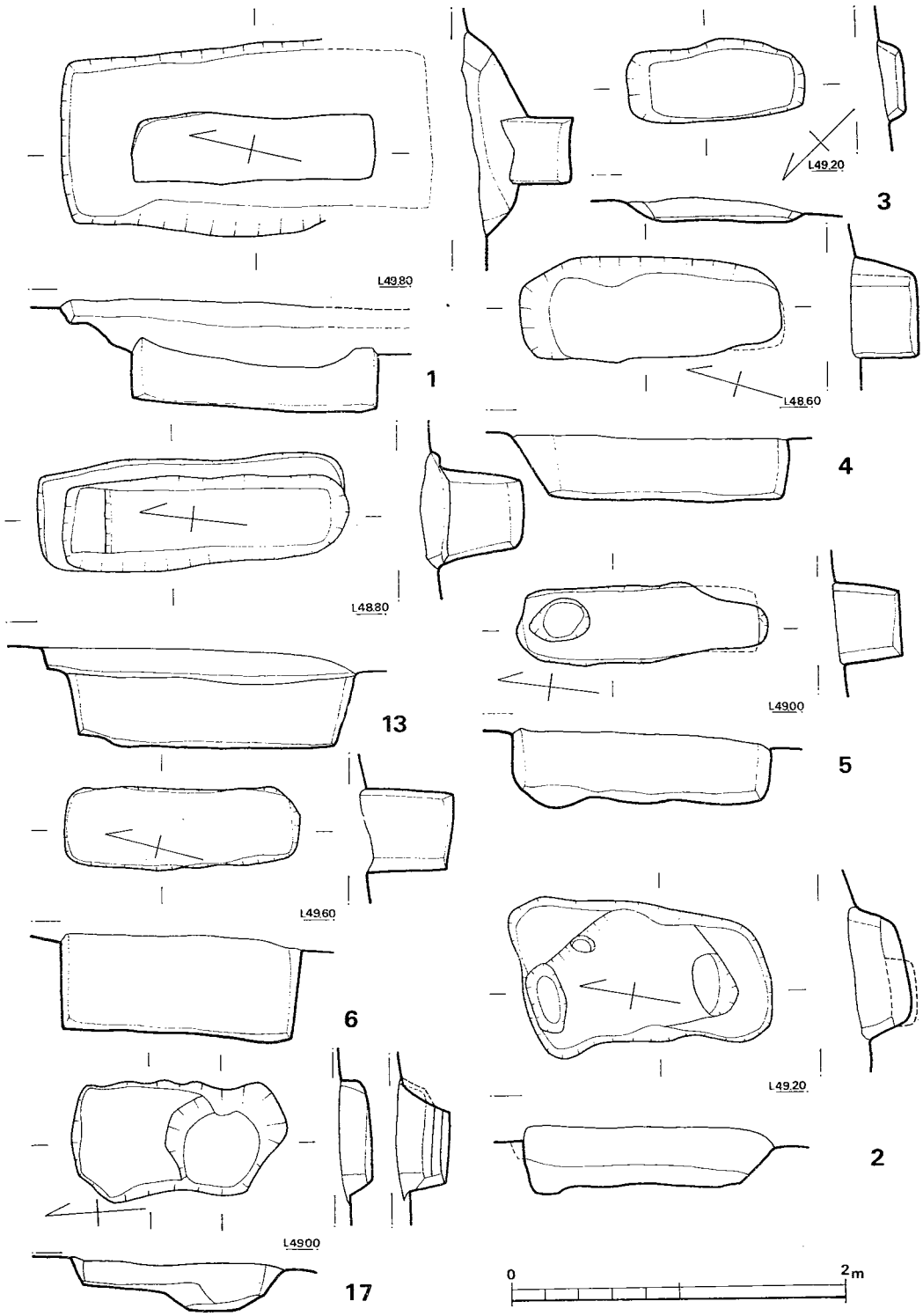


Fig. 89 第1～6号・13号・17号土壙墓実測図（縮尺1/40）

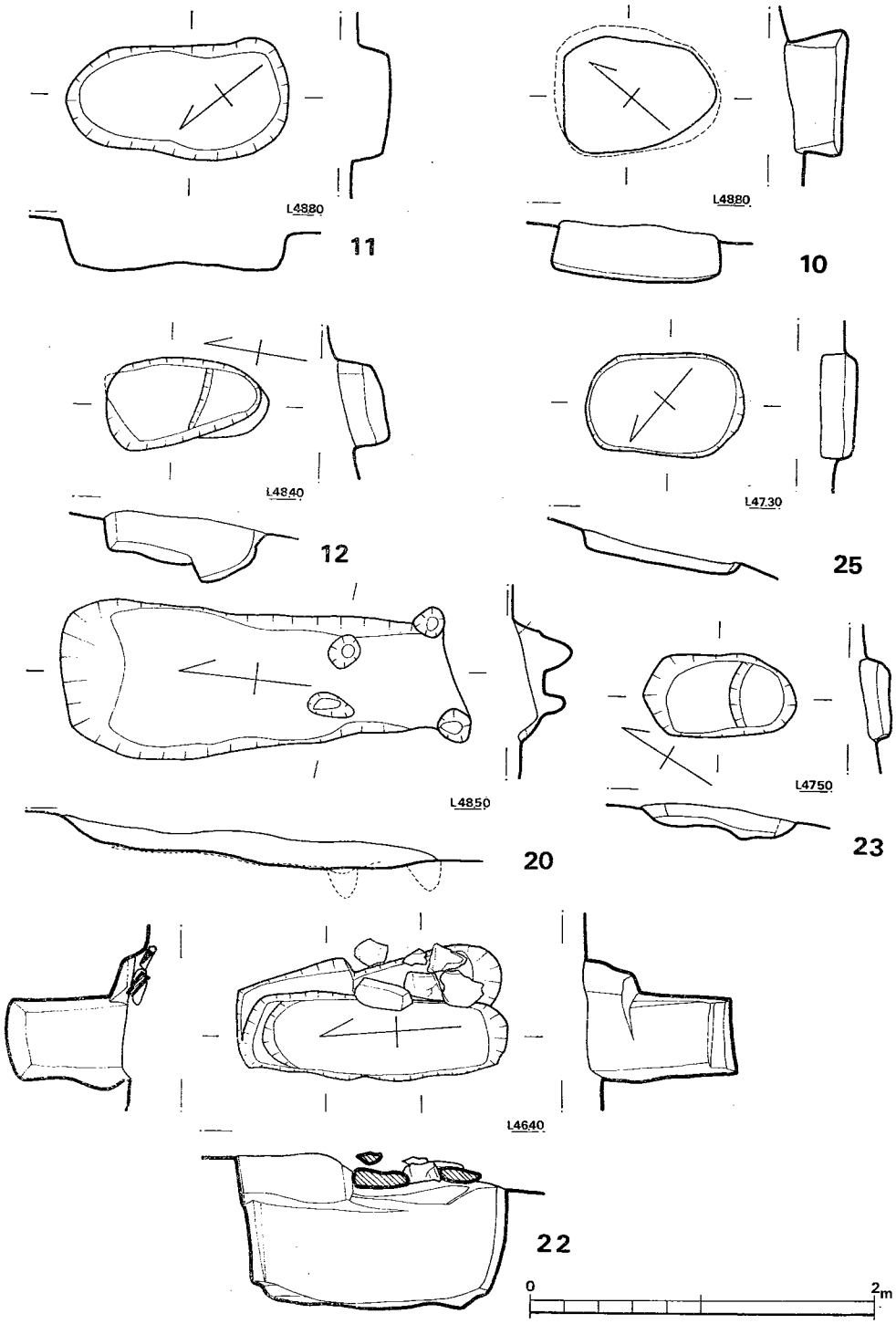


Fig.　90　第10～12号・20号・22号・23号・25号土壙墓実測図（縮尺1/40）

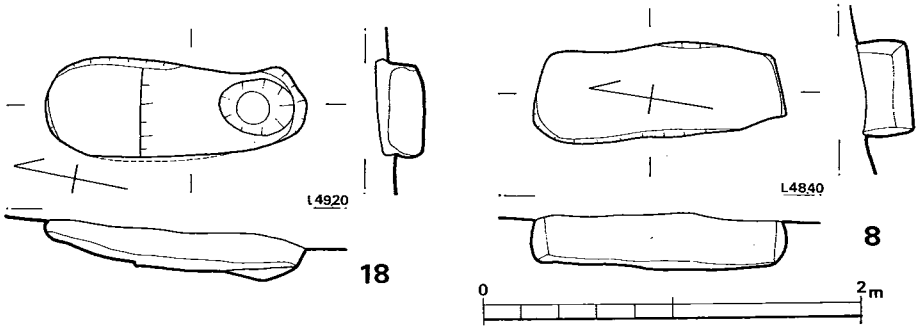


Fig. 91　第8・18号土壙墓実測図（縮尺1/40）

表 2　土 壙 墓 一 覧 表

号	方位	形状	大きさ (cm)	備考
1	N 12° 30′ E	長方形	140×40×65	墓壙223×115cm
2	N 10° 30′ E	不整隅丸長方形	143×62×35	北・南側にピット各1
3	N 44° W	隅丸長方形	86×38×13	
4	N 16° 20′ E	〃	140×50×40	
5	N 9° E	〃	140×40×43	北側にピット1
6	N 14° 15′ E	長方形	134×45×60	
7	N 10° E	隅丸長方形	158×58×75	南側床面に隋円形ピット1
8	N 9° 30′ E	不整隅丸長方形	128×43×30	四壁ともに内傾
9	N 7° 30′ E	長方形	154×35×60	墓壙あり
10	N 40° E	不整隋円形	92×75×33	
11	N 36° 40′ W	隋円形	115×50×25	
12	N 1° 30′ E	不整隋円形	82×42×27	南側に大きなピット
13	N 21° 30′ E	隋円形	108×32×45	ピット状のもの1
14	N 10° 15′ E	長方形	130×45×65	不整形の墓壙あり
15	N 71° 30′ E	不整隋円形	115×40×35	ピット3　床面凸凹
16	N 19° 30′ E	隅丸長方形	110×30×45	
17	N 2° 15′ W	不整隅丸長方形	108×55×15	南側に大きなピット1
18	N 12° 30′ E	隅丸長方形	130×50×20	南側に隋円形ピット中央に段
19	N 33° 30′ E	〃	136×48×35	
20	N 6° 20′ E	不整長方形	170×60×20	南側×ピット4
21	N 6° E	隅丸長方形	123×60×15	南側・中央に不整形ピット
22	N 5° W	〃	140×45×85	墓壙あり，石あり
23	N 32° E	隋円形	68×47×15	中央に段あり
24	N 18° 30′ E	〃	89×56×15	ピット状のもの1
25	N 50° 30′ W	〃	85×55×8	

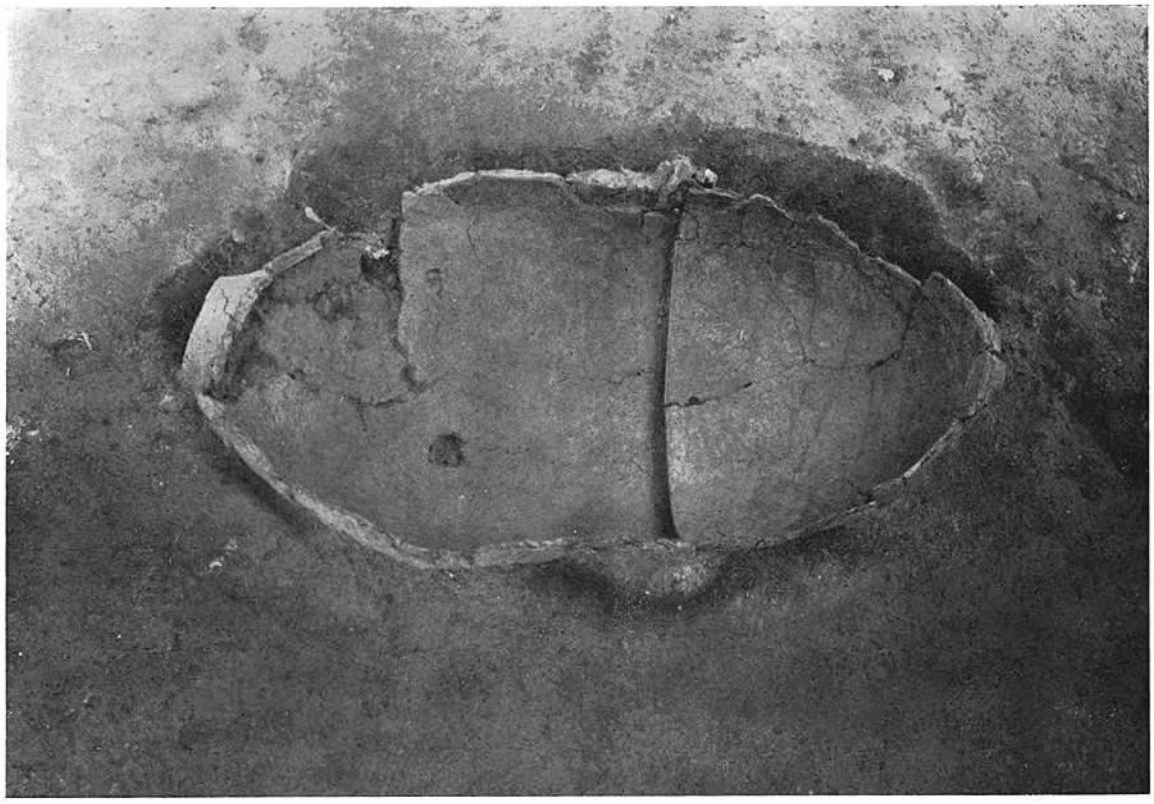
（1）遺　跡　遠　景（南より）

（2）遺構群西半全景（東より）

（1）遺構群全景（東より）

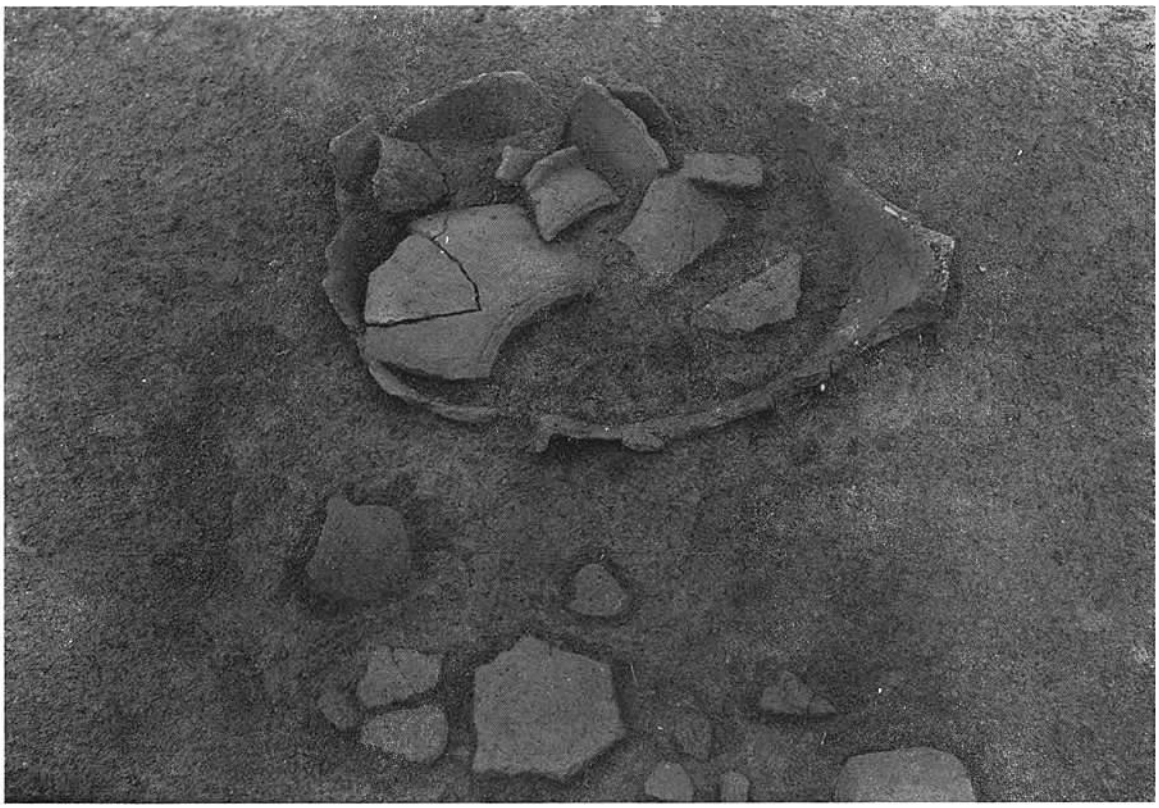
（2）南側トレンチ全景（北より）

（1）第1号甕棺発掘状況（北西より）



（2）第1号甕棺出土状態（北西より）

（1）第2号甕棺附近全景（東より）



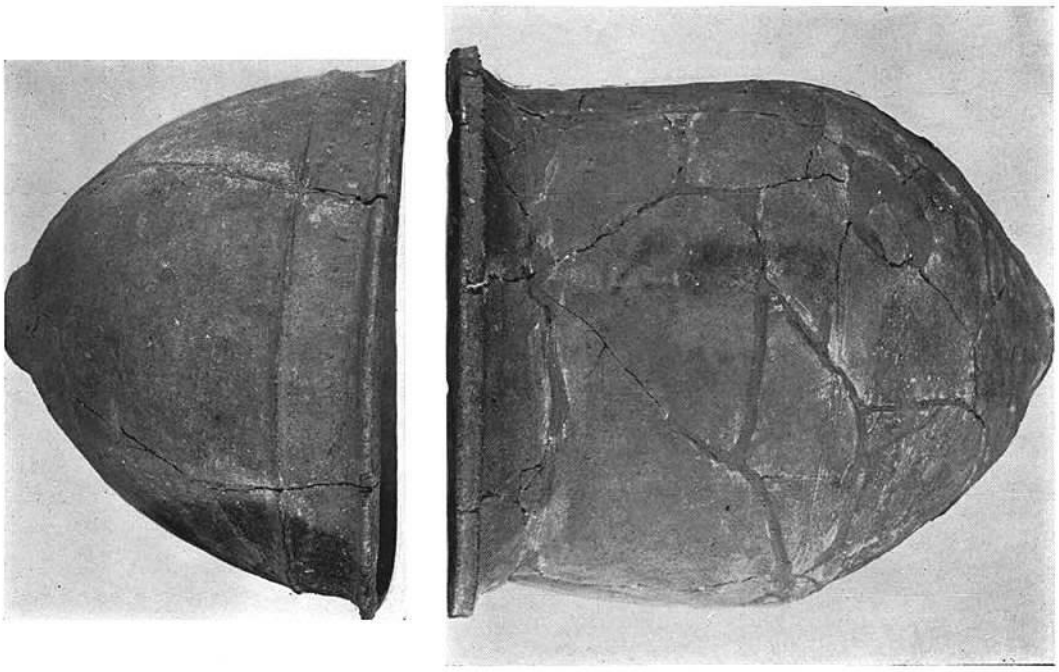
（2）第2号甕棺発掘状況（西より）

（1）第1号甕棺と周辺の土壙墓（北東より）

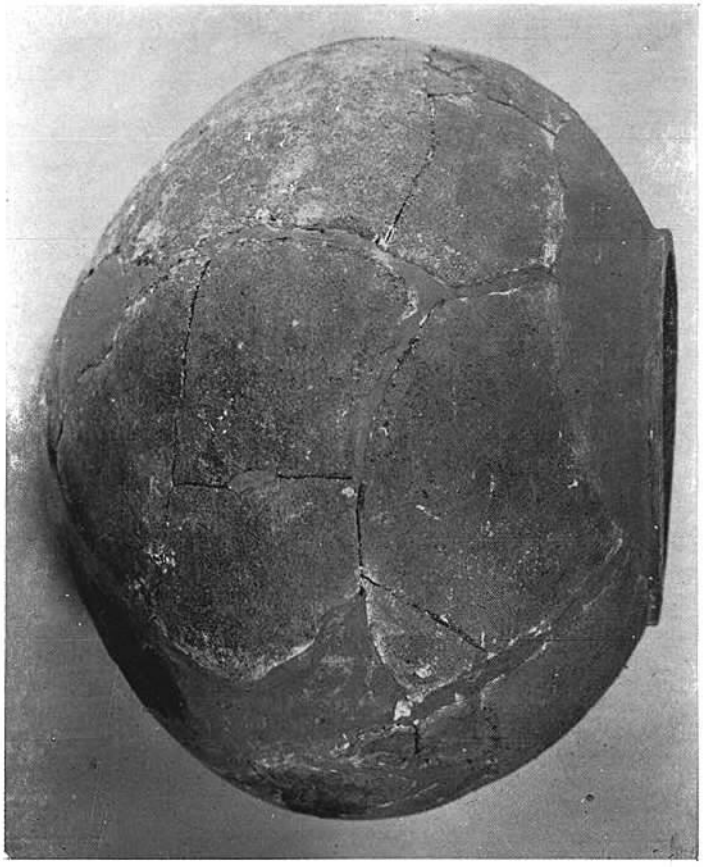
（2）土壙墓群北側全景（北東より）

（1）第4号・5号・16号土壙墓（西より）

（2）第 22 号 土 壙 墓（東より）



第1号甕棺



第2号甕棺

Ⅵ 後　　記

小郡市三沢，津古周辺遺跡の発掘調査が本格化したのは昭和43年の津古遺跡に始まる。それ以前から原田の五郎山古墳をはじめ津古周辺の弥生遺跡から遺物が採取されたり，横隈および三沢周辺で小規模な発掘調査が行なわれていたが，当地域の大規模開発事業が本格化したのは6年前といえる。その後，津古内畑遺跡の年次調査が実施され，九州縦貫自動車道が建設されるにあたって，付帯の土取り場およびその土砂を運搬する専用道路が施行された。これらの事業は小郡市の都市計画および県のニュータウン計画とも呼応し合った結果，いくつかの障害はあったものの，開発事業はより迅速に押し進められた。

昭和44年，筑紫野市常松遺跡，45年同隣接地の永岡遺跡および野黒板遺跡において大規模な弥生集落が露見された。一方，津古内畑遺跡は個人の宅地造成事業ではあったが，年次事業として44年以来すでに5年にわたって調査され，弥生時代前期末より中期初にかけての代表遺跡となっている。また小規模であるが44年三沢遺跡，45年花聳遺跡，46年正原遺跡が調査された。46年初頭自動車道の関連事業として三沢所在の県立種畜場が土取り場に指定された。予備調査の結果，弥生時代の集落址が広大な範囲にいたっていることが明らかとなり，多種方面から遺跡保存運動が巻き起り，県議会はいうに及ばず，国会でもこの遺跡の保存を巡って質議が交され，ついに土取り範囲を縮少し，遺跡本体の保存を確保することとなった。土取り場より鳥栖インターチェンジに至る土運搬専用道路内の遺構については本報文で述べたところである。結果的には当道路は5ヵ所の弥生時代遺跡を縦断することになり，津古・三沢地区の遺跡分布状況を，より詳細化した。このうち，当報文では触れなかった北牟田遺跡(上棚田遺跡の対岸北側)はその後九州縦貫自動車道建設のための土取り場となった。昭和46年および47年に北牟田遺跡を発掘調査した結果，丘陵全面より弥生時代前期末から中期に至る住居址，貯蔵穴および甕棺，木棺墓が多量に検出された。

このころから県企画開発課を中心として，当地域の大規模開発が起案され，東急不動産を中心として人口4万人のニュータウン計画が軌道に乗っていた。当地域をはじめ，横隈，筑紫野市隈地区を含む計画であり，当然開発関係の関連企業が犇めき合い，山林は蚕食されるに任された。計画隣接地である横隈山遺跡が開発化されるとあって事前調査が実施されたるは48年である。地元研究者を総動員し，同志社大学の助力を得て調査した結果，種畜場遺跡に連なる環湟集落をはじめ，プレ縄文時代より古墳時代に至る広大な遺跡が検出された。

6年間にわたる各地の発掘調査の結果，宝満川およびその支流に面する丘陵は全て弥生時代の前期末より中期に何らかの形で利用されており，大集落が隣接していたことが明らかとなっ

た。

思えば弥生時代前期初めに北九州に上陸した水稲耕作者が先住民を同化しつつ，前期末に丘陵上の生活を営んでいたのである。この山紫水明の地に，今や開発の名の下に各種の土地破壊が行なわれているのである。何と名状したらよかろうか。(酒井仁夫)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　-V-

昭和49年7月1日

発行　福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区大字那珂142

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

V

付　図

1974

福岡県教育委員会

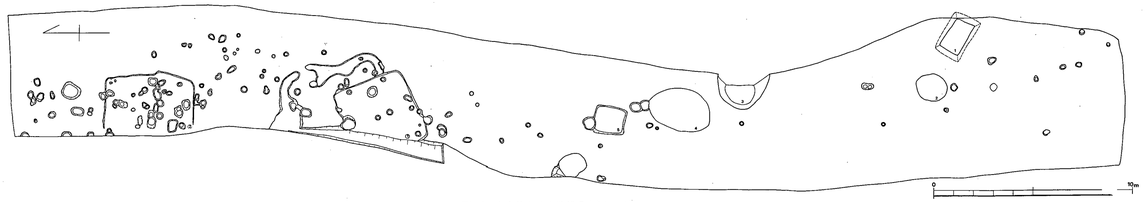


Fig 3　宮裏第３地点遺構分布図（縮尺1／160）

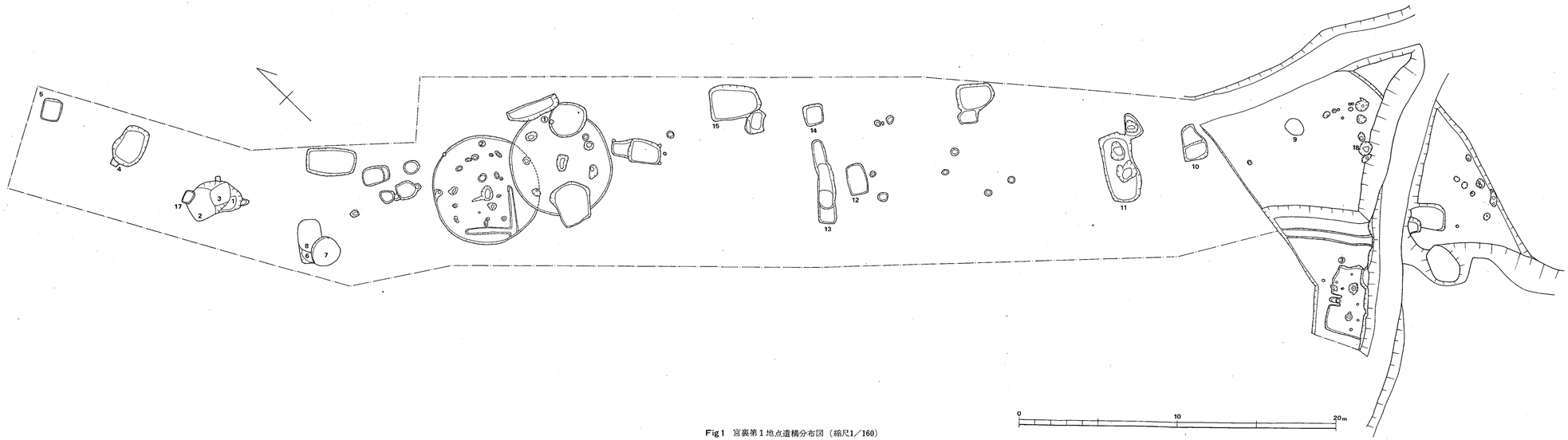


Fig 1　宮裏第１地点遺構分布図（縮尺1／160）

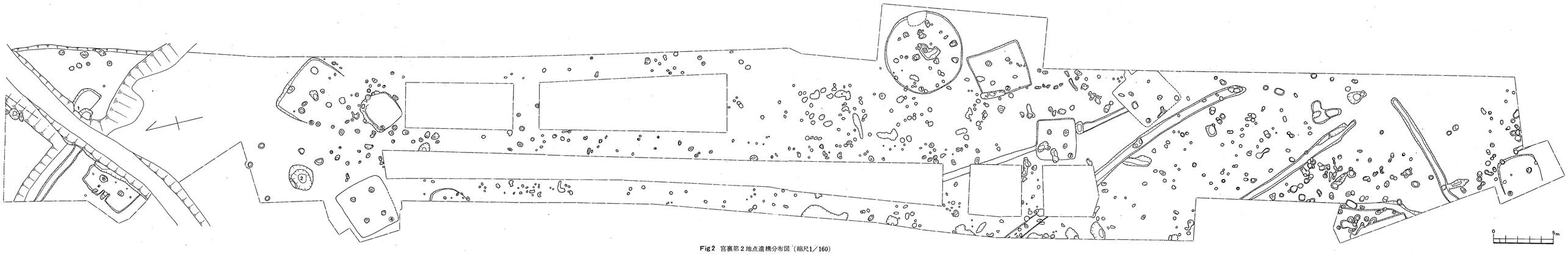


Fig 2　宮裏第２地点遺構分布図（縮尺1／160）

付　　図

Fig ①　宮裏第１地点遺構分布図

Fig ②　宮裏第２地点遺構分布図

Fig ③　宮裏第３地点遺構分布図